

不淨は、問題に措かない、たゞ外形の儀式を守る守らないといふ一點から、イエスに喰つてかゝつたのである。

(五) 是に於て、パリサイの人々學者等、イエスに問けるは、爾の弟子は、何故に古の人の遺傳に遵はずして、鹽はざる手を以てパンを食するか、

一見、實に下らない質問である、然し斯いふ質問は、今日に於ても、往々受ける事柄である、氏神の祭日に提燈を出さないのが如何だの、墓前に焼香をせなかつたのが悪いのと、ツマラス儀式を楯にして、非難するものも、今日に少くない、其時

(六) イエス答て彼等に曰けるは、イザヤは偽善者なる爾曹を指て、よく預言せり。其録し、言に、此民は、唇にて我を敬へども、其心は我に遠かり、

(七) 人の誠めを教となして、徒らに我を拜すといへり。

イエスは實に痛快なる言辭を以て、彼等の質問に答へ給ふた、のみならず彼等が尊べる聖書中の語を引用して、彼等の肺腑を刺し給ふたのである、全體人間は誰とて全く心に汚穢のないものはない、自己の汚穢や罪あることを自覺して、謙遜に神に仕へるものを、イエスは決して痛撃し給はない、然し、自分の内心に、不潔不

義の充てることを自覺しながら、厚皮しくも、表面は君子振り、宗教家振つて、外形の儀式を破つたものを、罪人呼はりをなし、咎め立てをする、イエスは此精神を、心から憎み給ふたのである、然しこれは獨り當時のパリサイ人の身の上計りではない、私等も、兎もすると、神の恩寵になれて、もはや立派な信者になり済したやうに考へ、他人の些細なる事、左のみ咎むべきでない事までも、コセ〜とほしくり出さうとする風がある、斯いふ連中が、イエスの前に出づれば、何れも此叱咤をうけねばなるまい、さてイエスがこゝに引用せられたのは、以賽亞書第二十九章十三節の語であるが、これはイザヤが、當時のユダヤ人の頑迷固陋なるを嘆いて述べた語である、イエスは此句を採つて、直にパリサイ人等に應用し給ひし技量は、如何に實際的に聖書を咀嚼して居られたかを知ることが出来る。

(八) 夫、爾等は、神の誠を棄て、人の遺傳を守れり、即ち鉢杯を洗ひ、おほく此の如き事を行ふ。

宗教家の通弊は、言語や口頭で「神々」といつて居りながら、其内心では神よりも人に對することが、其心を支配して居ることである、さういふ人々には、神はたゞ附たりで、其生活の上には、何の勢力をも及ぼして居らない、然しさういふ人々に限

つて口頭では、妙に神をほめちぎつて、何でも敬神顔に振舞ふのである、それ故に、もし他人が其人の爲る事に反對するか、但しは其人の意見に背く時は、それが直ちに、神に不禮をしたかの如く吹聴する、斯いふ宗教家は皆、キリストの罪人である、

(九) 又彼等に曰けるは、爾曹は、實に己の遺傳を守らんとして、能く神の戒を棄る者なり、

イエスは、たゞ徒にパリサイ人を痛撃なさるのではない、彼等が外形上、謹慎らしくして、内心には不義惡徳を充たし、儀式には、やかましく固泥して居りながら太切なる人倫を無視して居ることを實視し給ふから、今は其最も甚しい一例を指摘して、彼等の偽善を責め給ふのである、即ち、

(十) モーセ曰けるは、爾の父母を敬へ、又父或は母を罵る者は殺さるべしと、

(十一) 然る爾曹は曰ふ、もし人、父或は母に對ひて、爾を養ふべきものは、コルバン、即ち禮物なりと曰はば事へす可と、

(十二) 而して、人の其父或は母の爲に、何をも爲る事を爾曹許さず、

これは、實に痛快なる事實上の摘發である、「爾の父母を敬へ」の一句は、有名なるモーセの十誡の一である、モーセの十誡といへばユダヤ教に於ける欽定憲法ともいふべきもので、如何なる事情があつても、これに背くことは出来ないものである、の

みならず、今日から考へて見ても、決して背くまじき性質のものゝみを掲げて居る、其中にも、父母を敬へとの戒律は、人倫戒の最初に掲げられたもので、何人も特別に注意すべきものである、思ふにパリサイ人も、此事はよく承知して居たであらう、然し、彼等が餘りに人爲の儀式に固泥したる結果、終には此大切なモーセの戒律をも、無視するやうになり、然もそれを知す顔に、得々として居るやうになつたのである、彼等の考へでは、もしコルバン即ち儀式上に用ふる禮物の爲に、食物を要する時は、たとひ父母を饑やすことがあつても、止むを得ない、父母の飢餓を辛抱させても、コルバンの爲には、是非供物を捧げねばならぬといふにあつた、これも意味の取りやうによつては、別に怪むべきことではない、即ち眞に神の前に禮物を捧げねばならぬといふ精神で、御互に其食物を減少して、コルバンに供する程の信仰であるならば、それは恕すべき處もある、然るに此頃のパリサイ人等の爲す處は、全く左様ではなかつた、コルバンの爲に是が非でも、食物を供せねばならぬといふ嚴酷なる規則を制定して、之を強制するが爲には、父母に食べさす爲に用意した食物までも、無理に捧げよと命じ、もし捧げなければ、神の前に罪人なりとして處罰

するといふやうに致した、故に信者の中には、涙を呑んで、父母に獻ぐべきものを、止むなく供物にするといふ有様であつた、さうして其コルバンの御流は、結局祭司等の口腹を肥すことになつて居るから、驚かざるを得ない、あゝ彼等は、儀式の爲に人の子をして、父母に仕へることすら出来ざらしめ、さうして自分等は、得々と其供物を分配して、飽食して居たのである、イエスは、彼等が此無慈無情を敢てしながら、然も敬虔家らしくして居るのを、此上なく憎悪せられた、彼等の爲す處は、全く人爲の儀式で以て、神の命を給へる、大切なるモーゼの大戒を犯さしむることになつた。これ實に神の前に大不敬であるまいか、私は、此處に一言を申述べて置きたいことは、世の中には、往々キリスト教が、兩親を大切にせないとか、孝道を尊ばないとかいふ非難をする者があるが、もし此處に説かれし、イエスの精神を了解したる時は、さういふ非難は、全くなくなつて仕舞ふと思ふ、然し私等は、たゞ儀式的の孝道を行ふことを以て満足せない、人前計り良く見ゆる孝道に對しては、反つて反對することがある、それ故、世間一般にいふ、虚儀家や、頑固なる宗教家から見れば我々の孝道について、彼此非難することもあらうが、然しキリスト信者

が親に仕ふる道は、父母の精神を尊敬することを主として居るから、唯儀式的にハイ／＼と従つて居るが、眞の孝道ではないと信じて居る、正義の爲め、又親の精神を重んずる爲には、一時親の意に反するやうなことも辭せないことがある、此事を承知しておいて、馬太傳第十章三十四—三十七節や、本傳第三章三十三—三十五節を參考する時は、一層に其精神が判然するであらうと思ふ。

(十四) イエス又衆庶を召て、彼等に曰けるは、爾曹皆我言を聽て悟れ、

(十五) 外より人に入るものは、人を汚すこと能はず、然る人より出づるものは人を汚す也、

(十六) 聽ゆる耳ある者は聽べし、

パリサイ人を説破せられし後、イエスは再び羣衆に向つて、此言を吐かれたものと見える、こゝに私等の注意すべきは、十四節にも「我言を聽て悟れ」とあり、十六節にも「聽ゆる耳ある者は聽べし」と前後重ねて「克く耳を濟して聽けよ」と仰せられた、其肝腎な言は十五節であるが、如何にも此言は千古の卓言であると同時に、今日と雖も容易に人の耳に入り難い言であることを感ずる、全體汚れとか、不淨とか、罪とかいふと、多くは他から來るものゝ如く思ふのが一般の人情である、故に潔める

といへば、身体を奇麗にすること、思ひ、罪を拂ふといへば、鹽を振り蒔くか、潔齋の儀式をして、それで済むものゝやうに考へ、往生安樂を遂げるといへば、門跡様の御剃刀を頂戴したり、一片の祈禱念佛で出来るものゝやうに思つて居る者が、只今でも澤山にある、否、基督信者の中にも、浸禮と洗禮の差別で、罪障消滅があるやうに考へたり、教會や宗派の相違で、天國に入る事が出来るか出来ないかがあるやうに思つて居るものもある、甚しきは食ふ物に淨と不淨の差別を立て、牛肉を喰へば汚れる、鮪を喰へば罰が當ると、いろんな外物によつて、人間の精神が拘束せらるゝやうな信仰を有つて居るものも、全く其跡を斷たない、斯様な人々に對して、イエスは斷乎として、「外より人に入るものは人を汚すこと能はず、たゞ人より出づるものが人を汚す」といふ語を以てせられた、此語は今日の人々の耳にすら、尙解り難いものであるから、況して當時の人々の俚耳に入り難く、これをよく呑込んで玩味したる者は、至つて少數であつたらうと思ふ、たゞ當時の人々のみならず、弟子等にも實は其真意が解し兼ねたと見えて、

(十七) イエス衆庶を離れて、室に入りしに、其弟子たゞへの心を問ければ、

とある、此時の弟子等も、イエスの教を始終聽て居たものゝ、やはり其意が了解せられなかつた、そこでキリストは、

(十八) 彼等に曰けるは、爾曹も尙悟らざるが、凡そ外より人に入るものゝ、人を汚し能はざることを知らざる乎、

(十九) そはその心に入らず、腹に入りて内に造つ、即ち食ふ所のもの潔まれり、

と申された、十九節の語は、イエスが滑稽諧謔を交へて、話されたる面影がアリ、と見えて居る、私等は此言によつて、キリストは、決してたゞ堅くるしい偏屈一ベンの人間でなく、時々には斯いふ突飛な面白い語をも吐き給ふ方であることを知ると共に、聽者を笑はしながら、眞理を説き給ふことも見うけるのである、今此十八十九の兩節を假りに、平くいつて見れば「お前たちもわからぬじやないか、マア考へて見よ、口から喰つたものは、手を洗つて喰うが、洗はずして食やうが、其食物が決して精神に入るのじやないから、汚れる筈がない、口から食つたものは、皆腹に入るのじや、腹に入つて身體の用にたつた後のかすは、雪隠に出て仕舞ふのじや、それで喰つたものはすつかり潔つたといふものじや」といつたやうな御言で、一寸禪學の坊さんの話を聞くやうな心地がする、成程左様である、人の品性に關する罪と

か悪とかいふものは、決して水や火で浄められない、外物が心に入つて行爲をするのではない、元來神の前に恥づべき醜いものは、外物ではない、神の造り給へるものは、皆良きなりである、(提前四〇四)眞實に悪とか善とか義とか醜とかいふものは皆内から湧いて来る、即ち心から起るものである、故にイエスは

(二十) 又曰けるは、人より出づるものは、これ人を汚す、

(廿一) (乃ち)人の心より出づるものは、悪念、姦淫、苟合、兇殺、

(廿二) 盜竊、貪婪、惡匿、詭譎、好色、嫉妬、謗讟、驕傲、狂妄なり、

(廿三) 是等の悪行は、みな内より出て人を汚すもの也、

眞正の醜惡汚穢の原因は、心にある、心より出でて行爲に現はれ来る悪行が、これ人を汚すのである、されば斯る心の不淨に注意せずして、如何に手を洗つて見た處が、鹽で浄めて見た處が、それは何にもならぬ、イエスは宗教上の眞正の清潔といふは精神にありとのことを、こゝに明白に説示せられた、これ然し古代のバリサイ派計りでなく、今日大多數の宗教家等も、此惡徳の出で来る根本なる、心の清淨を眞面目にする考へなくして、たゞ祭壇を飾つたり、法衣を美しくしたり、外形の儀

式計りを町重にして、それで宗教上の眞髓を得たものとして居るが、これが抑々間違の原因である、さて、こゝにイエスが列擧せられた諸々の悪行の中にて、意味の不明なるものを一二説明すれば、姦淫とは、姦通の事、苟合とは私通の事、惡匿とは俗に曲けた心といふ程の事、謗讟とは、神を言ひ汚す事、狂妄とは馬鹿の向見すの行爲をする事である、其他の文字は大抵説明せずとも判ると思ふ、斯いふ諸の悪行の現出し来る原因は、罪の心である、罪の心、これが萬事の悪行の根本となつて、自分を惱まし、又他人をも苦しめるのである、イエスは人間の奥底に固着せる此罪の心が浄められない限りは、いくら外形の儀式や、潔齋を盛にしても、それは徒に偽善となる計りで結局バリサイ主義に陥るより他はないと觀られた、これは、然し、今日我々の間にも、屢々陥り易い、又陥りつゝある弊害である、私等はイエスの此一句を深く玩味するに至らば、今日より全く異りたる靈的境界に入ることが出來やう、斯く思へば、古代のバリサイ人等の偽善を蔑視するのみならず、又今我心中に潛める罪に對しても、一層の反省を促がし、眞に根本的の改心をなさねばならぬことと思ふ。

五 イエス、ピニケ地方に赴く(第七章二十四節以下三十節)

二十四節以下三十節は、イエスがツロとシドンの地方に、巡回せらるゝ際、異邦の一婦人が、キリストを信じて、其娘の癒さるゝ話である、これは馬太傳第十五章二十一節以下二十八節にも載て居る。

(廿四) イエス此を去りて、ツロとシドンの境にゆき、家に入りて、人に知られざらんことを欲ひしが、隠れ得ざりき、

ツロとシドンは、ガリラヤの北隣、フィニシヤの二港であつて、古代より有名な場所である、さて本文には「ツロとシドンの境」とあるから、イエスは殆どガリラヤの北端まで往かれたことが判る、(地圖を参照せよ)何故に、斯様な邊鄙の地方まで往かれたかといふに、これ一つは反對者の暴舉を避くる爲であつたと思ふ、馬太傳十五章十二節を見ると、バリサイ人等は、イエスに對して、甚だしく不快の念を懐いて居た、又路加傳第九章九節には、ヘロデ王が、ヨハネを慘殺した後、イエスを彼の生れかはつたものと思つて、熱心に探索して居る様子が見える、此等は皆イエスの身上に、危険な徴候であつたから、イエスは暫く彼等の氣を抜かんが爲に斯く邊

鄙に御避けなされたものが見える。然しイエスの名聲は、既に此邊までも傳へられて居たものと見えて、全く跡をかくすことが出来ない、彼がある家にて靜に休息せんと欲し給ふ時、直ちに一人の婦人が、イエスを尋ねて參つた。

(廿五) そは悪鬼に憑たる幼き女を有る婦、イエスの事を聞て來り、其足下に伏したるによりてなり、

(廿六) 此婦は、サイロニビケに生れしギリシヤの者なりしが、悪鬼を其(幼)女より逐出し給はんことを、イエスに求へり、

サイロニビケとは、シリヤに永住して居るフィニシヤ人のことである、ギリシヤ人とは、當時ユダヤが、一般外國人を指した名稱で我國でいへば異人とか唐人とかいつたやうなわけである、さて此婦人は、如何してイエスを知つて居たか解らない、亦彼女はこれ迄、親しくイエスの御教を聞いたことがあるか、それも明白ではないが、然し兼てイエスの神より遣はされたる、救主であることを信じ、日頃、追慕して居たものと思はれる、處が今回計らず、自分の住める斯の邊鄙にまで御出になつた、のみならず、自分の愛する娘が病氣であつたので、イエスの許に哀願しに參つたのである。然るに、イエスは最初甚だ冷淡に彼女を待ひ給ふた、即ち、

(廿七) イエス彼に曰けるは、まづ兒女に飽かしむべし、兒女のパンを取りて、犬に與ふるは善らず、

馬太傳を參酌して見ると、此場の狀況が、一層詳細に解る、イエスは、最初此婦人に對して、一言の返答をもなさらない、其時弟子は、氣の毒に思つて、斯くイエスに告げると、イエスは「われはイスラエルの家の、迷へる羊の外には遣されず」と仰せられて拒絶なさつた、然るに此婦人は、尙もうるさく哀願するので、三度目に、此節にある言を御吐きなされたのである、「兒女」とはイスラエル人を指し、犬とは異邦人を指したもので、當時のユダヤ人は、外國人を嘲つて「犬」と呼んで居たのであるから、イエスは其嘲弄語を其まゝに採用して、此婦人に答へられたのである。イエスは何時になく斯る不穩の言を以て、婦人の請を拒絶せられたのは何故であるか、これには種々の考へもあらうが、イエスは此時自分の事業は、まづユダヤ人中に限らるべきものと、異邦人に對しては、まだ其時機は來らないとの意見を持つておられたのであらう、又此婦人は、世間の人々が噂するからとて、一片の好奇心から、自分の許に來つたものであるまいか、それならば、大に彼女の心を反省せしむる必要があると思はれ、ワザと斯る無情な御言を以てせられたものであらうと思ふ、「尊き神の恵は、まづ神の兒女たる、我が同胞の上に飽かさねばならぬから、御身のや

うな、外國人、即ち犬に施す必要はない」と、これは實にヒドイ言である、もし普通の者ならば、此一言を聞いて、直にムツとせぬものはあるまい、「ナニ、イエスだの救主だのつて斯様いふ傲慢無禮な言を吐く奴ならば、もう頼みはせぬ、ジユ一奴」といつたやうな塩梅で、其まゝに立ち去つて仕舞ふに相違ない、然るに此婦人は、案外にも謙遜であつた、自分を犬と罵しられながらも、尙イエスに縋ることを止めなかつた、乃ち、

(廿八) 婦人答へて曰けるは、主よ然り、されど犬も案の下にありて、兒女の遺屑を食ふ也。

あゝ、何たる謙遜にして、且道理ある言語であらう、「主よ、然り」あなたの仰せは御尤であります、決して御無理ではありません、あなたは元來イスラエルの爲に、御出になつた方であることは、よく存じて居ります、それ故、私等異邦人が大きな面で、あなたから、恩恵を頂戴する理由はありませんこの意味で、「主よ、然り」の一句を述べた、如何に此婦人のやさしい、事理に明白な心を表はして居るかを察し得られる、されども彼女は「然し」犬も同じ家に畜はれたる一族である如く、異邦人も同じ神様の雨露にて養はれる一族である、それ故正當の御馳走に與ることが出

來ずとも、其遺たる屑は、犬にも御與へ下さいませうと、此言を御聴きなされたイエスは、如何程御感じなされたであらう、又如何程御悦びになつたであらう、「兒女」の間には、誰も眞面目に、自分を信する者なき時に、「犬」と呼ばるゝ此異邦人の一婦人は斯く迄自分を尊信して居る、思ふに此時イエスはかのロマの百人長が、自分に對する熱き信仰を表はしたことを（馬太八〇五—十三）思ひ起し給ふて、何れも異邦人であるが、實に好一對の信仰家であると感じ給ふたであらう、こゝに於て、

（廿九）イエス婦人に曰けるは、此言に因りて歸れ、惡鬼は爾の女より出たり、

（三十）婦人、其家に歸りしに、惡鬼既に出て、牀に女の臥たるを見る、

馬太傳を見ると、イエスは婦に向ひて「婦よ爾の信仰は大なり、願の如く爾に成るべし」と言はれたとある、イエスの口から、爾の信仰は大なりとの賛辭をうけたものは、甚だ稀である、此婦人は實に幸福な人である、私等は此一段に於て、信仰の何たるかを學ぶことが出来る、信仰はたゞ信じて居ればいゝといふ計りではない、又信じさへすれば、主は何でも直に與へ給ふといふ考計りではない、此婦人が、最初イエスに對した時は、イエスから何等の言も受けなかつた、謂はゞ不問におか

れて居つた、さて其次には、嫌はるゝやうな話をうけた、又其次には拒絶せられた、私等が信仰上の經驗にも、これに、よく似たことがある、私等が神に願つて見ても、神はたゞ黙つて居給ふ、又我願を嫌ひ給ふやうな時もある、否時には拒絶せられて居るやうに感ずることもある、其時我から氣を落し、失望して仕舞へば、それ切りであるが、此婦人のやうに、其等を排して尙も謙遜に、且熱心に、得ざれば止まない信仰を有たなくてはならぬ、信仰が山を動かすといふ意味も、蓋しこゝにあることと思ふ、私等は、信仰によつて、神及び主イエスの心を動かす「爾の信仰は大なり、此言によりて歸れ」といはるゝ程のものとならねばならぬ。

ある人はイエスがユダヤの北境に於て、此異邦の婦人に御接しになつたことは、後代の異邦傳道の精神の預表ともなり、又端緒ともなつたものだと見て居るが如何にも左様であらう、ユダヤ人は、イエスを嫌つて受け入れないに反して、ギリシヤ人は、實に渴望して彼を待つて居た、さらば此段の出來事は、實に偶然であつたものゝ、然し使徒等が後代に世界に福音を傳へねばならぬといふ精神を發揮したるも、全く斯ういふ邊から起つたものに相違ない、イエスも此旅行に於て、一層ギリシヤ

人の爲に、同情を寄すべきことを御實驗なさつたに相違ない、

六 イエス、デカポリスへ歸る（第七章三十一節以下三十七節）

三十一節以下三十七節は、イエスがユダヤの北邊から引返して、デカポリス地方にて、奇跡的療治を爲し給ふ記事である、これは馬太傳第十五章二十九―三十節にも記されてあるが、本傳の記事は、格別精細にして、特別の趣味を帯びて居る。

(卅一) イエス、ツロゴシドンの地を去りて、デカポリスの地を過ぎ、ガリラヤの海に至れり、

イエスは、ツロゴシドンの地方に、幾日間程滞在せられたか解らないが、餘り永い事ではなかつたと思ふ、馬太傳を参考すると、イエスは其處を去られてから、ガリラヤ海邊の山に登られた時數多の人々が、癒されんが爲に、參つたとある、こゝに「デカポリス」とあるは、十ヶ市といふ意味で、ガリラヤ湖の東北十ヶ村ある地方一帯の總稱である。

(卅二) 人々、聲の語る者を、イエスに携へ來りて、手を接し給はんことを求めければ、

(卅三) イエス衆人を離れ、之を外へ携ゆき、指を其耳にさし入れ、又唾して其舌に押し、

(卅四) 且天を仰て歎じ、其人に對ひて、エツパタといふ、これを譯ば、啓きよの義なり、

何故に、イエスが此者に限つて、斯る念入の行爲をなし給ふたかは解らないが、思ふに、其者がイエスの爲す處を、殊更に注意して、信仰するが爲であつたと思ふ、又斯ういふ仕方が、此處の人々の爲に、何等かの利益があつたのかも知れない、恰も約翰傳中に、一人の盲者が、癒さるゝ前に、其目に泥を塗つて、ワザ／＼シロアムの池に往て洗へど仰せられぬたと同一の精神であらう、「歎じ」とあるは、祈禱の節、大息をつく事である、今日でも、我々信者の中に、祈禱の節大なる呼吸をする人を折々見うける。

(卅五) 直に其(人の)耳ひらけ、舌の絡ゆるみて正しく言へり、

(卅六) イエス之を人に告る勿れと、彼等を戒むれば戒むる程益言論しぬ、

これは、前章にもあつたやうに、此癒されたものは、感謝喜悅の餘りに、イエスの戒をも打忘れて、人々の中へ、此事を言ひふらしたのである、こゝに於て、

(卅七) 衆人甚しく騒きて曰けるは、此人の行し所、ことごとく善し、あるひは聾者を聞えさせ、或は啞者を言はしめたり、

一般人民は、イエスの爲す所に感激し、且尊信して、いよ／＼崇拜するやうになつ

た、馬太傳には、この時に又種々なる病人癡人を携へ來る記事が掲げてある。(太十
五〇三十、三十一)

七、再度のパンの奇蹟 (第八章一節以下十節)

第八章一節以下十節は、イエスが再びパンの大奇蹟を行ひ給ふ記事である、これは馬太傳第十五章三十二節以下三十九節にも載つて居るが、ある人は、此記事を以前にありし五千人のパンの奇蹟譚が、重複して再記せられたものか、但しは、イエスの一回の大奇蹟が、兩回に傳へられた結果、同じ事が二度記されたものだと考へて居る、果して左様か左様でないかは、今日から判断を下すことは困難である、然し兩福音書ともに、兩回記されてあるのみならず、本傳第八章十九節以下、(馬太傳第十六章十節以下参考)の、イエスが弟子との問答中にも、此奇蹟が、確に兩回あつたこの言を見とめるから、もし兩回であるとする、此大奇蹟は、デカポリス近傍の野にてありしこと、考へられる、さて其記事の内容に至つては、別に前章にあつたものと異なつて居らないから、たゞ其大要を説明する計りに止めておく、

(一) 當時あつまれる人々、甚だ多かりしが、何の食物も有らざりければ、イエス其弟子を召て曰けるは、

(二) われこの多の人々を憐む、既に三日われと共に居りし故、今何も食物なし、

(三) もし飢しま、其家に歸せば途中にて燃ん其中に遺棄より來れるものあればなり、

彼等は、最初多少の食糧を持つて來て居たのであらうが、イエスと共にある間、食物のなくなるのも、忘るゝ程に至つた、彼等とイエスの間の交際が、如何に熱かつたかを略察することが出来る。

(四) その弟子彼に答へけるは、此野にて何處よりパンを得て此人々に飽かしめんか、

弟子等が、一度五千人にパンを與へられたる大奇蹟を目撃しながら、再び此問を出すは、少しく心得ぬやうであるが、然し後段十五節以下二十節に記したる、パリサイ人の麪酵を謹しめよとの、イエスの注意につき、弟子等がやはりパンのなき故に、斯くいひ給へるものと解した精神と比較して見ると、こゝの間が、必ずしも不思議でないやうに思はれる、俗にいふ通り、「喉元を過ぐれば熱さを忘るゝ」とかで、われも恩恵に馴るゝと、積極の方面よりも、兎角に消極の方面に、目がつき易くなる、日々神の洪大なる恩恵に浴しながら、尙時々神の力の足らざる事をこぼすこ

とがある。

(五) イエス彼等に問けるは、パン幾何あるや、(彼等)七と答ふ、

(六) イエス人々に命じて、地に坐せしめ、七のパンを取りて謝し、之をわり、人々の前に陳せしめんが爲に、其弟子に與へければ、即ち人々の前に陳り、

此時は、前とは違つて、青草の地ではなく、至つて荒れた原野であつたと見える

(七) 又小き魚を些須もてり、之をも祝して、人々の前に陳さいふ、

(八) 人々これを食てあき、其餘屑を七の籃に拾へり、

(九) 之を食へる者、凡そ四千人なり、乃ちイエス之を歸しむ。

此時は前の場合とは、人数が少数で四千人とある、これは勿論婦人や小兒を除いての數である、尙ある研究家の調査によりて、以前の場合と此時の場合との相違の點を示すと、

一、此處には、人々がキリストと三日間ありしといふ記事があるが、前の時には其事なし

二、こゝには七つのパンと僅少の魚とあるが、前には五のパンと二の魚とある、

三、こゝには食せるものは、四千人とあるに前には五千人とある、

四、こゝには七の大なる糸製のかごに、餘の屑を拾へりとあるに、前には十二の小き柳行李に拾へりとある、

五、前の場合には、パンの結果、人民等はキリストを擁して、王となさんとする程、激昂したが、デカポリス及び海の東邊の人々には、イエスに何等の注文もせずして、其まゝに歸つた、

成程詳細に彼此を参照して見ると、兩者の間に多少相異なる所があつて、兩者共にありしものたることを、信ずるに至らしめる、

八、パリサイ人、イエスに休徴を求む (第八章十節以下十三節)

十節以下十三節は、パリサイ人がイエスに休徴を求めんとして來る時彼等と問答せらるゝ記事である、これは馬太傳第十六章一節以下四節にも載つて居る、さきパリサイ派の學者等は、わざとエルサレムからやつて來て、イエスと對論を試み

た、(第七章一節以下二十三節参考) 其結果イエスは、暫時、北方の地方に彼等を御避けになつたが、今再びガリラヤ地方へ御歸りになると彼等は亦直にやつて来て、妨害を加へやうと致したのである、これを以て見ても、彼等が執拗にして、何處までもイエスを倒さなければ止まないといふ、毒々しき精神が見らるゝのである、

(十) イエス直に其弟子と共に、舟に乗りて、ダルマスタの方に往きしに

馬太傳には「マダダラの境に到る」(第十五章三十九節)とある、ダルマスタは、其近傍の地名であらうと思ふ、イエスは四千人の男女に、糧を與へて後、直に其處を離れ、弟子等と舟にて、湖水を横切られたものと見える、處へ

(十一) バリサイの人数で、彼を試んが爲に、天よりの休徴を求めて語り始め、

當時のユダヤ人等は、メシヤが此世に来る節には、必ず何等か著しい休徴を顯はして、一般の人心を満足せしむるものと信じて居つた、さうして其休徴とは、何か特別外部に現はれ来る、不思議な事柄であると思つて居つた、假令ば、古代モーゼが、天からマナを降らせたとか、エリヤが祈つて雨を降らしたとか、又ヨシユアが暫し太陽の運行を止めたとかいふ、言傳にかぶれて、苟くもメシヤとして世に現

はれ来るべき者は必ず公衆の前に、何等か斯の如き不思議の休徴を表はすべきものであると信じて居つた、故にパウロは哥林多前書に於て「ユダヤ人は休徴を求む」(一章二十二節)と評した位である、ことに頗迷なるバリサイ人等は、此の休徴事件で、メシヤの眞否を定めやうとする位であつた、それ故、彼等がイエスに對して休徴を求めたことは、一再ではない、(約翰第二章十六、同第六章三十節、馬太傳第十二章三十八節等を参照) 然し考へて見ると、これは實に理屈に合はない話である何故なれば、彼等もしイエスの爲されたる行爲を公平に觀察したならば、其處に不思議なる休徴の存することは、一目瞭然である、かのバブテスマのヨハネがある時弟子を遣はしてイエスのメシヤたるや否やを尋ね來つた時、イエスは其使者に答へて「爾曹が聞くところ、見るところの事を、ヨハネに往て告よ、替者は見、跛者は歩み、癩病人は潔まり、聾者はきき、死たるものは復活され、貧者は福音を聞せらる、凡そ我ために躓ざる者は福なり」と仰せられた、(太十一〇二一六) これは、イエス御自身が、メシヤたるの休徴は、日々の行爲によつて、明に察知せらるゝではないかとの事を語られたものである、しかしバリサイ人等は、元來イエスを信せん

爲に、休徴を求めたのではなく、たゞ彼を試みたために、斯く詰るのである、其心なくして、愚弄半分ぐろうはんぶんに休徴を求むるのであるから、たゞひイエスが、それを御示おしめになつたからとて、それで彼等の心が碎けるものではない、ある人は、もし此時、イエスが何等か目醒めざましい、彼等を驚かすに足るやうな休徴を示されたならば、彼等は定めて恐れ入つて、歸服するであらうにと考へたであらうが、これ實は笑ふべき皮相ひさうの見である、人を信じ、人に服するといふ一事は、たゞ外形的表面上の嚇かし半分はんぶんの事柄では、成功さるゝものではない、況んや神を信じ、救主を信するといふが如き、高尚なる念は、決して斯る事柄で、成遂らるゝものではない、イエスは、此事をよく御承知であるから、次の如き嘆息の語をお吐きになつたのである、即ち

(十二) イエス心の中に、深く嘆息して曰けるは、此世の人(は)何ぞ休徴を求るや、誠まことにわれ汝等に告ぐ、休徴は此世の人に必ず與へられじ、

(十三) イエス彼等を離れて、復舟に乗り、彼方の岸に濟れり、

イエスは、パリサイ人等の心が、實に頑執がんしつにして、公平なる眼光を有せず、少し真面目に着眼すれば、十分に認め得らるゝに關はらず、殊更心を頑くして、斯る解

り切つた輕薄な注文を出して、試みやうとする、其心事の陋劣卑怯なるに、殆ど愛想をつかされたのである、元來神の休徴は、神を信する真心ある者の眼に、始めて見ゆるのである、其人に信仰なくんば、たゞ如何なる奇跡も、無益である、これは以前五千人や、四千人に對して、パンの奇跡を行ひ給ふた例を以てしても、知らるゝのである、然しこの事は、たゞイエス時代の人心を示したのみでなく、現今に於ても、矢張りこれと同様なる現象を屢見うけられる、ある宗派では、頻に金錢米穀などを施して、信者を募らうとして居るが、斯いふ關係から出來た信者は、全体がパンの爲に信仰して居るので、パンがなくなれば、直に不信者と化して仕舞ふ、又ある信者は、自分の病氣に著しい利益の加はることを願つて、信仰して居るが、幸にして其功驗があると、一層信仰を厚くする、又自分の事業に、奇跡的の援助が加はつたとき、一層熱心になる、私は斯いふ人々の信仰を別に咎めるではないが、然しこれ計りでは、たゞ休徴を求むる爲の信仰で、一の休徴が彼等を満足させると、又其次の休徴が欲くなつて、常に自分の氣に入るやうに、休徴休徴と休徴を計り追ひ求め、之がない限りは、到底信仰の持續せられない信者となつて仕舞ふ、然し真

正の信仰は、決して斯るものではない、又休徴を求むる信者は、決して終まで眞面目な信仰生涯を仕遂ることは出来ない、さればイエスが、此世の人には休徴は與へられじと仰せられた意は、此世の人心は、休徴によつて到底濟度し難いことを宣言せられたのである、然しわれは、眞面目な信仰の眼を以て、日々の事柄を觀察する時は、事々物々殆ど神の恩恵の休徴ならぬものはない、されば、何ぞ殊更に休徴を求むるの必要があらう、此邊の事柄は、たゞこれを古代のバリサイ人の出来事のみと思はず、深く自分一身に省みて、注意する所がなくてはならぬ。

九、弟子等の不覺 (第八章十四節以下二十一節)

さてイエスは、バリサイ人等と、無益なる對論をすることの五月蠅さに、又再び舟にて彼方へ引かへされた、十四節以下二十一節の說話は、其時に起つた事柄と思はれる、これは馬太傳第十六章五節以下十二節にも出てあつて、當時の十二弟子等の信仰が、如何に未熟であつたかをも、窺ひ知ることが出来る。

(十四) さて弟子パンを携ふることを忘れ、たゞそのパンのみ舟にありき、

(十五) イエス彼等を戒めて曰けるは、戒心してバリサイ人の麴酵と、ヘロデの麴酵とを慎めよ、

馬太傳によると、イエスの此忠告は、彼方の岸に着してから、後の事であることが解る、イエスは數回バリサイ人との對論によつて、よく彼等の心事を見ぬき給ふたものと察せられる、馬太傳には「ヘロデの麴酵」を「サドカイの麴酵」としてあるが、此三者は何れも神に反對する三方面を代表して居るものであつた、即ちバリサイ人は、一種の熱心はあるが、偽善であつた、サドカイ人は、冷淡な宗教家で、然も其心中は不信仰であつた、ヘロデの黨派は、信仰も何もあるのではなく、たゞ此世の權勢に阿附して、俗界によりて利益を取るが目的であつた、さうして此三者は、何れもユダヤ人であつて、矢張りメシヤを望んで居ると稱する輩であつたが、彼等の思想感情が、不知不識の間に、當時の社會に浸漸して居たと見えて、十二弟子の如きも、何時しか、これにかぶれて居たやうにも思はれる、さきにバリサイ人等が、天よりの休徴を求めた時、イエスは頭から之を排斥せられ、直に舟で湖水の彼方に引かへされた、此等の所置は、弟子等の心中にやゝ不滿の様子であつたかの如くに見えた、實の處師たるキリストが、バリサイ人等の前で目醒い奇跡でも

行ひ給ふたならば、彼等を一言の下にへコマカせると共に、大に自分等の肩見も廣くなつて面目を施すものをどの感も胸中に持つて居たので、其不満の面色が、いつしか彼等の表に顯はれて居るのを、イエスはさきくも見て取られたから、突然此忠告を與へ給ふたものと見える。

「麪酵」とは、パン粉が膨らさるゝ原料である、その如く、自分の精神も、パリサイ主義の悪しき麪酵に、薰化さるゝ意を麪酵に比へて、述べられたのである、(麪酵を悪の感化に用ゐたる例は、哥林多前書第五章六、七節、加拉太書第五章九節をも参照) 然るに弟子等はその意を悟らずして詰らぬ處へ邪推を廻した、乃ち

(十六) 弟子互に論じて曰けるは、是パンを携へざりし故ならん、

(十七) イエス之を知りて、彼等に曰けるは、何そ互にパンを携へざりしことを論ずるや、未だ悟らざるや、爾曹の心尙頑きか、

(十八) 目ありて見えざるか、耳ありて聽えざるか、また覺らざるか、

此數節を見ると、十二弟子等は、一向イエスの精神が判つて居らなかつたやうに見える、イエスが麪酵を慎めよと曰はれたことは、パリサイ人や、サドカイ人等が食ふと同じパンを食ふなどの意味を解し、吃驚したのである、何故なれば携へたる

パンは唯一個であるから、これで師弟十三人の腹を肥やさんことは、思もよらないさればとて、師はパリサイ、サドカイ人等のパンと同じものを食ふなどの命令だがこれはどうも、殺生な御言だと判じた、如何いふわけで、師は、斯様なことを言はるゝのかと、彼等は以前の休徵事件の不滿に加へて、今又此難題が出たので、甚しく不興に感じたのであつた、斯いふ處を讀んで見ると、十二弟子等は、一年有餘もイエスに隨從しながら、抑何處に師の教を聽て居たものか、如何いふ精神で、師に従つて居たのか、今日の我々さへも、其幼稚な様に驚く程であるから、ましてイエスの御心になつては、實に情なく御感じなされたであらう、されば御覽なさい、こゝにイエスが、かへすゝも彼等の朦昧を注意せんとて、「目ありて見えざるか、耳ありて聽えざるか、また覺らざるか」と語を重ねて詰責せらるゝを、此を話さるゝイエスの眼中には、恐らく熱い涙が流れて居たであらう、十二弟子等が、如何に無學であるにせよ、イエスの御教訓が、パンの小言と聞えたとは、餘りの不覺ではなにか、あゝ考へて見ればツイ先刻イエスは、四千人を養ふべきパンを御作りになつたではないか、彼等が師の心を解せざるも、實に甚しいといつて宜ろしい、然しイ

エスは此沒曉漢の弟子にも絶望し給はず、啗んで含めるやうにして、次の問を出して、彼等の矇昧を開き給ふた、即ち

(十九) われ五千人に、五のパンを擘與へし時、其餘屑を幾箇ひろひしや、(彼等)答へけるは十二なり、

(二十) 又四千人に七のパンを擘與へし時、其餘屑を幾箇ひろひしや、(彼等)答へけるは、七なり、

(廿一) イエス彼等に曰けるは何ぞ悟らざるか、

私は此段を読む時、イエスが短見無識なる弟子等を御厭ひなく、其心を開いて自ら悟り得るやうに循々として示導し給ふ骨折の様を見て、實に感服の外はないのである。數多の人々に傳道する時、牧師傳道師が、教會員に接する時、矢張りイエスの斯いふ循々として倦まざる精神がなくなれば、到底其働を完ふせられないと思ふ、如何なる頑愚なものである、斯いふ風に教へられるならば、必ず發明する處があるに相違ない、馬太傳の方を見ると、此時弟子等は「其麪酵にはあらで、パリサイ、サドカイ人の教を慎めとの意なることを悟れり」とある、(太十六〇十二) 弟子等もイエスの熱涙を注いでこの教導には、やゝ其真意が解せられたと見えて、今更の如く自己の不信無識を取ちたのであらう。

十、ベツサイダにて盲人醫さる (第八章二十二節以下二十六節)

二十二節以下二十六節は、ベツサイダに於て、盲人の癒されし記事である、此奇跡は馬可傳だけに掲げられて居り、其上他の奇跡と異つて、一時の治癒でなくして漸次に恢復する様を記してある、又イエスが御癒しなされる手續も随分念を入れられた様子が見える。

(廿二) イエス、ベテサイダに至りければ、人々醫者を携來りて、之に手を接給はんことを求へり、

このベテサイダは、ベテサイダユリヤといつて、ガリラヤ湖の東北岸にある村であつて第六章四十七節のベテサイダとは別の地である、(地圖を参照) さてイエスは、こゝへ連れ來れる盲者に對して、特別に念の入つた治癒を行ひ給ふた、即ち第一に

(廿三) イエス醫者の手を執りて、村の外へ携出し

第二に

其目に唾して

第三に

第三編 ガリラヤに於ける危機

手を彼に接ぎ、問けるは、何か見ゆるや、

何故斯いふ風に鄭重になされたか、其意は解らないが、これ一つはユダヤ人が休徵を求むる其望に、暗に答ふるため、又一つは、弟子等の信仰を増さんためであつたかとも思はれる、さて此奇跡は、今日でいふ信仰療治では解釋の出来ないものである、何故ならば、盲人の目は一時に開けたのではなくして、漸々に明瞭になつて来たのである、こゝに特別、奇しき靈力が加はつたことを見認めずには居られない、イエスの少し見ゆるかとの問に答へて、

(廿四) 瞽者目を擧げて曰けるは、我此人々の歩行を見るに樹の如し、

見える事は見えるが、未だボンヤリして明白ではないと盲人は答へた、こゝに於て第四に

(廿五) 遂にイエス、また両手を彼の目につけ、其目を擧させければ、乃ち癒て、庶物あきらかに視たり、

(廿六) イエスを彼を其家に歸らせ曰けるは、此村に入る勿れ、且此村人にも告る勿れ、

これで見ると、此瞽者はベテサイダの者ではなく、近村の人であつたことが解る、さてこゝにても、イエスは例の如く、自分の爲したことを、公然人々に告げるなど

禁せられた、英語改正譯聖書には「且此村人にも告ぐる勿れ」の一句は省略してある、大方正しい原本には無かつたものと見える。

こゝに一寸注意しておくべきことはイエスはこれまで、主として一般公衆に對して教を垂れ給ひ、また種々なる慈善を行ひ給ふた、然るに此頃より、深く心に期せらるゝ處があつたと見えて、斷然公衆を避けて、専ら弟子等の薰陶の爲に盡さんと決せられたやうである、諸君もし心して本傳を覽らるゝならば、以下にあるイエスと弟子等との問答の後には、イエスの働が一般的よりも寧ろ自分の團體の中に限られたことに注目せらるゝであらう、假りにイエスの一生を富士山に譬へて見ると、今迄の生涯は、殆ど八合目まで上つて来た處で、其絶頂といふべきが、イエスの變貌、それから漸く下り坂となつて、終にカルバリー山の十字架のドン底に達せらるゝのである、思ふにイエスは、これ迄成べく、一般的の働を取られたが、然しユダヤ人全體は、殆ど彼を誤解して受入れない、こゝに於て、彼は志を變じて、自己の下にある小團體の爲に、専ら力を致さんと、其方向を變へられたのである、されば、イエスが此の瞽者を癒し給ふた一事は、彼が公衆的事業の、最後の働と見て差支へない

と思ふ。

十一 ペテロの信仰告白 (第八章二十七節以下三十三節)

イエスの一生涯は、此段より、いよいよ新しい時機に入ることとなるのである、二十七節以下九章一節までの問答、及び教訓は、前に話したる如く、決して何でもない無意義のものではない、これはイエスが思ひ切つて、自己の腹中を、弟子等に御明しになる大切なる機會を示したものである、全體イエスは、これまで一般公衆を目的として、種々なる方法を以て、福音の宣傳を試み給ふたが、彼等の中には、殆どイエスの精神を解するものなく、學者やパリサイ人等は、自己の職權を犯され、自己の非行を詰責に來たものとして、正面から反對する、又國民の大多數は一時イエスの行爲に隨喜して、多く信するものもあつたが、これもたゞ肉體上の慾心から出たもので、中にはイエスをユダヤの王として、ロー帝國に反抗せんとまで、企つる輩も起つた、然るにイエスは、其者輩の爲す處を、一々に排斥し給ふたから、其結果はいたく彼等を失望せしめた、斯様なわけで、イエスの精神を、眞に了解して

隨喜して居るものは、僅に十二弟子位のものである、其弟子等も、實際如何かといへばまだ眞實に、イエスの精神が解つて居らなかつた、一面には矢張一般ユダヤ人の如く、イエスを此世の有力者にしたといふ希望もあつた、斯る未熟淺薄なる弟子等の心中を見給ふた時、イエスも時々長大息なされたであらう、然し彼等の信仰は、未熟とはいへ兎に角、其生涯を捧げて、イエスに隨從して居る其精神は、イエスもよく了解して居られたから此時より、一般傳道を中止して、専ら此弟子等の訓練に従事しやうと決し給ふたのである、そこで最初に彼等が如何程、自分を了解して居るか、まづ其精神を探つて後、漸々自己の所信を打明けやうとせられたのである、この事を承知して、此段以下を研究すると一層興味と利益を得ることと思ふ、さて此段は馬太傳第十六章十三以下二十八節、路加傳第九章十八節以下二十七節にも掲げられてあるから、彼此參照して見る必要がある。

(廿七) イエス其弟子と共に、カイザリヤ。ピリビの諸村へゆく途間に、其弟子に問て曰けるは、衆人は我を曰て誰とする乎、カイザリヤピリビは、ヘルモン山の麓にある市街である、イエスがこゝに退かれたのは、主として弟子等と親しく語るに適するからであらう、路加傳第九章十八節

を參考すると、此問答の時、イエスは弟子と共に、まづ祈禱せられたとある、イエスは自己の所信を、弟子に語らんとする以前に、まづ弟子の意見を問はれた、又弟子の意見を聞く以前に神に對して祈り給ふた、一身上の緊要なる對談の前に、祈禱を以てせられたるイエスの手本は、私等の最も學ぶべき點であると思ふ、斯様にした後、イエスは世間が自分を、如何に批評しつゝあるかを、弟子に問はれたのである、これ一は、弟子が如何程世間の風評に動かされて居るか、又一には、弟子等が如何程世間を注目しつゝあるかを、試験されたものであらう、其時、

(廿八) (弟子)答へけるは、或人はバプテスマのヨハネ、或人はエリヤ、或人は預言者の一人なりといへり、

第一の風評は、ヘロデ黨の考である、この事は第六章十四以下十六節を參考すれば解る、第二の風評は、エリヤがメシヤの先驅として來るてふ信仰が、當時のユダヤ人中に、専ら流行して居つた、そこでイエスも、其先驅者としてのエリヤの再來であらうと考へて居たものもあつた、第三の風評は、一部のユダヤ人は、古代の預言者が、其姿を替へて、再來する時があると思つて居つたから、イエスも其一人であらうとの考である、然し此等の風評、何れもイエスをメシヤとして見止めて居ら

ぬ、そこでイエスは一步を進めて、

(廿九) イエス彼等に曰けるは(然らば)爾曹は我を曰て誰とするか、ペテロ答けるは、爾はキリストなり、

他人の考は如何にもあれ、爾曹は如何思ふか、矢張り世人の批評と同様の考であるかとの問である、此時イエスは、弟子等の信仰が、果してどこまで達して居るか、其返答を待ち給ふた、其瞬間は、實にイエスが、非常に氣づかしく感ぜられた時であらう、何故ならば、今迄一年有餘、特別に教訓し來つた弟子等が、尙世間と同じ考に止つて居る様であれば、彼等に己が心事を打明すことは、未だく早いと思はれた、處が十二弟子中、最も勇氣あり然もや、輕卒の癖あるペテロが忽ち進み出で、「主よ爾はキリストである」と告白致した、此告白は、キリストに取りて如何計りの満足を與へたであらう、勿論彼等が、自分をキリストと見る見識の未熟なることは、よく存じて居られた、然し兎も角、彼等は他人の考へとは異つて、自分をメシヤ其人と見るに至つた心事は、如何に満足に思はれたであらう、馬太傳を見るに、此時イエスはペテロに對ひて「ヨナの子シモンよ、爾は福なり、蓋血肉爾に示せるにあらず、天に在す吾父なり」とまで仰せられ、且ペテロの將來を祝して

教會の基礎たるべき資格ありとまで語られた、(太十六〇十六—二十參照) これを以てしても、イエスが如何に此返答に満足を表せられたかが解る。

然るに、此告白は眞實にイエスを識るものでなくては受けることは出来ない、其信仰なき者に對して、斯様な告白を公にした處が、それは何にもならないのみならず、却つて愚弄を買ひ、迫害を招く基となる、故に、

(三十) イエス彼等を戒めて、我事を誰にも告る勿れと命じたり

己を識る者にあらざれば、己を示すの必要はない、弟子等は、不完全ながらも、イエスの何人たることを識り得た、此知己の精神にめでて、イエスはこれより自己の衷情を披瀝せられるのである、即ち、

(卅一) また人の子、必ず多の苦難をうけ、長老祭司の長、學者等に棄られ、且殺されて、三日の後に甦ることを、彼等に表示し始め給へり、

これは、イエスが嘗てより打明けんとして、容易に明し給はざりし、心中の大秘密であつた、ペテロを初め弟子等は、イエスをキリスト即ち世の救主と信じて居た、然し其救主との義は、矢張り當時の思想に泥んで此世に於て一大事業を立つる偉人

のやうに信じて居た、救主の來た時は、ユダヤ國は、世界の中心となり、天下の國々は、必ずこれに朝貢するに違ひないと思つて居た、ここに當時は、ロマ帝國の壓制の下にある彼等であるから、此渴望は一層切實であつたに相違ない、然るにイエスの語らるゝ所によると、所謂メシヤ(キリスト)なるものは、全くそれとは反對である、彼は數多の苦痛を受け、國人には棄てられ、最後に非業の死を遂ぐるものであると語られた、これを聞いた弟子等は、驚くといふよりも、寧ろ不思議なる感に打たれたであらう、目下たゞさへ人々に棄てられんとしつゝあるイエスが尙此上殺さるゝことゝなつては、何處に救主たるの實を示すことが出來やうか、これはペテロ初め一般の弟子等の思もよらない事柄である、故に、

(卅二) (かくイエスは)明に之を示し給ひしかば、ペテロはイエスを援て諫んざしたりしに、

(卅三) イエス回顧り、其弟子を見て、ペテロを戒め曰けるは、サタンよ我後に退け、爾は神の情を思はず、反つて人の情を思ふ、

ペテロがイエスを止めたる語は、馬太傳に記されてある、即ち「主よ宜らず、此事爾に來るまじ」と言つた、此時の弟子はペテロを初めとして、何れもイエスを愛敬して居たに相違ない、然し彼等はイエスの衷情を察することが出來ずして、たゞ

其身の上を思ふのみであつた、前にも言つた如く、弟子等は、イエスが是非此世に於て、人々に尊重さるべき救主とならるゝことを預期して居たから、今其事なくして、空しく敵手に倒れ給ふとあつては、せうも不本意である、不本意といふよりは、寧ろ師の恥辱と考へたのである、少くともペテロのつもりでは、師の此の覺悟は、決して成功を奏するの道でないと感じたのである。

然るにイエスの心は、全く之と反對であつた、此世の爲に、其身を捧げることが結局世を救ふ唯一の手段であつて、眞正のメシヤ（救主）は此覺悟がなくてはならぬことを見透して居られた、此一事は、既に舊約の預言者も、自覺して居た處であつた、假令ば、かのイザヤ書中にも、明に此事が述べられてある位である、されば此苦しい犠牲に上つて、世の罪を負ふことが、救主の本分であり、神の意に適つた事柄であるに、弟子等はこゝに目が達せず、やはり人間の立場、人間の心情から見、之を抑止せやうと致した、これはキリストに取りて、確にサタンの誘惑の如くに感ぜられた、キリストは最も愛する弟子ペテロの精神の中にも、尙此悪魔の姿のほのめくことを見給ふた、それで此叱責があつたのである。

十二、基督信者の覺悟（第八章卅四節以下第九章一節）

さてイエスは、ペテロの制止を一言の下に叱斥なされた上にて、尙自分が今後に於ける精神を示し給ひ、又弟子等にも、新なる覺悟を有たねばならぬことを教示し給ふた、即ち

（卅四）衆人と其弟子を共に召て、彼等に曰けるは、もし我に従はん欲ふ者は、己を棄て、其十字架を負て我に従へ、

イエスが此時の覺悟では、自分を棄て、かゝらねば、決して世を救ふことは出来ないと感じたまふたが、これは獨りイエスだけではなく、其弟子等も、矢張り己を棄つる決心なくては、到底キリストに隨従することは出来ないとの意を示されたのである、全體われは、ある程度までは、善い教を聞いて、成程と感じ、善い事業を見て、これを賛成するの精神があるが、然しいよく、自分を全く捧げて、其教に従ふとか、又其事業に身を投ずるとかいふ段になると、自分の肚の底に如何しても、取去り難い、苦しいものがある、これが所謂こゝに言はれた「十字架」である、われわれが正義の爲め、又博愛の爲に、眞剣事業をなさうとする場合になると、此

身に纏はる十字架を負つて起つ決心がなくてはならぬ、此時の弟子等は、イエスに隨從して居たもの、未だ思ひ切つて、自己の苦しい十字架を脊負つて起つといふ決心はなかつたやうである、それ故、イエスが斯教の爲に、死を厭はずどの精神を示された時、彼等は、此事が自分等の身にも及んで來ることを懼れ、まづ大概にしておけばいゝにといふ考でイエスを止めたのであらう、此「大概にしておけばいゝ」といふ精神が、多數基督信者の肚の中に在るサタンの聲である、口頭では、犠牲だの十字架だの立派な言を爲す者でも、イザといふ場合には、思ひ切つて十字架を脊負つて、キリストに従ふことが出來ない、これは今も昔も、此時のペテロのやうな信者を、澤山に見つけることである、それ故イエスは、此峻嚴なる語を吐き給ふたのである。彼は又重ねて仰せられた。

(卅五) そは生命を全うせんとする者は、之を棄ひ、我ため、且福音の爲に、生命を喪ふ者は、之を得べければ也、

これは前節の十字架を負ふて犠牲となるべき理由を明にせられたものである、此節の「生命」との語には、兩様の意味が含まれて居る、乃ち、わが肉體の生命を惜んで、卑怯な考を有する者は、心靈の生命、即ち神の前にて、眞實の幸福を得べき

永遠の生命を亡ふこととなり、此世の生命を惜まぬものは、永遠の生命を享受するに至るとの義である、全體人間の尊い所以は、此心靈の生命を保持して居るからである、日露戦役の際に、其妻子をふりすて、勇んで戦場に臨んだ同胞も、又其子弟をば勵まして、戦場へ送り出した父母も、もし此世の生命が惜しいといふ心があれば、到底出來たものではない、然し斯様な真面目な場合には、たゞ肉身の生命を惜まぬのみか、たとひ此生命を亡つても、國民たる生命を損じてはならぬといふ精神が顯はれる、これが即ち精神の生命、靈の生命である、此靈の生命こそ、乃ち人間の間として、世に立つて居る大切なる方面である、又此尊き靈の生命は、何物を以てしても、交換することの出來ないものである、故にイエスは、

(卅六) もし人全世界を得るをも、其生命を棄はば何の益あらんや、

(卅七) また人、何を以て其生命に易んや、

と明言せられた、實に我々が人間として貴い所以のものは、此處に存するのである、然るに世間には、僅少の金錢や名譽で、此貴い生命を賣つたり、殺したりするものが澤山にある、此生命の貴さを知らない爲に、種々なる罪惡を犯して憚らず、

其人格を亡すこと、なつて居る、此靈の生命の貴さが、忘却さるゝに至ると、此世の生命、肉體上の生命が次第に惜くなつて後には如何いふ破廉恥なことでも不義不正の事でも、利慾の爲ならば、差支へなしとまで、墮落して仕舞ふ、一言にいへば、今日の世は、實に肉の生命の爲に汲々として居るもの計りといつても差支ない、これが所謂姦惡なる世である、故に

(卅八) 姦惡なる此世に於て、我と我道を恥る者なば、人の子も亦聖使と共に父の榮光をもて來る時、之を恥べし、

世が斯く溷濁に陥つて、靈の生命の貴さを知らないやうになつては、多數の人々は、其靈の生命を活かす爲に來り給へるキリストを嫌惡するは當然である、嫌ふといふよりも、彼に對して耻づるやうになる、然し斯る卑劣漢は世界の秩序の回復しキリストが聖使と共に公平なる審判をなす爲に來らるゝ節、語を更へて言へば、我等の靈が、神とキリストの臺前に立つの節、利己主義者、此世に汲々たりし輩は、盡く神の前に恥辱をうけねばならぬ、こゝにイエスは、審判の日に、我等に臨むべしとのことを語られたが此事については尙後に説くこととする。

イエスは、まづ自分の身の悲劇について語り、次に其弟子等の苦痛を預言し給ふた

が、然しキリスト信者の生涯は、何時迄も左様な苦悶の中にあるものではない、最後に、キリストは、自己の榮光と勝利とを預言し給ひ、又弟子等の幸福をも預言し給ふた。

九章一節、イエス又彼等に曰けるは我眞に爾曹に告ん、此に立つ者の中に、神の國の權威をもて來るを見るまでは死ざる者あり、

此一節につきては種々なる解釋がある、或人はこれは次節以下にあるキリストの變貌の事を指したものだと思つて居る、又或人はキリストの復活を意味したものであると説いて居る、又或人は、ペンテコステの聖靈降臨の大現象を預言したものだとも見て居る、又或人は、これはエルサレムの滅亡を指したものだとも見て居る、私は、イエスの心中、確に何を御指になつたものか、明に判斷することは出來ない、然しイエスは、遠からず敵手にかゝつて殺さるゝが、其靈は、それが爲に倒さるゝことなく、却つて神の權威をもて、再び此世に臨む時期が來る、其時を見ることは、遠くないと自信して述べられた語であると思ふ、それ故之は、ある一の事柄を確に指して述べられたものではなく、前章の聖き使等と共に來る云々の語から、聯絡した思想であつて、これを詳細に解釋しやうとすると、却つてイエスの御精神を損することになると思ふ。

十三、イエスの變貌（第九章二節以下十三節）

第九章二節以下八節は、有名なるキリストの變貌の記事であつて、馬太傳第十七章第一節以下八節、路加傳第九章廿八節以下卅六節にも掲げられてある、前にも申した如く、イエスが此世に於ける生涯中、此變貌の一事は、其全盛其頂點を表はして居る、これより以後の生涯は、下り坂になつて居る、變貌其のものについては、十分説明し難い、神秘的の分子が含まれて居る、思ふに此時三人の弟子等は、一種の幻象に遭遇したものであるに相違ない、これ恰も、イザヤがエホバの裾に觸れ、パウロがダマスコの途上、イエスの容姿に接したと、同一現象と思ふ、然し幻象は單に空想又は妄像ではない、キリストが此の三弟子の精神上に、一種不可思議なる印象を御與へになつたことは疑なき事實である。

然らばイエスは何故に、斯る幻象を弟子等に現はし給ふたか、語を更へて言へば、神は何故に弟子等の前に、斯の如きイエスの變貌を示し給ふたか、思ふにイエスは、其弟子等に對して、自分は果敢ない無慘なる最後を遂げるぞと、前以て御話になつ

たから、弟子等は少からずキリストに就て不安の心を懷いたであらう、そこでイエスは、此身体が、如何に苦痛迫害に逢ふも、其靈は決して仇敵の爲に、汚さるゝものではないとの意を御示しなされたものであらう、又二には、イエス御自身の眞人格が、此世ながらに、幾分かの光を放たるべき證據を御表はしになつたものとも思はれる、イエスの生涯を譬へて見ると、恰も白雲に遮られたる富士山のやうである、これまで彼が始終俗塵の中に隠れ給ふ間に於ても、折々チラ／＼と、其本質の神々しさを顯し給ふ、然し亦直ちに雲がかゝつて、見ぬやうになる感がある、此の變貌の時のみは、彼の本質が、暫時アリ／＼と見えたる心地して、さながら白雲に蔽はれし富嶽が、暫時雲の斷え間より、其英姿を現はして居ると同様の感がある、然しこれは勿論イエスの神性を見とめて居るものゝみに、左様に感ぜらるゝので、もしイエスを普通の聖人か、君子と見る者には、此段の記事の如きは、全く何が何やら一向解せられたものではない、たゞ弟子等が、イエスを尊崇のあまり、斯いふ神々怪めいたことを記しておいたと解するより、他に途はあるまいと思ふ、兎に角私等は、此記事に於て、キリストが、一種の超自然的性質を具へらるゝを、觀察すること

とが出来るのである、

(二) さて六日の後、イエスは(は)ペテロ、ヤコブ、ヨハネを伴ひ、人を避けて、高山に登り給ひしが、彼等の前にて其容貌がはり、
(三) 其衣(は)がやき、白きこぼれとして雪の如く、世上の布深も斯白はなし能はざるべし、

路加傳を見ると、「六日」が「八日ばかり」となつて居る、是はペテロの告白せし日を計へ入れて算したものであらう、「人を避けて」とは「密に」といふ意味である、「高き山」とは、ヘルモン山のある場所かと思はれる、尙路加傳を参照すると、此時イエスは、此處へ祈禱せんとて來り給ふたのである、其祈禱中にイエスの貌が變つたのである、私等は此點に注目せねばならぬ、思ふに三人の弟子は、イエスの御傍にあつて、熱誠に主の祈禱を聞いて居つたであらう、此時主の祈禱は、如何いふ主意であつたか解らないが、三弟子の胸中には、一しほ深い敬虔の念を有たせられたものに相違ない、さてイエスの祈禱が終ると、四周はやゝ暫く肅然靜然として、何等の聲もなくなつた、三弟子等は、其時思はず恍惚の境界に進んだものであらう、フト目を舉げて見ると、驚くべし、イエスの風姿は全く變じて居た、其衣は輝ける白雪の如く、實に何とも譬へやうのない、かうくしい有様であることを發見した、そ

れのみならず其處へ

(四) エリヤとモーゼと、共に彼等に現はれて、イエスと語り、

とある、これにて三弟子の目撃したるものは、一種の幻象であつたことがいよく確になる、モーゼとエリヤは、數百年以前の故人で、形體を有つた人間ではない、然し彼等の目には、其兩人の姿が、現實に活ける形體ある人間の如く見えたのである、こゝにモーゼとエリヤが現はれたと云ふには、何かの意味がなくてはならぬ、御承知の如く、此二人は、舊約時代の預言者義人の中に、他人とは、其死様を異にした人々である、即ち二人共に、此世の死の手に觸れずして、直に天に歸つた者と信せられて居る、又モーゼは、律法の代表者、エリヤは預言者の代表者と見られて居る、ここにエリヤは救主の前驅者として再び世に來るべしとまで信せられて居た、然るに今此二人が、イエスに會合するといふは、取も直さず神の教の三時期を代表せる人々の和合を示すに他ならぬのである、路加傳によると、此時彼等は「イエスのエルサレムにて、もはや世を逝らんとすることを語り」とある、イエスが斯る崇高偉觀たる變貌の時にも、尙前途の十字架の憂慮は其心より離れなかつた、尙

路加傳を参照すると、此場合に於て、三弟子は恍然たる中に、一時眠りたるやうな感^{あはれ}がして、フト目を上げて見ると、此有様を目撃したと記してある、(路九〇三十二)これによつて、私はますく、此が幻象であつたことを確むるのである、三弟子は、此不可思議なる、然も言語に絶したる崇高なる光景を眺めた時には、一種いふべからざる畏懼の念が起つたと同時に、又いふべからざる楽しい幸福なる心も生じたであらう、我主は此の如き榮光に輝き給ふのみならず、語る兩人は舊約の大偉人モーゼとエリヤである、もし自分等三人が、何時までも、斯る潔き氣高き仲間の中に居ることが出来れば、どれ程幸福であらう、もう此世の富も譽も何にも要らない、自分等の信仰の極致は、斯いふ樂しき場所に侍するにあるのだ、斯いふ考から、次の如き言を爲すに至つたのである、即ち

(五) ペテロ、答へてイエスに曰けるは、ラビ我儕、に居るはよし、我等に三の庵を建て給へ、一は主のため、二はモーゼの爲、一はエリヤの爲にせん、

(六) 斯は其謂ふ所を知ざりしなり、彼等いたく懼しに因る、

此時ペテロ等は思つた、主イエスが一度此山を下り給へば、又世の暴風怒濤の中

に蕩漾ひ給はねばならぬ、祭司やパリサイの人々の手に苦められ、悲惨なる目に逢ひ給はねばならぬ、それよりも、いつそこのまゝにてモーゼやエリヤと共に道を樂み、此世からなる天國を造り給ふたならば、今後種々なる苦酸を嘗め給ふよりも、遙に幸福であらうと、主の身の上を思ふペテロの心は、了すべきである、然し彼等は、其實イエスが此世に來り給ふた眞意を解して居らない、それが爲め斯る異様の光景に途惑ひして其言ふ所を知らず、輕卒に斯いふ言を吐いたのである、「彼等いたく懼れし」とあるは、此時の莊嚴なる光景に、精神を打たれて、甚しく畏懼した意味である、

(七) 斯て雲、彼等を蔽ひ、聲雲より出で曰けるは、此は我愛子なり、之に聽べし、

(八) 頓て弟子環視しければ、イエスと己の外は一人をも見ざりき、

「これ我愛子なり」の一聲は、イエスが受洗の時、即ち世に現はれ給ふ當初に、洗禮者ヨハネの耳に響いたものであつたが、こゝに又イエスの變貌に際して、再び弟子等の靈耳に響いたのである、我々はこの理由を味はねばならぬ、イエスは、最初ヨハネより洗禮を受くる程謙遜に服従せられたが、然しそれが爲に、彼は却つて神

の愛子であることを證せられた、それと同じく、今此場合にも、彼は遠からず、無慘なる最後を遂げて、此世から見れば、何の價値もないやうな働に終らんとして進みつゝあるのである、然し彼には、此際矢張り神の愛子たる證明の聲が聞えた、此「我が愛子なり」といふ聲が聞えたのは、決して偶然の事ではない、其聞えたる場合は、如何なる時期であるかを、克く注意すれば、其眞意が判らうと思ふ、即ち一方は、其旅出の時である、他方は旅行の頂點時である、馬太傳を参照すると、此時弟子等は、餘りの莊嚴に畏懼して倒れ伏したとある、其時イエスは彼等に手を按きて「懼るゝ勿れ」と仰せられた、其聲にてフト目を揚げて見ると、今迄の光榮は、忽然掻消されて居たので弟子等は暫し茫然として四方を環視したが、イエスの他は、何人も居らぬことに氣づいたとある。

それから山を降り來る途中、弟子等は、今見たる幻象が、決して一場の夢でもなく、又妄想でもなく、アリク實現せられた一種の光景であることを感じ、怪みつゝ居たから、イエスは彼等に訓戒せられ、彼等も又イエスに問ふ處があつて互に語りながらに下山し來つたのである、これが即ち九節以下十三節迄の記事で、これは

馬太傳第十七章九節以下十三節にも掲げられてある。

(九) 山を下る時に、イエス彼等に命じて、人の子の死より甦る迄は、爾曹の見し事を人に告る勿れと曰へり、

この節から考へて見ると、三弟子の見たる幻象は、全く主觀的の幻夢ではなく、其實はイエスが彼等に示し給ふたる、一種不可思議な現象であつたに相違ないことがわかる、イエスは何故、死から甦るまでは、此事を人に語るなど命じ給ふたであらうか、思ふに三弟子が見たるキリストの榮光は、キリストが、此世の事業を爲し遂げ、復活し給ふ時に、現はし給ふ榮光と同一である、此時此榮光の眞意を、他人に語つた處が誰も解するものはない、却つて一場の夢物譚のやうなものだと、冷笑さるゝに過ぎない、否、現在目撃した、三弟子さへも、キリストの甦生の時までには、此變貌の眞意が、十分解せられなかつたと思はれる、御覽なさい、イエスが死より甦ると言はれし、其語意すら、彼等は解し兼ねて居るではないか、即ち

(十) 弟子等(は)此言を守り、且互に論じ曰けるは、死より甦ると云は何の事か、

弟子等は、たゞ師の命令として、此言を守つたが、然し死より甦るとの一事を怪んだ、これは一般の人々の、甦生を怪んだのではない、イエスの如き方が、死して

又甦るとの一事を怪んだのである、甦るといへば、一旦死ななければならぬ、イエスに死があること云ふことは、弟子等に於ては信せられないのである、否實は身震ひする程厭な事柄である、何故なれば、エリヤやモーゼでさへも、普通の死を受けなかつたから、況してイエスが死するなどいふことは、甚だ面白く感せなかつたのである、さて其時、彼等の心中に、フト、エリヤの事が聯想せられて來た、それは舊約書馬拉基書第四章五節の語に

視よ、エホバの大なる畏るべき日の來るまへに、我預言者エリヤを汝等に遣はさん、

とある、當時の學者等は、此語によりて、救主の來る以前、エリヤが必ず甦生して、再びユダヤの社會に來るべしとの信仰を有つて居た、三弟子はエリヤと甦生の事が、一度に浮んで來たものであるから、自然考がこゝに及んだものと思はれる、そこで

(十一) 彼等イエスに問ふて曰けるは、エリヤは(救主の)前に來るべしと學者の曰るは何ぞや、との問を起した、其時

(十二) イエス答へて曰けるは、げにエリヤは前に來りて萬事をあらたむ、又人の子に就ては、其各様の苦難をうけ、且輕慢らる、事を(も)書き記されたり、

「人の子に就ては」云々の一句は、「又多の苦を受け、且賤めらるべき人の子につきては如何に記れれしか」とするが、原意に適して居る、イエスは當時の學者等が、救主に先立ちて、エリヤの來るを唱道して居るは、決して無稽の事ではないと見られ、舊約書の語が、決して不當のものではないと語らるゝと共に、同じ舊約書中に救主が屠所へ往く羊の如くに苦められ、虐げらるゝ記事もあるが、それには氣がつかないかと注意せられた、尙つていて

(十三) されど我汝等に告ん、エリヤ既に來りしに、彼に就て録されたりし如く人々意の任に之を待へり、

舊約書には、エリヤが人々の意のまゝに迫害されたる記事はない、これは救主の前驅者が苦しめらるゝ意を、舊約書から推測して語られたものであらう、馬太傳を見ると、イエスがこゝにエリヤと言はれたのは、其實バプテスマのヨハネを指されたものであることが、わかるが、如何にもバプテスマのヨハネの生涯は、エリヤの生涯と餘程類似して居た、彼等は共に、野の人であり、仙人風の服裝にてあり

又有力なる預言者でありしこと等は、兩々實によく似て居るのである、さればイエスがヨハネを、エリヤに擬し給ふたことは、決して理由なきことではない、尙こゝに注意すべきは、ヨハネをエリヤに擬し給ふたイエスの胸中には、暗々に自分はエリヤの後に來るべき救主であるとの自信のあつたことである、イエスに此自信がなくしては、決して斯る口幅の廣い言を、吐かるゝ筈はない、即ち我の前に來りしエリヤさへも、人々は斯く意に任せて迫害をなし居るに(ヨハネは當時無罪である)況して其後に來る我に對する所置をやといふ氣概は、確にこの語中に見らるゝのである。

十四、惡鬼に魅かれし少年醫さる (第九章十四節以下二十九節)

十四節以下二十九節までは、イエスが惡鬼に魅かれたる兒童を癒し給ひ、それと共に信仰の眞意を御話しになる條である、此記事は馬太傳第十七章十四節以下十八節、路加傳第九章三十七節以下四十二節にも掲げてある、

イエスはヘルモン山頂に於て、此世ながらの天國狀態を現出し、自分の姿は天國にある有様の如くに變り、弟子等をして、實に何時までも去る能はざるの念を起さ

しめ給ふた、又其歸途エリヤの再來につき、精神的談話に時を移しつゝ、漸く下山して參られた處が山下の下界は、山上の神聖なるにかへて、惡魔の跳梁盛にして、實に汚濁と苦惱と喧争に充つる光景であつた、イエスは暫く濁世界を離れて、大聖モーゼやエリヤの靈と交際をなされ、心靈の樂境に逍遙して居られたが、今再び此うるさい罪界に、たづさはらねばならぬと思れた時には、其感は果して如何であつたらう、それは此段の記事が大に其面影を映して居ると思ふ。

(十四) イエス(癒しおきたりし)弟子等の所に來り、(しに)多の人々の、彼等を環圍るを、學者たちの彼等と論じ居りしを見たり、
イエスは、殘せし自分の弟子の許に來られた處が、人々が相集りて、頻に喧囂しく論じ合つて居る、これは弟子等が、惡鬼に魅かれたる小兒を癒すことが出來ないために、來合して居た學者等と何等かの議論が始まり遂には師たるイエスの身上にも及んで騒いで居たのである、其處へイエスが進み來らるゝと

(十五) 人々直に彼を見て駭き、趨りて禮をなせり、
こゝの駭といふ原語の意は、イエスが突然こゝに御歸になつたことを駭いたといふやうな軽い意味ではなく、イエスの容姿が、何だか平生とは異つて、著しく榮光

に充ちたる如く感せられたから、多少畏懼の念を以て迎へたる意である、これ變貌の結果、イエスの姿がいつもよりは大に異つた處があつたのである、そこで今迄頻に議論して居た彼等は、イエスを見ると、俄に其を中止して皆思はず彼れに敬意を表したのである、其時

(十六) イエス學者に問けるは、弟子は何事を論ずるや、

此時學者は、少しくキマリ惡げに黙つて居たと見える、すると

(十七) 衆人のうち(の)一人、(彼に)答へけるは、師よ我、物いはぬ惡鬼に憑れたる我子を爾に携來れり、

(十八) 惡鬼の憑く時は、彼投げ倒され、沫をふき、齒を切て、疲はつる也、これを逐出さんことを我爾の弟子に請ひしかど、彼等能はざりき、

此答をなしたる者は、癲癩病のやうな怪しい病氣に取つかれて居た小兒の父であつた、彼は我兒の病氣の心配の爲に、弟子等の許に來つて癒されんことを願ふたが其子の病は癒されずして、たゞ徒に、其治不治に關する議論を聞く計りであつた、其時弟子等は、惡魔に憑かれたる小兒を其場へ臥させながらも、何の慰安も恢復も與へずして唯つまらぬ宗教の議論を戦はすのみであつた、それに失望し居た此父は、

今イエスがこゝへ來り給ふや否、他の者がまだ言を發せぬ前に、自ら進んで其事情を陳述したのである、此父は學者と弟子等の間の議論が、如何だつたかといふ事には一向頓着せない、たゞ自分の要求して居る處が、少しも與へられないことを訴へたのである。

私は此記事を読んで、深く感ずることは、今日の宗教界が、矢張り斯いふ有様であることが見らるゝのである、一種の病氣にかゝつて、癒やさるべく冀望して來た多の靈魂を前にひかへて、實際それを癒やすことが出來ず、たゞそれが癒さるゝか否かといふ議論にのみ時を空費して居る、然し其人々は、議論や講釋は聴きたくない、實は癒されたいのである、處が多くの宗教家はそれを癒やし得ない、神道でも佛教でも左様であるのみならず、我々キリスト教に於ても、又左様な有様がないではない、いろ／＼と立派な議論を吐く牧師や信者はある、然し自分の手で、一人の小兒、青年、婦人の心中の罪惡や苦悶を除き去ることが出來ない、これは何故であるかといふに、宗教は一個の遊戯か道樂のやうになつてしまつて、眞實に力を有する信仰がないからである、一言にいへば、世は信仰の力なくして、たゞ信仰を論ず

るものが多く、甚しきは、宗教を利用せんなど、至つて、肚黒い輩の手によつて、立てられて居るからである、當時ユダヤの宗教家輩は、大抵さういふ風の信仰家であつたと思ふ。

(十九) イエス彼等に答へて曰けるは、噫、信なき世なる哉、いつまで我爾曹と共に在んや、何時まで我爾曹を忍んや、彼を我に携來れ、

信なきとは、嘗にユダヤ人を指し給ふ計りではない、弟子等に對しても、斯の嘆息を洩らし給ふたのである、イエスは此頃から、一般のユダヤ人に道を説いた處が到底駄目であると思へられた、いくら忍耐しても、彼等の頑固は到底打碎かれぬことを見ぬかれた、われは今此語からしても、イエスの公衆に對する精神が窺ひ得らる、然しながらイエスは今一度學者や弟子等の心に或る感銘を與へんとして公衆の前に、奇蹟を示す爲に、父に向ひて、其子をこゝへ携來れと命じ給ふた、そこで

(二十) 彼等其子を携來りしに、惡鬼イエスを見て、忽ち彼を拘攣しむ、彼地に仆れ、輾轉て洩れ出しぬ、

これは今日の癲癇病であつたと思はれる、然し其人は、一種の惡鬼が、其子に魅いて、斯様になつたものと信じて居たから、

(廿一) イエス其父に問けるは、幾何時より如此なりしや、父いひけるは、少時よりなり。

(廿二) 惡鬼しばし之を火の中、或は水の中に投入れて、殺さんせり、爾もし爲すことを得ば、我等を憐みて助けよ、

此時、此父が、イエスを信する心は、随分熱かつたのである、然し未だ思切つて全然彼に依頼する程の念慮はなかつたに見える、マア癒して下さるならば、宜しくお頼み申しますといふ位であつた、其時

(廿三) イエス彼に曰けるは、爾もし信することを得ば、信するものに於て爲し能はざることをなし、

此節の原文は、斯うである、「若し汝爲し得べくば……凡の事は信する者に爲し得らるゝ也」此意は、今爾は我に向ひて「もし爲すことを得ば、我を憐め」といつたが、これは私が爲すことが出来る出来ぬの問題ではない、これが出来るか出来ぬかは爾の信仰一にあるのだ、即ち「私が爲し得べくば」でなくして、「爾爲し得べくば」である、爾は宜しく心から私を信じてかゝらねばならぬ、何故なれば凡の事は、信するものには、必ず爲し得らるゝのであるとの義である、こゝにイエスが信仰といふことの秘奥を御語りになつた、信するとは、神に責任があるのでなくして、自分に其覺悟がなくてはならぬことである、この時

(廿四) 其子の父、直に聲をあげ、涙を流して曰けるは、主よ我信す、我信なきを助け給へ、
イエスの此一言によつて、此父の精神は、實に眞面目になり、心底から信仰の聲
を發した、私は此節に對しては、今も此父の聲が、私等の心底に響くやうに感ぜらる、
こゝに於て

(廿五) イエス衆人の趨集まるを見て、惡鬼を叱言けるは、啞にして聾なる惡鬼よ、我爾に命す、出て再び之に入る勿れ

(廿六) 惡鬼叫びて、大に彼を拘擥しめて出しかば、彼死たる者の如くなりぬ、人々これを已に死りといふ

(廿七) イエス其手を執て扶ければ、彼起てり

こゝに、イエスは公衆の前にて、立派に其子の病を癒し給ふた、此有様を見たる
弟子等は、何となく、面目ない心地がいたし、又一には自分等も、一時惡鬼を逐出
す力があつたにか、はらず今それが出来なくなつたのは如何いふわけかと、密に怪
み出した、そこで

(廿八) イエス家に入りしに、其弟子密に問けるは、我儕之を逐出すこゝ能はざりしは何故ぞ、

「弟子等は、さきにイエスより、種々なる奇蹟を行ふ力を賜はつたのである(本傳
三章十五節參照) それに今は實行が出来なくなつて仕舞つた思ふに、彼等はイエス

の下山以前には、學者に對して、自分等は、イエスによつて立派に奇蹟が出来ると誇
稱したのであらう、然し實際試みた處が、サツバリ出来なくなつて居る、彼等は大に
狼狽すると共に、學者等はサンザ、彼等を罵倒したのである、此一事には、彼等も
大に閉口して仕舞つたから、今密に師の許に來つて、其理由を問ふたのである、その時
(廿九) イエス彼等に曰けるは此族は祈禱と斷食に非ざれば、逐出すこゝ能はざるなり、

馬太傳を參照すると、イエスの此時の答が一層明白である、即ち「イエス彼等に曰
けるは、爾曹信なきが故なり、我誠に爾曹に告ん、もし芥種の如き信あらば、此山
に此處より彼處に移れと命ども必ず移らん、又爾曹に能はざること無るべし、然ど
此類は、祈禱と斷食にあらざれば出づることなし」とある、イエスは弟子等に對して、
「爾曹信なきが故に、此奇蹟が出来ないのである」と仰せられた、然し考へて見る
と、此時の弟子等は、何にもイエスに背いて居たのではない、矢張りイエスを尊信
して居た輩である、彼等が神を信じ、イエスに服して居たことは、使徒に選ばれた
當時と、少しも違つて居らない、然るに彼等前には奇蹟を行ふ力がありしに、今
は其力が抜けて仕舞つて、何等の事も出来ない、これは如何した事であるかといふ

に、イエスは「信なきが故なり」と仰せられた、あゝ私等もこゝに大に注意せねばならぬ、私等は必ずしもキリストを離れて居るのではない、又神を忘れて居るのではない、然し或時は、自分の信仰で以て、多の人々の前に驚くべき力を現はし、我家に於ても、教會に於ても、社會に立つても、實に凡のものを畏懼せしめ、不思議と感ぜしめる事柄を致したことがある、然るに今日は、トントさういふ力が出なくなつて仕舞つた、名は信者であつて、祈禱もし、聖書も讀み、普通の信者生活はして居るものゝ、自分の身からは少しも不思議の力が出ない、たゞ他人の不平や、牧師の苦情計りを言つて居る憫れむべき者になり下つて仕舞つた、これは何故であるかといふに、矢張り「爾曹信なきが故なり」である、全體私等信者は、自分の教會や、家庭や、又一身に於て、何の奇跡も現はすことの出来ないものならば、自分の有つて居る信仰は、決してキリストの仰せらるゝやうな立派な信仰でないことを知らねばならぬ。

然らばイエスの所謂信仰なるものは如何して修養さるゝかといへば、これは眞に神の前に祈る心があるものでなくては得られない、こゝにも「此類は祈禱と斷食に非れば能はず」とある、正しい馬可傳の原文には「斷食」の一語は省いてあつて、たゞ「祈禱にあらざれば」とある、改正英譯聖書にも斷食の一語は省いてある、

十五 再び受難の豫告 (第九章三十節以下三十二節)

三十節以下三十二節は、イエスが再び自分の將來の苦難につき話された記事である、これは馬太傳第十七章二十二、三節、路加傳第九章四十三節以下四十五節にもある、

(三十) 彼等こゝを去りてガリラヤを通ぐ、此事をイエス人の知るを好まざりき、

「こゝ」とは、ガリラヤ北部の地方を指したもので、此時イエスは再びガリラヤの方へ歸らんとし給ふ時である、然し成べく微行して往くことにせられた、これは次節にある通り、自分の將來を、弟子等によく教示せん爲であつたであらう、

(卅一) 蓋其弟子に教て人の手に付され、彼等に殺され、殺されて後、第三日に甦るべしと曰ひ給ふか故なり、

(卅二) 其時弟子等此言を曉らず、又問ふことを恐れたり、

弟子等は、さきに師より此等の言を聞いたが、然し成るべくこれを打消して、其事なからんやうにと慰めたけれども、イエスは嚴として其正確を保證し給ふのみな

らず、今こゝにて、再びそれを説き始め給ふた、弟子等は此語の深意は十分に解らなうだであらうが、たゞ何となく、これを聞くのが恐しく、悲しい感かした、馬太傳には「弟子これを聞て甚だ哀めり」とある、然し問題が餘りに不可解な事柄であるから、誰も確に此事を問ひたゞすものもなかつたと見える、又問ふ勇氣もなかつたことは、無理ないことゝも思ふ、

序に記す馬太傳に記されたる、魚口より銀貨を取らしめ給ふ話は、此頃にあつたことと思はるる (馬太十七〇廿四―廿七)

十六 謙遜の教訓 (第九章卅三節以下卅七節)

弟子等は、一方に、斯様な憂はしき思を懐いて居たに關はらず、他方には、矢張まだ此世の利害に目がとまつて居たやうである、よしや、イエスが、一旦苦痛に御遭ひなされるゝごも、再び甦り給ふ日には、何等か新しい王國を建て給ふであらう、其時新王國の首は無論イエスであるが、さうなると、我々は如何いふ地位を得るのであらうか、我々の中にて誰が、一番大なるものになるであらうかと、斯いふ問題が途中

にて種々論じ合はれたものと見える、或はかの三弟子が、ヘルモン山頂にて見たる師の榮光の事などを、他の弟子等に話し聞かせた、それが基となつて、イエスは必ず此世に出で給ふ時があるなを話し合ふ中に、終に話が進んで、自分の位地争をする程にまで及んだ、三十三節以下三十七節は、即ち此事につき、イエスが再び弟子等を訓戒し給ふ記事である、これは馬太傳第十八章一節以下五節、路加傳第九章四十六節以下四十八節にも載つて居る、

(卅三) 偕イエス、カペナウンに至り、室に居りて弟子に問けるは、爾曹途にて何を互に論ぜしか、

(卅四) 弟子黙然たり、かれ途問にて、互に論じ、誰が大なるんとの争ありければ也、

途中の争論をイエスに知られ、其事を聞きたゞされた時、さすが弟子等も少しく赤面して黙つて仕舞つたものと見えるそこで

(卅五) イエス座して、其十二(弟子)を召び、彼等に曰けるは、若し首たらん欲ふ者は、凡の人の後となり、且凡の人の使役となりん、

これは東洋の風習を引例して、教訓なされたものである、通常君王は尊く、奴隸は卑しきものであるが、イエスの王國では、それと反對で、奴隸の役をするものが

首であると述べられ、又それに加へて

(卅六) 又孩提を取りて、彼等の中に立て、之を抱き彼等に曰けるは、

(卅七) 凡そ我名の爲に、斯の如き孩提の一人を接る者は、即ち我を接るなり、又我を接る者は、即ち我を接るにあらず、我を遣し、我を接るなり、

イエスは、我々が最も小く、最も卑しき奴僕の如きものに對する教訓を垂れ給ふたのみならず、世に於て、最も小く、最も力なき幼兒をも、大切に接くるの覺悟なくしてはならぬと示し給ふた、こゝに、私等は基督者の精神の兩面を窺ふことが出来る、即ち一方にては、自分が最も卑しき謙遜なる心をもて、萬事を處理すべきこと、他方にては最も卑しき謙遜なるものを鄭重に受くべきことである、然しこれ歸する處は、一の趣意となる、何故かといふに、イエスは尊き神の子でありながら、最も卑しき形を取り、僕の如くにして、此世に臨み給ふた(腓利比書第三章七節參照)そこで我等信者も、己を卑しめて、奴僕の地位に立つは、取も直さずキリストに倣ふもの、キリストの名を接けたるものである、又世の卑しい小さいものを歡待するは、即ち此精神を世に現はし給ふたキリストを享くることとなり、従つて又キリストを遣

はし給ふた神を享くることとなるのである、さればイエスがこゝに述べ給ふた二の教訓を考へ合すと、其中には實に意味の深い眞理の存するところが見出されると思ふ、

十七、其他種々なる教訓 (第九章三十八節以下五十節)

三十八節以下五十節は、イエスがヨハネの間に對して、種々なる教訓を垂れ給ふ事柄であるが、路加傳第九章四十九、五十の兩節は、本章の三十八節以下四十節に一致し、馬太傳第十八章四節以下九節は、其以下の節に一致して居る、然し本段は嚴重にいへば、他の兩傳と正しく相當して居ない、全體より觀察するときは、此記事は本傳に於て、特別の教話となつて居る。

(卅八) ヨハネ彼に答て曰けるは、師よ我儕に従はざる者の、爾の名に托て惡鬼を逐出せるを見しが、我儕に従はざる故これを禁めたり、

ヨハネが此事を述べて、イエスの意見を問ふたのは、三十七節に、イエスが「我名の爲に」云々と仰せられた、その言が胸に浮んで、此語を發するに至つたのであらう、思ふに此頃、惡鬼を逐出す一事は、宗教家の一職務のやうになつて居たものご

見え、パリサイ人の中にも、之を行つて居た者があつた（馬太傳第十二章二十七節參照）そこで直接イエスの弟子ではないが、ある一人の者が、イエスの名聲と、弟子の行爲とを見て、自分もイエスの弟子の一人のやうに言ひふらして、悪鬼を逐出する業をして居たものがあつたと見える、斯くと聞きたるヨハネは、こは以ての外の事である、公然イエスの弟子とならずして、斯る名を詐る者は、我等を侮辱するものであると、憤激の餘り、其者に面會して之を差止めたと見える、彼は此頃未だ愛の眞精神を味はず、「雷の子」のあだ名を取つて居る頃であつたから、斯く激昂して禁止したのも無理はない、のみならず此行爲は、師の爲に忠義なことをしたと自負して、揚々と其話をなしたものであらう、彼は定めて、イエスから御賞の言を頂戴すること、考へて居たに相違ない、處が案外にも

（卅九） イエス彼に曰けるは、其人を禁る勿れ、蓋わが名によりて、異なる能を行ひて、輕易しく我を誹り得るものあらじ、

（四十） 我等に敵たはざる者は、我儕に屬く者なり、

イエスの此返答の精神は、實に宏量なものである、自分の名を以て悪鬼を逐出して居る者は、輕々しく自分を誹る筈はない、自分に逆けない者は、自分に屬して居

る者であると仰せられた、古語に泰山は土壤を讓らず、こゝを以て大なり、河海は細流を選まず、故に濶しといふ言がある、イエスは、宗教家の陥り易い偏狭少量なる根性を脱して實に泰山河海の如き大精神を持つて居られたことは、此語によりてよく解せらるゝ、然るに、今日に於てイエスの信者と自稱する者の中に、少しく派を異にするか、又は意見の違ふ者がある、輕々しくあれは異端者であるとか、悪魔であるなど、稱して排斥し、甚しきは、迫害するやうな行爲を採る者も屢見うける、我々は自分の信する點については何處までも狂げてはならぬ、さりながら、自分と信仰の立場を異にして居る者であつても、キリストの名によつて斯道を宣傳して居る人々であれば、何れも快く迎ふるの宏量を有せねばならぬ、然るに、自分の説く教理の外には、キリスト教がないものゝやうに心得て、漫りに他者を排斥しやうとする者は、宜しく此段のイエスの精神を學んで可なりである。

さてイエスはこれを機として、二三の訓戒を使徒等に垂れ給ふた、即ち

（四一） 爾曹をキリストに屬せしめて、我名の爲に一杯の水にても、爾曹に飲まする者は、我まこゝに爾曹に告ん、其人は賞を失はざるなり、

此語は馬太傳第十章四十二節にもあるが、然し直接使徒に對して話されたる教訓となつて居るのは、こゝ計りである、即ちもしこゝに一人ありて、爾曹を信者の一人として、それが爲に一杯の水、即ち至極微小なる親切を施したりとせば、自分は斷言する、其人は必ずそれだけの賞與を神より賜はるに至るべしとイエスは自己の名の爲に、微細なる行爲をなすならば、其の報を失はぬと述べ給ふた、それと反對に微弱なる一人の幼兒でも躓す者は、必ず其刑罰を免れないとの精神をも、述べ給ふた、即ち

(四二) また凡そ我を信する小子の一人を礙する者は、其首に磨を掛けられて、海に投入られん方、其人の爲に會善かるべし、

馬太傳第十八章六節を参照すると此語は三十七節の嬰兒の談につゞいて、語られたやうである、然し其間に、ヨハネが先刻の問のありしによつて、イエスは進んで、これを話されたものと見ても差支はない何となれば、ヨハネの心中には、小き者を躓かす位のことには、何でもないうやうに思つて居たであらう、こゝに小子とあるは、嬰兒をさしたもので、斯る無智薄弱取るに足らぬやうな嬰兒でも、これを礙かす者は、極刑に處せらるゝより、尙重い罪惡であると斷定せられた、「磨」とは、當時ユ

ダヤに使用して居たる、驢馬磨の事で、其磨の上石は、婦人等の手ではトテモ動かされないから驢馬の力で曳き回したのである、又石を負はせて、海底に投入らるゝ刑は、當時のローマなどでは、普通の刑罰であつたが、ユダヤ國では行はれて居らなかつた、然し當時のユダヤ人等は、此刑の事をよく承知して居たから、イエスは特に此譬を引れたものと思はれる、私等はイエスの此語によりて、人の靈ごとに神に救はれたる靈魂の、如何に貴い價値あるかを知ることが出来る、イエスが「人もし全世界を得ることも、其生命を失はば何の益あらんや」と言はれたる如く、我々の靈の大切なることは、今更申すまでもない、其靈を汚し、或は之を誘惑して、滅亡の中に入らしむる行爲が、如何に大罪であるかは、論するまでもない、私等は此語の精神をよく考へ來る時は、妓樓とか、酒舗とかいふ營業は勿論、其他人を罪に陥れる手段となる事業は、凡て大罪であることを悟らねばならぬ、たゞに他人を躓かす計りではなく、自分の靈を罪に陥るゝやうな事柄が、他にいくらかもある、さて我々が他人を罪に誘ふことをする時分は、自分の靈が既に躓いて居る證據である、故にイエスは進んで、

(四三) もし爾の一手爾を礙さば、之を斷され、両手ありて、地獄即ち滅ざる火に往んよりは、殘缺にて、永生に入るは、爾の爲に善きなり、

(四四) 彼處に入るもの、盡つきず火きえず、

(四五) もし爾の一足、爾を礙さば、之を斷され、兩足ありて、地獄即ち滅ざる火に投入られんよりは、跛にて永生に入るは、爾の爲に善きなり、

(四六) 彼處に入るもの、盡つきず、火きえず、

(四七) もし爾の一眼爾を礙さば、之を抉出せ、两眼ありて、地獄の火に投入られんよりは、一眼にて神の國に入るは、爾の爲に善きなり、

(四八) 彼處に入るもの、盡つきず、火きえず、

こゝにイエスが、手足眼の三者を數へられたのは、我々の犯罪が主として此三者に原因することが多いからであらう、然し、これらは、勿論、身体全体の代表であつて、此外に耳や口も、罪を犯す原因となることは、言ふまでもない、さて此三者は、其犯罪の形跡を異にして居つても、ツマリ其主意とする精神は、一である、こゝにイエスが手足を斷ての、眼を抉出せのこの嚴命をなされたのは、何も此肉體の

手足や、眼を斷ち去れとの義ではない、何となれば、たとひ手足が適はず、視力の利ない人間でもやはり罪惡を犯すことは出来る、この教訓は我等もし罪惡に陥るやうな感あらば、手足眼舌を斷ち去る程の大決心を以て、其罪惡に打勝の覺悟がなくてはならぬとの義である、私は此教訓を讀んで、イエスの救が、世間多數の他力宗のやうに、たと念佛を唱へたり、アーメンを言つて居れば、神の御手に、救はれる、神の救は、我々の行爲や修養によるものではないと主張する宗教とは、全く其の精神を異にして居ることを見止る我々が罪惡に對する覺悟は、其手足を斷ち、其眼球を抉出すの決心がなくてはならぬ、此決心の上に置るた信仰に、神の著しい恩恵が加はるのである、ここに「地獄」とある原語は、「ヒノムの谷」といふ義である、此谷は、エルサレムの東南にあつて、以前は邪神モロクに、小兒を犠牲として供へた處であつたが、其後ここを塵芥棄場として、野菜や鳥獸魚類の臟腑などを、堆高き迄棄るから、其處は自然蛆蟲が多く生ずる、又其處は塵芥や糞屑や病氣で汚れた物などを、焼く處としてあつたから、間斷なく陰氣な火か燃えて熄まないものである、ユダヤ人は、此陰鬱醜怪にして、見るも恐ろしいヒンノム谷(原語ゲヘナ)の有様を、

地獄の狀態に聯想させ、ゲヘナの火といへば、地獄の恐ろしい刑罰の火に譬へられたものである、イエスも、矢張り此意を御採りになつて、ここに「火滅す蛆つきす」と仰せられた、尤も此句は以賽亞書第二十六章二十四節にもあるから、イエスは、矢張其語から思ひ及んで、斯く言はれたものであらう、さてイエスが、ここに語られたる地獄の様子は、勿論譬に相違ないが、然し全然想像として言はれたのではない、彼は來世に於て、罪ある靈魂のうくべき苦みと痛みのゲヘナあることを確に信じて居られたに相違ない。

(四九) そはすべての人は、鹽をつくる如く、火を以てせられ凡の祭物は、鹽をもて鹽つけらる、

(五十) 鹽は善きものなり、然ど鹽もし其味を失はば、何を以て之れに味を加んや、爾曹心の中に鹽を有て、又互に睦み

和ぐべし、

此兩節は古來より聖書の至難句として知られたものである、多數の註釋者は、種々と考察をめぐらして居るが、正當なる解釋を得ないのである、近頃の改正譯には「凡の祭物は、鹽を以て鹽つけらる」の一句は後に竄入したもので、原文はそは人各々火にて味つけらるべし云々

とするが正しいと見て居る、又「凡の祭物は云々」の一句も利未記第二章十四節の文句が、何かの事情にて、こゝに入つたものであらうと見て居る、左近氏の譯には「そは、あらゆる人は、火にて鹽せらるべければ也、鹽は善き物なり、されど鹽もし無鹽氣とならば、何に依てか汝等之に味をつけんや、汝等己に於て鹽を有ち居れ汝等相互に睦み居れ」としてある、さて「火にて味つけらる」とは、火にて鹽氣づけらるの意であつて、火と鹽との形容を一にしたのは、一寸奇妙に思はれるが、然し火と鹽とは、同じ性質の働をなすものであるから、之を一所に於て、其譬を一層痛切にしたものであらう、即ち鹽が他物に入れば、其悪い分子は、糜爛されて仕舞ひ、よい分子だけを保存する功能がある、火も他物に觸れるとツマラス所は焼き盡して仕舞ひ、大切なる所が、いよゝ精鍊せられる、そこで此兩節の意味を考へて見ると、前段に述べられし如く、もし罪ある手、足、眼等あらば、それ等を断ち切つて仕舞はねばならぬ、何故かといふに、他ではない、凡の人々は、盡く火にて鹽つけられねばならぬ、即ち火が物を潔くするか、又滅せしむるか、又滅せしむるかの力の有する如く、神の火も、必ず人靈を精鍊せしむるか、又亡滅せしむるかの二に出でないとの意を示した

ものであらう、さうして、後に入つたと見らるゝ「祭物は鹽をもて云々」は其説明として、利未記に於て、昔神がうけ給ふ供物は、必ず鹽をもて鹽つけられたものである、即ち神の約束の鹽にて、味つけられて居る、斯くの如く我々も或事に對しては、神の靈火の中に投せられねばならぬとの義を示したものであらう、

四十九節の「火にて鹽づけられる」といふ句からして、五十節が現はれて來たのであらう、即ち元來鹽なるものは、腐敗をふせぐに、最も良き機能を現はす者である、然し其鹽氣を失つて仕舞へば何等の功用をもなさない、又再び味つける事も出來ない、故に爾曹も各自の中に、其鹽を有たねばならぬと説かれたのであらう、ユダヤに於ては、鹽が空氣に曝さるゝと、其鹹味が抜けると考へて居つた、又ユダヤの鹽には往々無味に變化するものがあつたのである、そこでイエスは、此事を譬に引用し給ふたのであるが、然し此節は、他に引照す個所がないから、こゝに火と鹽とを兩用に使ひわけ給ふた、深き意義を十分に判斷することが出來ない、或人は鹽は腐れを防ぎ且潔めるもの、火は穢を焼き拂つて清めるもの、鹽は己を犠牲にして人を助くるもの、火は凡の塵を焼き拂ふ、即ち邪心安念を去り、患難辛苦を嘗め盡

して、己を磨き、品性を清め、人格を高めるもの、斯いふやうに、兩々相對照せられたのであると見て居る、又或人は、鹽は清淨にするものといふ點より、四十九節と五十節とを通讀して、火は壊滅せしむる意ありとの點から、四十八節と四十九節とを連結して居ると見て居る、此邊は讀者の熟考と決定に委して置くが、穩當であらうと思ふ。

最後に「又互に睦み和ぐべし」の一句に就ても、種々の説がある、何故に斯いふ句が突然こゝに話されて居るか、又以前の話とは、如何いふ關係が存して居るか、一説には、東方諸國にては、鹽は神聖なる淨事に用ゐるが、又其鹽を共々に食するといふ事は、相互に平和の盟約に入る意を表する義もあるから、こゝにイエスは、弟子等が各鹽となつて互に、平和に睦み合ふ由を述べられたものと見て居る、又或人の説には、此邊の句は、連聯あるものではない、又連聯あるやうに解釋しやうとする無理が生じて來る、局る所、此邊の句は、何れもイエスの教話の斷片的のもので、まだ外にもいろ／＼話されたこともあつたであらうが、本書の記者は、たゞ記應に止めて居たもの計りを、こゝに、一つに並べて書いたものであらうとの事であ

る、兎も角此兩節は、古來より難解の語句と見られて居るだけ、其中には、何か語の足らぬやうな感もする、平生平易なる話をせらるゝイエスが、殊更斯いふ難解の語を御吐きなされるやうなものであるべき筈がないから或人の考ふる如く此等は斷片的の語句が一所に併されたものであるかも知れない。

私等はやゝ長い九章を研究し終つた今振返つて今一度一節から再讀して見ると、第一山上に於けるイエスの變貌を讀み次に山を下りつゝある際一種趣味ある師弟の問答を讀み次に山下に來れば信仰のなくなつた弟子等が一人の病人を持ちあぐんで狼狽して居る有様を見るのであるこの三記事によりて我々は、日常生涯の三世相を了知することが出来ると思ふ我々信者は高い山に居て、美しいイエスの姿を見つゝ、其處に此世ならぬ天國の愉快を以て一生を送りたいと思ふそれが人間の希望であるに關はらず、イエスは矢張り其山を下り給ふた、又師弟相共に打くつろいて人生問題偉人聖者の問題に、楽しい時の移るのを知らぬ程語り合ひ、斯いふ清談感興の中に、日を過ごしたいと思ふに關はらず、イエスは尙次第に下界へ降り給ふた、さて下界に返つて實際問題に觸れ來ると我々の信仰は、實に覺束ないもので信仰の活力は

一向きゝめがなく、反對家の嘲笑冷罵を買ふやうなことも屢ある、たゞイエスのみは、山上にてうけ給へる聖き偉風を保存してよく此下界を御し給ふた、あゝ我等はこゝに傲ふべきものがなくてはならぬ。

次にイエスは、他人の使者となり、孩提の如きものにてもうけよ、決して弱き信者を苦しむるな、一人の小兒を礙すは、大罪であると言き、我等信者は、他人に對して如何に寛大に、忍容に、且謙遜にあらねばならぬかを話された、これと共に又自己の罪惡に對しては、如何に嚴肅に所斷せねばならぬかをも語られた、人を待つことは寛大、自分を處することは嚴肅といふ古語は取も直さずイエスがこの節に於ける教訓である、然るに私等は往々こゝにあるヨハネのやうに、少し自分の氣に入らぬ者を見出すとそれを叱喝のやうに嫌つて攻撃する、それが爲に往々弱い信者を礙して何とも思つて居らない、我々は自分の首に驢磨をかけつゝ、火の海蛆の地底にて傲慢の火や蟲に惱まねばならぬ行爲をしながら恬として恥ぢない、あゝ宗教家たる我々は此章を讀んで實に反省數番宜しくイエスの御言の眞精神を肚に收めねばならぬ。

さて、馬太路加約翰三傳に掲げてある左の記事は、此頃の出来事であつたと思はれるから、参考の爲に列挙することとする。

- 一、イエス、エルサレムに向ふ、(路九〇五十一—五六、約十〇四十一—四十二、太十九〇—二、本傳十〇—)
- 二、人の子には家なしとの言、(太八〇十九—二十二、路九〇五十七—六十二)
- 三、十人の癩病者醫さる、(路十七〇十一—十九)
- 四、善きサマリヤ人の話、(路十〇廿九—三十七)
- 五、祈禱の教話、(路十八〇—十四)

十八、離縁に關する教訓 (第十章一節以下十二節)

第十章一節以下十二節は、キリストが婚姻に關する教訓を垂れ給ふたのであつてこれは馬太傳第十九章一節以下九節にも掲げられてある、此章にて注意すべきことは、我々信者の心得べき實際的教訓を垂れ給ふたことである。それ故此章は、基督教と家庭問題が主となつて居る。

(一) イエスを去り、ヨルダンの外を経て、エダヤの境の内に來りしに、多の人々、また彼に集りければ、(イエス)恒の如く彼等に教訓を爲し給へり、

「こゝ」を去りとは、ガリラヤのカペナウンを出立せられたのである、「ヨルダンの外」とは、ペリヤを指したもので、約翰傳によると、イエスは此間に、少くとも二回エルサレムに御出になつた様子が見える、こゝに「エダヤの境の内に來る」といふ言は、ペリヤの方への退引に、良く應じて居る、さてイエスはこの頃、成べく弟子等の訓練に重きを置き給ふたが、然し一般の人々は、イエスの來訪と聽ては黙つて居らない、直に集り來つて、教を聽かんとしたので、さすがにイエスも、彼等を素氣なく歸らしむるわけにもゆかず、「恒の如く教訓をなし給ふた」のである、然るに反對家パリサイ人等は、イエスがペリヤの此邊に傳道さるゝにも、尙妨害を加へんとて來つたものと見える、彼等は眞先に、此頃の一問題となつて居て、然も十分の解決が附いて居らなかつた、離婚問題を提出して、イエスを試みた、即ち、

(二) パリサイの人、來りて、彼を試み問けるは、人その妻を出すはよきか、

此頃の宗教家の中、ヒルレル派とシャムマイ派の二派は、離縁問題につき、相互に

反對の意見を有つて居つた、ヒルレル派は離縁は差支なしといふ寛容な方で、シャムマイ派は、何處までも不可なりといふ嚴酷なる方であつた、處がちやうど此頃、かのヘロデアンテパスが、先妻を離別して、後妻ヘロデヤを後宮に入れた爲に、ヨハネの攻撃をうけ、彼はそれが爲に、ヨハネを獄中に投じた位であつた、今イエスの居らるゝペリヤは、アンテパスの領地内であるから、パリサイ人等は、ことさら此離縁問題を持來つて、イエスの返答によつては、大にヘロデの反感を起さしむる運動をなす下心があつたかも知れない、そこで、

(三) (イエスは彼等に)答へて曰けるは、モーセは爾曹に何と命ぜし乎、

イエスは、まづモーセの律法に命じたる處を、彼等に喚起し給ふた、これは後にモーゼの律法の精神に立ち入つて、直截に話さん爲の準備であつたと思はれる、其時、

(四) 彼等曰けるは、モーセは離縁状を書き與へて、之を出すことを許せり、

これは申命記第二十四章一節以下四節を基として答へたのである、こゝに於て、イエスは何故モーゼが、斯の如き律法を制定したかの精神を述べられた、即ち、

(五) イエス答て彼等に曰けるは、モーセ(は)爾曹の心のつれなきに因りて、此命を爲したる也、

離縁といふことは、結婚上、普通の途筋ではない、離縁問題の起る以前には、必ず夫婦間に、何等かの忌むべき事情が起つて居るに相違ない、もし夫婦たるものが、結婚の其精神を解して、共棲し居るものならば、決して離縁のやうな、不吉の事柄の起り來るべき筈はない、然し夫婦間の愛情が、一度冷へ出す時には、他の事件の不和とは、幾倍勝つたる、殘酷なる状態が起り來るのである、肉體上又精神上、夫婦間の不和程、酷烈なる苦痛をうくるものはない、モーセは、ユダヤ人間に起る夫婦間の不和より、事實をよくよく目撃して居たから、彼等が苦痛と悲慘の中に棲むよりは寧ろ公然離別して、其苦惱を脱せしむる方が、彼等の爲によからうと考へ、止むなく、離縁状を與へて別るゝことを許したのである、思ふに我國に於ても、ちやうど之と相類する場合は、いくらも見らるゝ、今日の法律上、夫婦合議の上にて、離婚することは許されて居る、然しこれは、人倫上よりしては、實に不面目な醜事である、處が一般の人々は、離婚の恥づべき醜事なることに氣づかず、離縁状さへ與ふれば、妻は何時でも取り替へらるゝものと、濟し込んで離縁といふことが我々

の人格を毀損するものであることを見とめない、これ何故かといふに、彼等は夫婦一體といふ精神が、如何に重要な事柄で、又如何に神聖なるものであるかを、解せないからである、然らば夫婦一體の精神が、何故に重要であり、且神聖なるかといふに夫婦の起原は、たゞ人間の都合上から起つたものでなく、實は天地の神の深き御旨より出たものであるからである、此御旨を了知せない人々は、夫婦の關係がたゞ自分等が、勝手になつたもの、様に心得、神の合せ給へるものであることを知らない、一言にいへば、夫婦の道に神の御旨の存する處を辨へない、よしや知つた處が、これを眞面目に信ぜない、當時のユダヤ人等も、矢張り此信仰が缺けて居たから斯ふいふ明々白々なる問題についても甲乙其意見を異にして、争つて居たのである。故にイエスは此精神を次節以下に、懇々と教訓せらるゝのである、

(六) 然ぞ開關の始、神(は)人を男女に造り給へり、

(七) 是故に人は其父母を離れて其妻に合ひ、

(八) 二人のもの一體なるべし、然ば二には非ず一體なり、

(九) 是故に神の偶せ給へる者は、人之を離すべからず、

此數節は、一讀すればよく了解さるゝ言であるから、たゞ私は九節について、一寸愚見を述べて置きたいと思ふ、イエスの精神から見ると、夫婦は人間の合せたものではない、神の耦せ給ふたものである、これは夫婦の關係に於ける、實に太切なる信仰である、神が開關の初に、人を男女に造り給ふた理由は、夫婦相和合して、家庭を造るべき爲である、されば我等夫婦間に、此信仰がなくては、決して斯道を完ふせられない、夫婦關係を、たゞ兩親の計ひや、或は自分の都合上から、爲したものだとの考を有つ者は、どうしても我儘が出て、後には破鏡の不幸を見るに到るを免れない、全體夫婦の道は大倫であるといふが、何故に大倫であるかと、押して問ふ時は、天地の神の御旨であるといふことを、眞面目に信ぜない者には、決して明確なる返答をなすことが出来ない、キリスト教の家庭が、實際神聖にして平和に赴くといふは、全く夫婦間に此信仰があるからである、此信仰の缺けたる者は、たゞひキリスト教信者の名を有つて居るにしても、必ず不和が生じ、遂には離縁沙汰に及ばねばならぬ、こゝに於てか、我等信者は、いよく神の御旨に服従し、信任して往く精神が、眞に大切なることを感ずる、パリサイ人等は、イエスの離縁に

對する此根本的教訓を聽いて何とも批難の入れやうがなかつたと見え、其まゝスゴ／＼と立去つた、イエスも又語り終つてある家に入り給ふた其時、

(十) 室にありて弟子等また此事を問ひければ、

(十一) イエス、彼等に曰けるは、凡そ其妻を出して他の婦を娶るものは、其妻に對して姦淫を行ふなり、

(十二) また婦も其夫を出して、他に嫁がば、此婦も姦淫を行ふなり、

弟子等は、イエスがバリサイ人に對して語られたる點につき、尙十分腹に落ちぬ處があつたと見え室に入りたる後、再び此事につきて問ふた、其時イエスは、夫婦道の起原は、神の御旨にあることを再説し給ふたる末、此斷案を下された、即ち夫婦とは、たゞ肉體上の關係ばかりではなく、神が一体となし給ふた精神的和合体とすれば、其關係は、肉體が別れたからとて、其縁の絶えるものではない、もしこゝに一人の夫があつて妻の外に、他の婦人と關係すれば、其行爲は妻を侮辱したることとなる、これと同じく妻が夫の外に、他の夫を有つならば、其行爲は同じく夫を侮辱したこととなる、處が神の御旨を知らない人間は、まづ其妻を出しておくか、其夫に別れておいて、後に他の者と關係すれば、別に差支ないものご考へて居る、

然るにイエスの見解から見れば、それは彼等が勝手な氣休めの考であつて、決して神の前に正當なるものとは言へない、彼等の行爲は、間接に夫或は妻に對して、侮辱を加ふることゝなつて居る、何となれば、神の合せ給へるものは如何なる場合にも一体なるを失はない、たとひ本人同志が、合意上別れたとしても、それは本人同志の勝手な考であつて、決して彼等を合し給へる神の意志ではない、故に其妻を出して、他の妻を娶る者は、よしや先妻が承知の上の事としても、神の前には「妻に背きて姦淫すること」となるのである、私は此イエスの夫婦觀を、今日の信者が、一層眞面目に考へる必要があると思ふ、我々信者は自己の爲め家庭の爲め又社會の爲めに、イエスの此精神を、何處まで發揮し往くべきか、今日の信者には、往々此教訓に背いて、勝手な離縁や結婚をして居る者がいくらかもある、理屈上からイエスの此教訓を尤なりと賛成して居ても、實際上、一向此主義を貫徹せしめて居らない者がいくらかもある、今日の信者には、各自の都合で、合意上に離婚したり、又先夫のあつたのに、再婚したりする者がある、然し私は、此際何處までも、イエスの此精神を主張したいと思ふ、これを主張せない限りは、クリスチャンの家庭の神聖や平和は、

眞實に保たれないと信ずる、

十九、幼兒への祝福 (第十章十三節以下十六節)

十三節以下十六節は、イエスが嬰兒を祝し給ふ記事である、これは馬太傳第十九章十三節以下十五節、路加傳第十八章十五節以下十七節にも記されてある、

(十三) イエスに懸られんが爲め、人々孩提を携れ來りければ、弟子等、其携來れる者を責めたり、

偉大なる人物又は聖者より祝福を受けんとして小兒に手を按てもらう風習は、何處の國にもあることである、此頃數多の親達は、我子の將來の爲に、イエスの按手を希望して參つた、これは我子を思ふ親心の發露と共に、イエスを尊崇する眞情も溢れ出て居るので、斯様な時の親々の心持には、決して虚偽はない、斯る事柄は、イエスに於て、實に快とせられ、又歡迎さるべき事柄である、然るに何事ぞ、無情なる弟子等は、嬰兒を携來りたる此親等を叱りつけて、立去らしめやうとした、弟子等の考では、斯る嬰兒を多く連れ來つて、イエスに按手を請ふは、徒に大切なる時間を潰すことで益のない煩さい事と思つたからである、此時の弟子は、親子の眞

情が、如何に美しく、イエスに向ひ來つたかを、見る目がなかつた、彼等は、徒に外形の煩さい状態のみが目にとまつた、大方此時出て來た母親等は、多くは下層社會のものが多くして、一見實に汚らしいものが夥しかつたと思はれる、處が、

(十四) イエス之を見て、怒を含み、彼等に曰けるは、孩提を我に來らせよ、彼等を禁る勿れ、神の國に居るものは斯の如き者なり、

イエスは、弟子等の爲す所を見て、實に情なく思はれた、樂しげに我が許に集り來る親、無邪氣に笑顔を造りつゝ、我に近かんとする孩提を阻碍せんとするは、何たる非宗教的の仕方ぞ、此時今迄ニコニコとして居た嬰兒中、弟子の叱責によつて急に泣き出したものもあらう、弟子等の此仕方は、イエスに取つては、實に不愉快であつた、さればこゝに「怒を含み」とあるは、此不快の念の、面に現はれた様子を語つたものである、さうしてイエスは、弟子に向つて、決して此等の母子を禁むるな我許に來らせよとて、一々小兒を近づけ給ひ、弟子等の小賢い、然も一向無邪氣なる精神なく、何でもなきことに焦心たがる有様を戒むるために、「神の國に居るものは斯の如きものなり」とて、嬰兒を示された、こゝに注意すべきは、イエスは「神の國

に居るものは、此等の小兒なり」とは仰せられず「斯の如きものなり」と宣べられた、神の國は嬰兒許りが居る所だといふ意味ではない、大人であつて、然も此嬰兒の如き、無邪氣に、單純に、コセツカない心を有するものが神の國の人であると言はれたのである、さすがに弟子等も、此言には、大に赤面致したであらう、そこでイエスは重ねて、

(十五) 誠に我爾曹に告ん、凡そ孩提の如くに、神の國を承ざる者は之に入ることを得ざる也、

イエスは神の國に入る者の精神は、嬰兒が全く其親に信頼し、安心して之に委託するが如く、全く神に信頼して、絶対に委託するの念なきものには、之に入ること出来ないと仰せられた、屢申す如く、信仰は信頼である、小兒が親に信頼するが如く、神に信頼する者でなくば、實際天國には入られない

(十六) 即ち彼等を抱きて、手を其上に按せ、之を祝せり、

イエスが汚げなる多の嬰兒を、サモ嬉しさうに御抱きあげになつて、一々其頭を手に按て祝せられた、其情其姿今から想像しても、實に尊く有難く思はしめる、況んや我子を祝せられつゝある、其時の親の心は、果して如何であつたであらう、た

ゞ感謝と喜悦の目を以て、イエスを仰ぎ居たに相違ない、こゝに於て、私等はイエスつ性格が、一面に秋霜烈日の面影あると共に、他面には、斯の如き、和氣霽々春風の如き心情を有せらるゝを見て、一層敬慕の感を深からしむるものがある、

二十、富める青年 (第十章十七節以下三十一節)

十七節以下三十一節は、イエスが一人の青年に對して、應答の記事である、これは馬太傳第十九章十六節以下二十二節、路加傳第十八章十八節以下二十三節にも載つて居る、

(十七) イエス途に出けるに、一人走り來りて、跪き問けるは、善師よ、我がかりなき生命を嗣ぐために、何を行べきか、

「途に出でける」とは、イエスがベリヤを去つて、エルサレムに赴かるゝ途中を指したものである、路加馬太兩傳を参照すると、此時走り來つた男は、青年の宰であつて、然も金満家であつたことが判る、又此青年は、宗敎家でもあり、謹直なる人間でもあり、何處に缺點のないやうに見えたが、然し彼自身には何等か一つ物足らぬ寂しい感を抱いて居たと見える、彼はその頃、イエスの名聲の高きを知り、密に其

人格の偉大なることを見とめたと思はれる、彼は此の人に、自分の胸中を打明け
たならば、或は自己の不滿寂寥を癒やし得らるゝであらうと考へ、さてこそイエス
が出立せらるゝ後を追ふて、こゝに駆けつけたものと見える、彼はイエスに近づく
や謙遜に跪いて、「良き師よ、われ限りなき生命を嗣ぐには、如何したらばよう御座
いますか」と問ふた、其時、

(十八) イエス彼に曰けるは、何ぞ我を善といふや、一人の他に善者はなし、即ち神なり、

イエスが青年の言尻を捕へて、斯いふ詰責をせられたは、如何いふ精神から來た
のであらうか、私の考には、イエスは此青年に接せられた時、一見此男は、何でも
皮相的には、忠實にやる人間であるが、其割合に、精神的に深く決心せぬ男だと
鑑定せられたのである、詳しくいへば、此男が宗教上の不滿も、マダ／＼皮相に止つ
て居る、此青年は律法の戒律は克く守つて居たが、然したゞ形式的に辛抱して守る
ばかりで、其精神に貫徹してやるわけではない、萬事斯いふ風の男であるから、始
めてイエスに出逢つた時にも、直に「善き師」なんぞ、深くも尋もせないで諛るやうな
風で、頭を下げて來たからイエスは劈頭第一、まづ其落つきのない心を戒められた

のであらう、即ち此世に於て、眞に善といはるべきものは、神より他にはないので
ある、然るに、少しく自分の氣に入つたものを見れば、直に「善き師」なんかいふ敬
語を使ふは、實に間違た心であると叱り給ふたのである、然し我々は斯いふ人間を、
今日に於ても、折々見かけることがある、深くも考へずして、某牧師は偉い人だと
聞くと、何がなしに其牧師を崇拜して居る、口の上ではキリスト信者であるが、事
實では某牧師の子分か、僕のやうになりて居り其先生の事とひへば、何でも彼でも、
偉い、尊いものゝやうに有難がつて仕舞ふ、所謂人間に心酔して居る輩で、斯いふ
心を持つ人間は、イエスの前に出れば、矢張此青年の如く叱責を蒙る連中である、
さてイエスは、斯くして一個の痛棒を加へておいて次に我等限なき生命を受くるに
は、別に六ヶしい工夫は入らない、たゞ忠實に神の訓戒を守るにありと説かれた、
即ち、

(十九) 誠は爾が識る處なり、姦淫する勿れ、殺す勿れ、盜む勿れ、妄の證を立る勿れ、拐騙る勿れ、爾の父と母を敬へ、

馬太傳には「爾もし生命に入んと願はば誠を守るべし」との一語が添えてあり、そ
れから此十誠の言を引かれて居る、其時青年は、

(二十) 答へて曰けるは、師よ、これ皆我が幼きより守れるもの也、

馬太傳には、此句の下に「されば何の虧けたるところ我にあるや」と反問して居る、これから見ると、此の青年は餘程規律を守るに忠實なる精神を有つた人に見える、彼は此等を皆よく守つて居たのである。青年血氣の時代にある彼が、克く此等を守り得るは、一方から見れば、ナカ／＼に見上げた人物である、故に、

(廿一) イエス彼を見て愛み曰けるは、爾尙一をかく、往て其所をうり、貧者に施せ、さらば天に於て財あらん、而して來り

十字架を操て我に従へ、

イエスは、此青年が律法を嚴守しつゝあるを見て、之を愛し給ふた、然し惜い哉彼の胸奥には、一個の潛める執着心があつて、除去せられて居ない、もしそれを其まゝにしておけば、いくら律法を守り得たからとて、完き心を持つことは出来ない何時も自己の心中に、不安と寂寞を感ぜざるを得ないのである、そこでイエスは、短刀直入此青年の急所に突き入り、彼が永遠の生命に入り能はざる根本障害について、道破せられたのである、即ち彼は外形上立派なる信者であるに關はらず、内心にはどうしても取除き難い黄金に對する我慾があつた。此慾心の下には、神をも

従へしめ、自己の凡の道念をも押へつけ、従つて他人に對する、愛心や善行にも、不満足を來たすことが、往々あつたのである、イエスの靈眼は、それを見ぬき給ふた、故に爾眞に生命に入りたければ、大決心大猛心を起して、其我慾、吝嗇を打破せよ爾の財産を放擲して、天に財を蓄ふるの覺悟をせよ、さうして思ひ切つて十字架を負ふて、我弟子となれよと、あゝ此一語は、此青年の急所を剔るやうに響ひたであらう、實に堪え難い苦惱を暫時與へられたであらう、

(廿二) 彼の言に因て哀しみ、憂へ去りぬ、彼は大なる産業を有る者なれば也、

彼は暫時イエスの面前にて、言ひ知れざる苦惱を始めた、斷然イエスの言に従ひ決心して従はんか、或は従前の如き生涯を送らんか、然し此時彼には宗教的勇猛心か缺けて居た、悔改めて天國に入る道を取らなかつた、最初慕しげに馳せ來つた様子は、いつしか失せ去つて、今は一言もなく、スゴ／＼其場を立去つたのである、彼は宗教家、宰として、餘りに財産に身を縛られて居たのである、

私は此段を讀んで、イエスの所謂、宗教的新生命に入ることが、決して容易に出來るものではなく、餘程の決心がなくては、限なき生命を享けられないことを、深く

學んだのである、私等は、洗禮をうけて居る、又缺さず會堂に集り、聖書を讀み、祈禱も致して居る、他人に對しても、クリスチャンとして、別に恥かしくない行爲をして居る、然も己か胸中を省みると、何か物足らぬものがある、不安の情がある、心の奥底に喜悅がない、勇氣がない、私等は人知れず苦惱して居る、あゝこれは如何いふ理由であるか、これを詮索して見ると、まだ一つ取去らない、何かの我執が存して居る、それだけが如何しても除去り難い、そこで他にいくら良い事をして見ても、良い教訓を聽て見ても、肝腎、心の奥底に潜む此強敵を驅逐し去らない限りは、眞に爽快なる天地に入ることが出来ない、

尙又私は、イエスが此青年に對せらるゝ態度につき、實に敬服せざるを得ない、全体此青年は、基督教賛成家であつて、自ら慕ひ進んでキリストの許に來つたのである、又キリストも、此男の心ばへを愛でられし如く、兎に角眞面目な男であるから、イエスも少し手柔く待たれたならば、彼は或は弟子の一人になつたかも知れない、彼の性癖をあまり手痛く攻撃せず、其まゝ弟子となさつたならば、彼は悦んで信者の一人となつたかも知れない、ことに彼は財産家であるから、たとひ盡く財

産を擲出す勇氣はなくとも、多少の金子は、喜捨するに相違ない、さればキリストが、も少し穩和に、彼を御受けになつたならば、自分等の經濟上の都合も、大に宜しく、多の點に便益があつたかも知れない、然るに、イエスは斷乎として、彼を痛撃なされた、彼が苦んだ上、スゴく立ち去るのを見ても、其袖を引止めやうとはなさらなかつた、私等が、こゝに學ぶ處は、たとひ有爲な人間でも、財産のある者でも、もし其根底の精神が改悔されないものは、枉げて之を受納れないといふ意氣である、私はイエスの此處置を察ると共に、今日の所謂傳道なるものに對して、屢歎息せざるを得なくなる、前途有爲な青年とか、或は財産ある者等に對する、今日の傳道法は甚だ手ぬるい、彼等に一通りの過誤がないと見ると、別に深く其根底の惡癖を突かず、其まゝに教會に入れる、甚しきは會計上の都合より、いゝ加減な人間に洗禮を授くる弊も見うける、斯の如き傳道は、實にイエスの精神に反して居る、此段なを研究して、宜しくイエスの行爲に鑒みたいものである、元來人々が天國に入らんとする時、最も大なる躓となるものは慾心である、ことに此世の財貨に饒なるものは、勢其財貨に依頼して神に従順にならないやうになる、されば、此世の

財産家は、餘程の決心と、覺悟と、謙遜と、自己の弱きを感じる者でなくては、斷然キリストの教には随ふわけには參らない、故に、

(廿三) イエス環視して、其弟子に曰けるは、財を有る者の、神の國に入るは、如何に難い哉、

(廿四) 弟子この言を駭けり、イエス復答へて、彼等に曰けるは、小子よ、財を恃む者の神の國に入るは、如何に難い哉、

イエスは決して財産家排斥主義の人ではない、然し世の財産家等が、自己の財産に依頼して、神を蔑め、世に誇るの精神に陥り易きを洞見し給ふたから、青年の立去つた後、此歎息の辭を洩らされたのである、然るに此時にも尙世心のある弟子等は、イエスが餘りに、青年に對して、果斷な所置と、奇警なる語を發し給ひしに對して、大に面喰つたのである、神あつての生涯ではなく、錢あつての生涯、神の恩寵の下にスキートホームを造るよりは、財産の下に出来るが、確實だと信じて居る、彼等は、驚くが當然である。そこで。キリストは尙も痛快なる言句を放つて、

(廿五) 富者の神の國に入るよりは、駱駝の針の孔を穿るは却つて易し、

イエスも時にはナカノに奇矯な言を御吐きなさる、ある人は此「駱駝」の原語カメロンは、カミロンの誤であつて、カミロンとは鐵網の事であると説く、又或人は

「針の孔」とは、市街の入口にある小門の名であつて、これは徒步する者が漸く入れる位の處を言つたものだど解して居る、然し私は矢張り駱駝の針の孔を通るといふ、滑稽じみた句と見るが一層面白いと考へる。

(廿六) 弟子等、甚く駭き、互に曰けるは、然らば誰か救を得べきか、

こゝに弟子等が駭いたといふも、全く自分等の胸中に、グット一本參らせられたからであらう、彼等はイエスが王様にでもなられたならば、自分等も大に顯榮の地位に上るべしなんぞいふ。下心もあつたのであらう、彼等は斯くイエスに隨從して居るもの、何時までも、斯様な貧乏暮しで通したくないといふ心も勃々起つて居たに相違ない、然るにイエスは、財産家に對して實に痛酷い言を御吐きなさつたから、甚く駭いて、さういふことならば、此世の人間は、誰も救を得ることは出来ないと、こぼしたのである、其時、

(廿七) イエス彼等を見て曰けるは、これ人には能はざる所なれど、神に於ては然らず、神は能はざる所なければ也、

心靈の救は、人間の方にては到底出来るものではない、然し神に於ては、爲し能はざる所はない、何となれば、神は凡の事を爲し得る力を有し給ふ方であるから、

神もし其力を人々に加へ給ふならば、たとひ富豪財産家であつても、其財産を捨て、弟子になる決心をすることは、敢て難い事ではない、例へばパウロの如きが其實例である、又使徒行傳時代の弟子の精神も、全くこゝであつて、此世の財産や名譽などは、義士の如くに思ひ、たゞ神の爲に力を盡す者となつた、これは神の力が彼等の能はざる處を爲さしめ給ふた例である、

さてイエスは、此話をなさると、傍に聞いて居たペテロは、やゝ思ひ當る感かした、彼はイエスに従ふ爲には、自分の家も親も財産も擲つて來た、そこで今イエスの此御言を聴くと、何となく自分の身の上にあてはまるやうに思はれたので、嬉さ半分に、

(廿八) 是に於てペテロ彼に曰けるは、我儕一切を捨て爾に從へり、

ペテロは十二弟子を代表して「我等」といつたが、其實は自分の身に大に關係して居たのである、ペテロの肚の中では、今の青年は、一切を捨る事に躊躇して、逃げて仕舞つたが、自分は深く一切を捨て、主に従つた、馬太傳には「さらば何を得べきや」と問ふて居る、彼は自分の犠牲の精神は、矢張り何物かを得たいといふ交換的の

意味があつたやうに思はれる、其時、

(廿九) イエス答へて曰けるは、誠に爾曹に告げん、我ら福音の爲に、家宅、或は兄弟、或は姉妹、或は父、或は母、或は妻、或は兒女、或は田疇を捨る者は、

(三十) 此世にて百倍を受けざるものなし、即ち家宅兄弟姉妹母兒女田疇を迫害と共に受け、又後の世には窮なき生命をうけん、

イエスが、こゝに此世に於て百倍をうくと仰せられたは、如何いふ意義であらうか、かの天理教などで言ふ、財産其ものが、此世に於て實際百倍二百倍になつて返つて來るといふ意であらうか、それではイエスの御言も、餘りに現金的に聞えて、面白くない、私は斯う思ふ、即ち思ひ切つて、神とキリストの爲に、其父母や妻子や兄弟を犠牲にする程の覺悟ある者は此世に於て澤山の父母の如き、妻子の如き、兄弟の如き人々を與へらるゝ、たゞ一二の者が、わが親しい關係者計りではなく、天下到る處に、父母兄弟を得るに至ると、斯いふ意味ではあるまいか、本書第三章の三十五節に「それ神の旨に従ふ者は、これわが兄弟、わが姉妹、わが母なり」と仰せられたイエスの語も、同じ意味ではあるまいかと思ふ、兎に角、眞面目に信仰を有つて、世の凡のものを犠牲に供するものには、必ず天下に、其人の母となり、姉

妹となり、兄弟となり、妻子となるやうなものが、幾千百人も出来て来る、然しそれとても、ナカ／＼容易には受けられない、我等は非常の迫害の中に立つて、大に忍耐する決心がなければ、受けることは出来ない、故に「迫害と共にうけ」と言はれたのである、實際我國に於ても、其以前社會や國家の迫害中に立つて、克く忍耐した信者等が、互に團結して、親く交はつたことは、家族も雷ならぬ程であつた、たとに此世に於て、斯の如き同志の親しき者を得るのみならず、之が爲に來世に於ても、神より大なる應報を得て窮なき生命に入る事が出来ると仰せられた、これで見ると、イエスも、確に來世を信じ給へるのみならず、又此世の迫害や困難によく耐へたる者が、其報として、大なる恩恵をうけることをも、疑ひ給はなかつた、

(卅一) されど多の先なる者は後になり、後なる者は先になるべし、

然し斯の如き信者の恩恵は、容易に得らるべきではない、信仰に伴ふ迫害や困難は、決して兒戲的に受けらるゝものではない、此世にある間は、非常なる決心と覺悟がなければ、これ等を完ふし得られない、ペテロの如きは、一切を捨て、キリストに従つたと言ふが、マダ／＼眞正に犠牲、獻身の實を揚げて居ない、彼の眞正

の献身的生活は、これからであつた、否彼は暫時の後に、三度までも、キリストに躓いた、斯の如く、我等信者も、一旦は立派な事を言つたり、自分はイエスの懐にでも入つて居るやうな偉い言を吐いても、案外に躓いたり、墮落したりする、ことに迫害や困難に出逢ふ時、それに耐へ兼ねて、挫折するものが少くない、我々は先進者だからといふて、怠つてはならぬ、先なる者が後になり、一向ツマラヌ信者と思つて居た者が、案外立派な神の榮光を現はすことがある、されば此一節の如きはイエスが信者の精神状態を、よく見ぬいて語られた言であると思ふ、

廿一、三度受難の豫告 (第十章三十二節以下三十四節)

三十二節以下三十四節は、イエスが苦められ、殺された後、復活するといふ豫言をせられる條で、これは馬太傳第二十章十七節以下十九節、路加傳第十八章三十一節以下三十四節にも、掲げられてある、イエスが弟子等に對して、自分の苦痛と死を豫言せらるゝは、これで三度目である、(本書八章三十一節以下、九章三十一節) 然し此際は兼て言へる事柄が、いよ／＼其身に切迫し來るのであるから、イエスは

三度此言を述べて、弟子等の心に尙深き感銘を與へ給ふたものと見える、

(卅二) さて彼等エルサレムに上る途間、イエス弟子に先ち行ければ、彼等(は)驚き且おそれて従へり、イエス十二(弟子)を伴ひて、將に己に及んさする事を、彼等に告給ひけるは、

(卅三) 我等エルサレムに上り、人の子は、祭司の長老學者等に付れん、彼等これを死罪に定め、異邦人に付し、

(卅四) 又これを嘲弄し、鞭ち、唾し、且これを殺さん、斯くて第三日に甦るべし。

此時イエスは、平生とは模様が変わつて、弟子等を後にのこし、單身テク〜と先へ歩み出された。弟子等は、師が今回のエルサレム行は、何だか薄氣味の悪い素振のあることを窺ふたが、今やイエスは、平素とは違つて、急がる、有様を見て、いよく驚くのみならず、何となう恐ろしい威も出で來たのである、其時イエスは、又自己の運命を彼等に語り出し給ふた、左近氏は三十三節の初句を、

「見よ我儕今エルサレムに上るなり、其處にて人の子は、祭司の長老、學者等に付さるべし云々」

と譯して居るが、此譯の方が趣味あるが上に、イエスの心中をよく寫し出して居ると思ふ「見よ、我儕今エルサレムに上るのであるぞ」と仰せらるゝ、其時のイエ

スの胸中は、果して如何であつたであらう、これは讀者の判斷に任すとして、兎に角イエスは、此時一種いふべからざる感慨を有つて居られたに相違ない、何か深い感があつたればこそ其舉動の上にも、又其言語の上にも、一種悲壯なる面影が現はるゝに至つたのである、さて此時のイエスの語は、前にも解釋したると同様であるから、こゝには再説せない、

卅二、ヤコブ、ヨハネへの教訓 (第十章三十五節以下四十五節)

三十五節以下四十五節は、ゼベダイの子の二子が、イエスに自己の希望を要求する條である、これは馬太傳第二十章二十以下二十八節にも記されて居る、

(卅五) ゼベダイの子、ヤコブとヨハネ、イエスに來りて曰けるは、師よ我儕が求る事を願くは爲し給へ、

(卅六) イエス彼等に曰けるは、爾曹に我が何を成んことを欲ふや、

(卅七) 彼等(イエス)に言けるは、爾榮を得んとき、我儕の一人を其右に、一人を其左に坐せしめよ、

馬太傳を見ると、此時此兩人の母サロメが、二人を同伴して、共に願つたと記してある、こゝに我々が考ふべきことは、何故ヤコブ、ヨハネの兄弟が、母と共に、

突然斯いふ事を、イエスに求めたかといふ事である、前段イエスが、自分の苦痛と死を御話しなされた、そのことを聴ける彼等としては、餘りに理由のわからない要求である、然しよく考へて見ると、こゝに大に理由の存することを見出すのである、それは、さきにイエスが、青年の宰と問答の中、一切を捧げざるものは、神の國に入るに能はずとの教訓を垂れ給ふた、其時ペテロが進み出で、私は一切をすて、爾に従つたから、それが爲に、何をすべきかとの問を起した處、イエスは此世に於ては百倍、後の世にても窮なき生命をうけんと答へられた、それを傍に聴て居たヤコブ、ヨハネの兄弟は、實に不満に堪へられなかつたのである、イエスに従つたものは、自分等兄弟は、ペテロよりも先である、然るに、ペテロは、厚顔しくも自分等兩人を出抜いて、イエスから與へらるべきものを、真先に要求した、實に失敬千万である、考へて見れば、何もペテロだけが、一切を棄て隨つたのではない、自分等も同じく一切を棄てたのだ、さすれば、もしペテロの要求が入れられたとすれば、自分等は、ペテロ以上の要求が入れらるゝが當然である、斯いふ嫉妬心に驅らるゝと共に、例の「雷の子」といふ渾名を受けて居る程の短氣者であつたから、

もう堪へ切れなくなつた、これには其母親も同じく憤怒に充たされたものと見ゆる、處が其後イエスはエルサレムに往つて、一旦は苦痛をうけて殺さるゝが、然し後には甦るべしと仰せられた、ヨハネ等の心では、イエスが甦るといふ事は、これ即ち新しき王國を建て給ふ暗示であつて、復活したるイエスは、直に其國王になり給ふに相違なしと見た、これはユダヤ的思想から、メシヤを躡望して居るものゝ、一般の信仰であつたから、彼等も、イエスの復活といふことが、即ち新王國の建設といふ意であると取つたのは無理ないことである、そこで母子三人は、其王國の建設に近づきつゝある場合、又他人に先を越されないうちに、まづイエスに依頼して置く必要がある、もし手後れると、又ペテロ等に良い位置を奪はるゝかも知れないと斯いふ淺ましい取越苦勞から、願ひに來たものと思はれる、さて「一人は右、一人は左」とは、國王の左右の大臣になることを意味したものである、考へて見ると、弟子等の精神は、此時までも、尙斯いふツマラス嫉妬や競争心に満たされて居たのであるから、彼等がどれ程師の心を解し、如何程師の事業を了知して居たかは、此一事に徴しても、其淺薄さ加減が知らるゝのである、彼等はイエスを以てたゞ此世に建てら

る、新王國の君主といふ方面のみを見、實は苦痛と迫害の下に、靈性上の王者となる、の意味に注意せなかつた、さればイエスが三十節に「迫害と共に云々」と仰せられた言語も、彼等には一向解つて居なかつたと見ゆる、又イエスが再三御話になつた御自分の苦痛や死の有様も、弟子等の考では、たゞ一寸蚤の喰つた程の事のやうに思つて主が廻り給ふものとすれば、それ等は何でもないものゝやうに考へて居たであらう、尙彼等の氣附かざりし問題は、イエスに隨從する者等は、たゞ主が淺ましい苦痛に逢ふことを目撃する計でなく、自分等も師に勝る苦痛に遭遇せねばならぬことに思ひ及ばない一點であつた、苦しむものは主のみで、自分等は、一向平氣に暮せるものと考へて居た、それが爲に、今斯様なノンキな要求をするに至つたのである、そこで、

(卅八) イエス(は)彼等に曰けるは、爾曹は其求ふ所を知らず、爾曹(は)わが飲む處の杯を飲み、わが受くる所の

バプテスマをうけ得るや、

イエスは自分のみならず師弟一團、が遠からず非常なる苦境に陥るべく進みつゝあることを前見し給ふたから、彼等が斯様なノンキな要求をしに來た時、反つて彼

等に反問して、爾曹はさういふ樂觀的の事計りを言つて居るが、私がこれからエルサレムに往つて、飲まんとする杯、又受けんとするバプテスマを、共に受け得る覺悟あるかと言はれた、「杯」とは勿論イエスが身心兩面に味ひ給ふ苦悶を意味したものである、又バプテスマとは、イエスがいよく世の罪惡の爲に、自分の身を犠牲に供せんとせらるゝ決心を意味したものである、思ふにイエスは此時彼等二人の要求を御怒りになるよりは、寧ろ惘然に考へられたものと思はれる、彼等は自分等の眼前に迫りつゝある、苦い杯と、苦しいバプテスマの事には、何の氣もつかず、斯るノンキな願をしに來る、其無智御邪氣を御考へになると、叱るわけにも往かない、それ故、穩和にして然も意味の深い問を發し給ふたが、然し二人には、此反問が、其實何の事だか解らなかつたのである、彼等は今師が飲めよ、受けよと言はるゝものを、受けて置かないと、自分の將來の都合が悪からうと考へて、何の意もなく、大安受合に受合つて、

(卅九) 彼等いひけるは、能すべし、イエス彼等に曰けるは、爾曹は實に我が飲む處の杯を飲み、又我受くる處の

バプテスマを受べし、

第三編 ガリラヤに於ける危機

(四十) さて我が右左に坐する事は、我が子ふべきにあらず、たゞ備へられたるものは予らるべし、

彼等は何の思慮もなく、無鉄砲に「能すべし」と答へたが、答へた本人には、一向何の事かサツバリ解らない、却つて問ふたイエスは、此二人の前途の運命を、疾く達観して居られたのである、そこで今彼等が無意味に答へた此返答も決して空言にはならず、必ず彼等自身の上に實現さるゝ日あるべしと斷言せられた、イエスの此斷言は果して間違なく應じて、ヤコブはイエスの昇天後、間もなく、殉教者として、ヘロデ王に斬殺せられた、(使徒行傳十二章二節) 又ヨハネも斯教の爲に、屢迫害をうけ、後にはバトモスといふ島へ流さるゝに至つた、(黙示録一章九節) 思ふに彼等兄弟は、後日に至つて、イエスの此言が、始めて我身に適中したことを感じ其眞意を解したのであらう、然し此は後の御話である、さてイエスは、彼等に對して此言を述べらるゝと共に、尙附け加へて、我は爾曹に貴い爵位を與ふるとは出来ないが、然し天の父が、爾等に與へんと具へ給ふものは與へらるゝと申された、これも實際に應じたので、彼等は其身に非常なる迫害を受けて苦死致したが、それが爲に、天の父の備へ給へる恩寵は、遺憾なく受けて、此世を逝ることが出来た、馬太傳には

備へられたるものの上に「わが父」この文字がある、其方が一層よく意味が通ずることと思ふ、

(四一) 十人の弟子、これを聞いて、ヤコブとヨハネを憤れり、

思ふに他の十弟子も、矢張り同じ慾望に満たされて居たから、ヤコブ、ヨハネの兩人が、先驅して顯榮の地位を要求したとの事を知つて大に憤つたのである、あゝ二年間も寢食を偕にし、兄弟同様の交際をして居る彼等が、一度、利欲、名譽の競争になると直に斯いふ淺ましい憤怒を起して、互に嫉妬し合ふ、イエスは此有様を見て、非常に歎はしく思はれた、そこで、

(四二) イエス彼等を召て曰けるは、異邦人の君と見ゆるものは、其民を治め、又大なる者どもは、彼等の上に權を執る、これ爾曹の知る所なり、

(四三) さて爾曹の中には、然すべからず、爾曹の中大ならんを欲ふ者は、爾曹に役るゝ者ならん、

此世の君主とか、又英雄豪傑といふべき輩は、成べく他者の上に立つて、權威を振ふことを名譽と考へて居る、然し爾曹はさうしてはならぬ、爾曹の中の偉人は、他人の奴僕となるの覺悟がなくてはならぬとの義である、イエスの王國は、權威を

以て支配せず、愛を以て治むる所であるから、其中に住む人々も、競争心を棄て、謙遜にして、勞する者が榮譽の地位に擧げらるゝのである、これ即ちイエスの所謂天國の状態である、

(四四) また爾曹の中、首たらん欲ふ者は、凡の人の僕ならん、

(四五) そは人の子の來るも、人を使ふ爲に非ず、反つて人に使はれ、且多の人に代りて、その生命をすて贖ならん爲なり、

キリストは、こゝに服従の勝利といふことを教へ給ふた、我等信者は、神に對しては絶対に服従せねばならぬ、又人に對しても何處までも服従せねばならぬ、然し其服従とは、奴隸的の服従ではなく、愛心よりの服従である、イエスが此世に來り給ふた目的は、全く此服従を示さんが爲であつた、然し服従するからとて、たゞ人に盲従するといふ義ではない、神に服従するから人に服従するのである、キリストは神の旨に服するが爲め多くの人々に代つて其生命を棄つることを厭ひ給はなかつた、弟子等が、此精神を味つた時は、如何して前の如き嫉妬や反感を起す筈があらうか、こゝにイエスが「多の人に代り、其生命を與へて贖とならん爲め」と仰せられた意味は、如何いふ事であらうか、キリストの御心中には、自分の死が、確に人々

の贖となることを認めて居られた、然し其贖といふ意は、全く罪人の罪を消す爲といふことか、又罪人を罪の束縛より脱せしむると見るかの兩様がある、前者の如くならば、從來に稱道さるゝ正統派の説で、後説ならば、今日の所謂進歩派の説である、例せばアメリカの兵士が奴隸束縛の爲に、其生命を棄て、彼等を自由にしてやつたといふ時、兵士の死が奴隸の爲に贖となつた、その如くキリストの死が我等の罪の束縛を自由にしたといふ意になるのである、これは信する人の心持によつて違ふと思ふ、

廿三、 エリコの盲人醫さる。(第十章四十六節以下五十二節)

四十六節以下五十二節は、盲人バルテマイが癒さるゝ記事である、これは馬太傳第二十章二十九節以下三十四節、路加傳第十八章三十五節以下四十三節にも載つて居る、

(四六) 斯て彼等エリコに至り、イエス其弟子と大なる群集と共に、エリコを出る時、テマイの子なるバルテマイといふ盲人、路の傍に坐して乞ひけるが、

第三編 ガリヤに於ける危機

馬太傳を見ると此時の替者は兩人であつたと記してある、又路加傳を見ると此替者の出来事は、イエスがエリコへ入り給ふ時であつたと記してある、然し此等の記事の相違を、無理に調和しやうとすると、不味くなる、斯様な記事には、往々傳聞の相違のあることを認めねばならぬ、又認めても差支へないと思ふ、「バルテマイ」は、テマイの子といふ意味である、されば其上の句の「テマイの子」は重複語となる、或は此替者は、バルテマイといふ渾名を取つて居たかも知れない、さて此替者は、兼てイエスを敬慕して居たものであらう、そこで、

(四七) ナザレのイエスなりと聞て、呼はり曰けるは、ダビデの裔イエスよ、我を恤み給へ、

「ダビデの裔」とは、メシヤ教主といふと同じ意味である、メシヤはダビデの裔より出づるとは當時一般の人々の信じて居た處である、

(四八) 多の人々これに縋附せ戒めけれども、愈呼はりて、ダビデの裔よ、我を恤み給へと曰ければ、

ツマラス乞食が、イエスに對ひて、頻に呼ぶから、イエスは厭ひ給ふであらうと思つて、多の人々は、「黙れ」と命じたのであらう、然し熱誠なるバルテマイは黙らない、頻に呼ぶから。

(四九) イエス立止りて、彼を召と命じければ、人々替者を召て彼に曰けるは、心を安んぜよ、起て、イエス爾を召よ、

(五十) 替者その表衣を棄て、起てイエスに來れり、

私は此時の光景を想像して、實に一種の感に打たるのである、羣集の中に一人が見ぬない目を見張りながら頻に呼んで居る、大聖者イエスは、これを聞て、近く召べと言はれる、羣集は此事を盲人に傳へると、彼は嬉しさの餘り、自分の上衣の落ちるをも省みず、躍らん計りに、イエスの處に參る、宛然一幅の愛と喜の畫である、「起ちて」の字は、跳ね上るとの意である、其時、

(五一) イエス答て彼に曰けるは、爾われに何を爲られんか欲ふや、替者曰けるは、主よ見えなんことを欲ふ、

替者の希望は、高尚ではなかつた、たゞ自分の肉眼の癒やされんことで、精神問題には何等の注意をも拂つて居らなかつた、然し高尚なる點はなくとも、其熱誠とイエスに對する信仰とは、實に大なるものであつた、そこで

(五二) イエス彼等に曰けるは、往け爾の信仰爾を救へり、直に彼見ることを得、イエスに従ひて路を行けり

バルテマイは、此時からイエスの弟子の一人として、永久に仕へたであらう、又従つて高尚なる精神上的の陶冶をも享くることが出来たであらう、路加傳を見ると、

此結果、多の人々は神を讃めたのである、

さて此頃に、左の二の記事があつたと思はれる、

- 一、イエス、ザアカイを召び給ふ、(路十九〇一―十)
- 二、十斤の金の譬話、(路十九〇十一―廿八、太廿五〇十四―三十)

第四編 受難週間

一、メシヤとしての入京(日曜日) (第十一章一節以下十一節)

第十一章一節以下十一節は、イエスが公然王者たるの態度を採つて、エルサレムに入都せらるゝ記事である、これは馬太傳第二十一章一節以下十一節、路加傳第九章二十九節以下四十四節、約翰傳第十二章十二節以下十九節にも記されてある、今こゝにイエスの入都について、其時日を確めて置くの必要があると思ふ、四福音書を参照して見ると、此日はニサンの十日で日曜日であつたとがわかる、即ちイエスが十字架にかゝられたのは、金曜日であつたから、それから數へもどして見ると、イエスはニサンの八日の金曜に、エリコを出立せられ、其翌日(安息日)にベタニヤに着せられた、これは恰も逾越節の六日前であつたから、其處にて、靜に聖日を守られ、其夕方癩病シモンの家にて、マリヤが香油を塗るの事柄に出逢はれた、又其夜ユダヤ人等は、イエスを殺さんとの協議を遂げたのである、

イエスが今回の入都は、大に期する所あつて、決行せられたものであつて、決して偶然の参詣でもなく、又弟子等の希望から、入都をなされたのではない、イエスは、今回必ず自己の身を犠牲に置かねばならぬことを、よく承知して居られた、それが爲に、彼は最後の思出にとて、威儀堂々、ユダヤ國王の態度を備へて、此行を致されたのである。

(一) 彼等、橄欖山のベテバゲとベタニヤに至り、エルサレムに近ける時、イエス、二人の弟子を遣さんとして、

(二) 彼等に曰けるは、爾曹對面の村に往け、彼處に入らば頼て人の未だ乘らざる所の繋げる驢馬の子を見べし、それを解て牽き來れ、

(三) もし誰か爾曹に、何故然する乎といふ者あらば、主の用なりと曰へ、さらば直に其をこゝに遣るべし、

橄欖山とは、原語オレア山と言つて、エルサレムとベテバゲの間にある岡丘である、ベテバゲとは、無花果村の義、ベタニヤとは棗村の意である、ベテバゲは、エリコとエルサレムの中間にある一小村で、エルサレムに往く途中として、普通ベタニヤの先に書いてあるから、恐らくベタニヤの東方にあつたものと見える、(地圖を参照)さてイエスは、此兩村近く來られた時、二人の弟子を遣はして、向ふのベテバ

ゲ村に往つて、未だ他人の乗らぬ驢馬の子が居るから、それを解て、牽き來れよと命じ給ふた、馬太傳の方を見ると「驢馬の其子と偕にあるに遇ん」とあつて、母子二疋の驢馬が居つたものと見える、もし其時、誰か咎むる者があれば、これは主の御用の爲に使ふのである、使つたならば、直に御返しするからと言へよと命じ給ふた、さてこゝに注意すべきは、イエスが如何に權威があるからとて、然も知りもせぬ人の驢馬の子を、何の謝りもなく、黙つて引き來るといふは、少しく了解し兼ねる事柄である、或人の考には、此驢馬の持主は、矢張りイエスを信する一人であつて、これ迄イエスがベタニヤなどに御出になつた時、此家にも立寄られ、親くして居られた事のある人である、又此頃牝驢の子が産まれて居た事も知つて居られたので、恰ど自分が入都する際、それを思ひ出されて、借りにやられたものであると解して居る、これは實に穩當なる解釋で、私も左様と思ふ、さうして、イエスの言の如く持主が悦んで、其驢馬の子を貸し與た處から考へて見ると、彼は如何にもイエスを尊信して居た者と思はれる、又ある學者の説には、イエスがこゝに弟子に對して言はれた命令は、餘り説明的に過ぎて居る、思ふに此時、イエスはたゞ驢馬の子

を借りて來よと命じ給ふた計りであつて、母と共にある子とか、或は誰も乗らざるものとかいふ言語は、後に記者が附加した説明で、本來イエスの言でなかつたのであるが、記者はイエスを凡人以上の方であるやうに見せんが爲に、盡く之をイエスの言にして仕舞つたものだ、果して如何だか解らないが、然し私はこれらを盡くイエスの言語と見ても決してイエスが奇跡的天眼通で見られたものと解する必要もあるまい、前に言ふ如く、此驢馬の所有者が、イエスの親しい弟子の一人であつたと解して見れば、イエスの此時の言語が、別に不思議に聞ゆる筈ではない、然るにこゝに看過してはならぬことは、舊約書ゼカリヤの書第九章九節に、「シオンの女よ大に喜べ、エルサレムの女よ呼ばれ、視よ汝の王は來る、彼は正義くし、救拯を賜はり、柔和にして驢馬に乗る、即ち牝驢馬の子なる駒に乗るなり」とある、イエスは、此時自分は、メシヤたるの抱負をもて、入都せらるゝのであるから、豫言者ゼカリヤの言に應じ、こゝに牝驢馬の子に乗つて、エルサレムに入るの決心をせられたものと思はれる、この時、他の目から見れば、或は滑稽の状態に見えたかも知れない、何となれば、見すばらしいイエスが、ツアラヌ漁師や税吏のあがり者十數名

を随へて、さも悠然として、驢馬に打跨つて、王者らしい風彩で進まるゝ有様は、如何にも狂氣じみた仕方の方に見える、然もイエスが、斯る行動をなして恥ぢ給はざりし自負の精神は、我等の大に注意すべき點である、彼は今度の入都が、其最後であることを覺悟して居られたから、もはや再び爲し難き此旅行に於て堂々たる威儀をつくらひ、舊約の豫言に適つて、驢馬の子に乗つて進行せらるゝは、實に太した抱負であつた、さてこれから後のイエスの態度は、十字架の死に至るまで、何處にも此王者たるの風を以て臨まれましたことは、以下の記事を見ても、よく察することが出る、さて三節の文意は、少しく不明である、次の如くに改訂すると明瞭にならう、即ち

「若し誰か爾曹に、何故然するかと言はゞ汝等言へ、これ主の用なり、彼直に之を返すべし」と、

さて次の節に進まう、

(四) 彼等往きて、門の外の岐路に繋げる驢馬の子を見て、之を解ければ、

(五) 其處に立る人々のうち、或人彼等に曰けるは、此驢馬の子を解て如何にする乎、

(六) 弟子イエスの命ぜし如く曰ひしかば、遂に許したり、

(七) 弟子驢馬の子を、イエスに乘せ來りて、己が衣を其上に置ければ、イエス之に乗れり、

此あたりの記事は馬可傳が最も精細に描寫して居る、即ち弟子等は、イエスの命令通りに、驢馬の子を借り來つたが、鞍がないから、兎に角自分の上衣を脱いで、其背に置いた、其上にイエスは乗られた、

(八) 人々多くは、其衣を路上に布き、或は樹の枝を伐て、路上に布き、

上衣を路に布くことは、國王の通過を祝する爲の行爲である、(列王下第九章十三節參照) 又木の枝を路に布くことも、通過の路をよくする爲の當時の仕方であつて、何れも尊敬の意を表した徴である、イエスの此旅行は、一見滑稽じみたやうに思はれるが、實は決して左様ではなかつた、兼て彼に隨從したりし大衆は、今や彼が驢馬に乗つて、悠々として進み往かる、有様を目撃して、思はず其身邊から赫々たる光輝の發揮せられたやうな感が致した、誰の心中にも思はず尊敬の念禁じあへず、我知らず、其上衣を脱いで布き、又木の枝を布て、其進行を祝したのである、私は此節を讀んで、如何にイエスが外形の疎野なるに關らず、衷心より出づる權威によ

つて、人心を引きつけ給ふことの、大なりしかを想像せざるを得ない、然し末句の「或は樹の枝を伐りて」の日本譯は、原意を洩らして居る、「他の人々は島より伐り取る枝を道に敷き」と改訂せねばならぬ、此の地方の島とは、果樹園や無花果園などで、小枝を伐り取るには、至極自由に出來て居たから、彼等は熱心の餘りに、斯いふ事を致したものと見える、

(九) 且前にゆき、後に從ふ人々、呼はり曰けるは、ホザナよ、主の名に託て來る者は福なり、

(十) 主の名に託て來る、我儕の父なるダビデの國は福なり、至上處にホザナよ、

約翰傳第十二章十二節を參照して見ると、此時の群衆は、ワザ／＼イエスに逢はんが爲に、エルサレムから來たものもあつた、又エルサレムの方へ往く爲に、ペタニヤ方面から出て來たものもあつた、何にせよ、彼等はイエスの此有様を見て、等しく歡呼を放つたのである、「ホザナよ」とは、我を救へよ、又爾の救を送れよとの義である、これは頌贊の聲と見るよりも寧ろ祈願の意を顯はしたものである、「主の名によりて來る者は福なり」との語は、通常逾越節の際、巡禮者等が、エルサレムの都城に入らんとする時、唱ふ祝歌の一節である。(詩篇第一百八篇二十六を參照) 又此

語は、逾越節の讃歌の一部分にも用ゐられて居る、(詩篇第百十五篇以下百十八篇を参照) 處が其場の人々は、此唱ひ馴れたる語をもて、イエスを歡呼したのである、即ち神の御名によつて、此世に來られたる爾は福なる方であると祝した、のみならず彼等は重ねて、「主の名によりて來る、我儕の父なるダビデの國は福なり」と叫んだ、此歡呼はたゞ馬可傳だけに記されて居るが、これメシヤたるべき彼は、再びダビデ王の位に回復するものなりとの考へから、斯く頌讚したものであらう、ある譯には「來らんとする、我儕の父ダビデの政治は福なり」としてある、ダビデの裔なる救主が、再びダビデの位に即くこのことは、ダビデが再び復位したやうなものであるから、斯いふ風に叫んだものと見える、さうして最後に、「いと高き所にホザナよ、これは再び祈願の意を表はしたもので、どうか私等が只今願ふ「救の來れかし」と思ふ意が、高き天上にて承けられんことをこの義である、路加傳を參考すると、此時の群衆が、斯の如くイエスを迎ふる熱誠の莫大なるを見て、其大衆の中にありしバリサイ人が、イエスに向つて之を制止すべしと云ひ出した、其時イエスは答へて、「此輩もし黙せば、石叫ぶべし」と仰せられたとある、イエスは、甘んじて彼等

の大歡迎をうけ、昂然たる意氣を以て、エルサレムに向はるゝ處は、實に目も醒むる計りの光景であつたと思はれる、

(十一) (さて)イエスは(は)エルサレムに至り、聖殿に入りて、悉く見まはし、時既に暮に及びければ、十二(弟子)と偕にベタニヤに出で往けり、

イエスは威儀堂々ど驢馬に跨りつゝ、公然衆敵を眼下に見て、エルサレムに入り給ふた、彼は、聖殿に至りて一巡し給ふたが、これは父の殿に到着した心持で、恰も己が邸宅であるが如き意氣を以て、一巡せられたのである、處が父の殿を検査し給ふ時、其中には、實に俗氣に充ちたる醜穢なる事柄を觀察し給ふた、これが爲に彼は翌日、再び殿に來つて、其中を淨めんと決したまふたのである、さうして其夜、一ト先づベタニヤに引返し給ふた、其理由は、彼處には熱信なるマリヤ姉妹を始め親しい教友が多く居る處であつたから、最後にマリヤ始め其他の信者等に、永訣を告げんが爲に往かれたものと思はれる、此後、イエスは多忙多事の間にも、二度までもベタニヤに往かれて饗宴をうけ給ふたことが記してある、(第十四章三節参照) それ等から考へると、イエスは信仰厚きマリヤ姉妹、並に師弟の情厚き信者等の手

によつて、幾分にも慰藉をうけん爲であつたとも思はれる、斯く考へて見ると、イエスはベテバダに於ては、遠慮なく馬を借り入る、弟子を有し、又ベタニヤには、心置なく打語ふ信者を有し給へる事は、彼の身に於て、實に幸福なることであつたと感ずる次第である、

二、無花果樹呪はる(月曜日)(第十一章十二節以下十四節)

十二節以下十四節は、イエスが無花果樹を呪ひ給ふ記事である、これは馬太傳第二十一章十八、十九節にも記されてある、此日は恰も月曜日の朝で、イエスは此日に神殿を淨め給ひ、其翌火曜日の朝呪はれたる無花果の枯れたるに關して、一場の教話をなされた、それからエルサレムに赴き、其處に終日居給ふことゝなつて居るが、此邊の記事は、馬可傳が最も委しく書き出してある、

(十二) 明日彼等ベタニヤより出でし時、イエス饑たり、

此日イエスは神殿を清めんが爲に、食事もソコ、早くベタニヤを出立し給ふたと見える、處が途中で、急に空腹を覺え給ふたのである、

(十三) 遙に葉ある無花果の樹を見て、その樹に何か有んきて來りしに、葉の外、何も見ざりき、これ無花果樹の時に非れば也、

無花果樹の葉の生ずるは、大抵早くて六月、晚きは八月頃である、然るに此時は、恰も四月頃であるから、果のあるべき時ではない、然るに葉が多く茂つて居る、無花果樹の葉のあるは、果のある徴候であるから、普通からいへば此頃の無花果樹はどれにも葉が少い筈である、處がイエスの目にこまつた此無花果樹は、案外にも大變葉が多くあつたから、これは定めし、特別早く果がなるのであらうと、やがて近づいて見られた處、矢張何の果もなかつたのである、イエスは此時まさに、當時の僞宗敎家、僞善者たるバリサイ、サドカイの輩を覺醒せんとして、これから神殿に往かる、途中であつた、然るに情けない哉、獨りユダヤの人間のみならず、無花果樹までが、僞善者の風を呈して居る、果の生せぬ時ならば、葉も茂らない筈であるに、葉だけが存外多くして、如何にも果のありさうな風を見せて居た、さうして近寄つて見ると、何にもなくて失望させた、恰も此頃の宗敎家が、外見は立派な風を見せて居るが、實際には何の果をも有たず、餓えたる靈に何等の糧をも與へずして、空しく失望さすると同じことである、イエスは此感に打たれ給ふたから、

(十四) イエス此樹に對ひて、今より後、永久も爾の果を食ふ人あらざれといふ弟子之を聞けり、

イエスは憤慨の餘此樹に對して、此痛言を發し給ふた、然し考へて見ると、樹は無神經、非情のものである、イエスはそれに對して、恰も人間に物言ふ如く、之を呪ひ給ふとは、チト滑稽じみた話である、これでイエスが、正面から此樹を惡んで仰せられたものではないことに注意せねばならぬ、前にも言つた如く、當時のユダヤ人が、滔々として偽善の風に陥つて居る有様は、實に見るに忍びぬ程で、神殿までも營利の家として居るから、イエスは實に慷慨に充ち給へる折柄、不思議にも、此無花果樹までが、ちやうど當時のユダヤ人の精神を、代表して居る、そこでイエスは、此樹の偽善に寄せて、自己の感慨を吐露せられたのである、これと同じ例は、イエスが此後シオン山上から、エルサレムを見下して、「あゝエルサレムよエルサレムよ」と悲憤の言を放ち給ふた、あれもイエスが、たゞエルサレムの市街其ものを憤つて仰せられたものではない、實はエルサレムにある偽善者輩の行爲に憤慨して語られたものである、尙此無花果樹の事については、引續て後に話があるから、こゝに言ひ足らざる處は、其處に譲つて再び申上ぐるこゝとする、

三、 イエス神殿を淨む (第十一章十五節以下十九節)

十五節以下十九節は、イエスが神殿を淨め給ふ記事である、これは馬太傳第二十章十二節以下十六節と、路加傳第十九章四十五節以下四十七節にも掲げられてゐる、又約翰傳第二章十二節以下十七節にも、同様の記事が載つて居るが、これはイエスの傳道の初時にあつたとある、此約翰傳の記事は、其實此時の事柄を二重に載せたもので、神殿清淨の記事は、實は一度よりなかつたのである、約翰傳は、其書の構造の趣意から、あゝいふやうに始に書したものであると説く人もある、然し普通の註解者は、此事は前後兩度あつたものと見て居る、理屈上からいへば、三年足らずの間に、斯る事がどうも二度行はれたとは、何だか妙に感ぜられる、ことに傳道の最初に、イエスがさういふことをなさることは、イエスの働き給ふ精神から見ても、何だか變に思はれて、或は約翰傳の記事は、ことさら此事柄を始に持つて來たものではなからうかとも思はれる、然し他方から見ると、此記事の時代の始と終とがあまりに判然して居るから、確に同一記事であつたに相違ないとの反證の上ら

ない限りは、二度あつたとしても、それを否定する根據はないのである、尙二度あつたと見る人の見解では、最初の清淨は、イエスが宗教改革者の態度から爲さつたもの、最後の清淨は、メシヤの態度から行はれたものであると見て居る、さう見れば又面白くないでもないではない、然し斯様な度數の問題は、どちらであつても差支はない、我々は寧ろ此精神を味ふ方が必要であるから、別に斯ることを重要視する必要はないと思ふ、

(十五) 彼等エルサレムに至り、イエス殿に入りて、其中に居る、賣買する者を殿より逐出し、兌換銀者の案、鴿を賣る者の椅子を倒し、

(十六) 且器具を以て、殿を通ることを許さず、

此頃殿中に出して居る種々なる賣店は、ある點からいへば、皆良の主意から設けられて居たのである、「賣買する者」とは、神殿に捧ぐる牛羊を賣るもの、「兌換銀者」とは、當時ユダヤには、ロマの貨幣が普通に通用して居たが、然し神殿に捧ぐるものは、ユダヤ固有の貨幣でなくてはならぬ、(出埃及三十〇十三参照)といふので、便宜上金銭交換所が、殿の中に出來て居たのである、又「鴿」も、献納品の一であつて、

是等は成べく參詣者の便利を謀る爲に、設けられたのである、然るに人慾のあさましさは、名を便利といふに借りて其實は、不義の金まうけをするが主旨となつた、そこで、賣る當人も、生活の爲に之をなし、又許可して居る祭司等も、これにて自分分等の懐が肥えるものであるから、主意のよいことを名目にして、不義の利益を貪つて居たのである、彼等が、眞に參詣者の便益を思ふならば、成べく安値に賣らねばならぬに、實は鴿一疋もナカク口錢を取つたものである、又口錢も神殿の爲に使ふといふならば宜しいが、さうでなくして、祭司始め、賣買者等が、皆自分の身を肥やすことゝなつて居た、斯いふことは、ちやうど我國の有名なる神社佛閣などにも行はれて居る、たとへば神戸の楠公社、大阪の天満天神社、東京の淺草觀音などへ往つて見ると、實に俗氣紛々として、神聖なる感は少しも起らない、神佛を方便に使つて、實は利慾の爲に、汲々として居る有様が見える、これは又、時々基督教會にも見らるゝことであつて利慾の爲に俗化せられつゝも、黙つて居る牧師や信者もないではない、神の爲といふ美名の下に、随分如何しき事も行はれないではない、イエスは聖の聖たる此神殿が、斯く迄に俗臭と貪慾に充ちたるを見給ふ時

もう耐え難い感をせられ、過激ではあるが、此機を外づしては再び清浄にすることが出来ないかと考へられ、思ひ切つて、此活劇を演ぜられたのである、又十六節の記事は、本傳だけに記さるゝものである、全體、販賣者の出て居る處は、神殿中「異邦人の庭」と稱する處で随分雑沓して居るから、誰も此處を神聖なる場所とは考へない、そこで桶に水を入れたのを擔いで來たり、又いろ／＼の道具を運搬したりして、恰も普通の往來道の如くに心得て居るから、イエスは其無禮を責むる爲に、さういふ物品を、持ち運びする者の往來を、盡く禁止せられたのである、さうして、

(十七) 又彼等に諭て曰けるは、我室は萬國の人の、祈禱の室と稱らるべしと録されたるに非ずや、然るに爾曹は、之を盜賊の巢となせり、

イエスは、以賽亞書第五十六章七節の語を引き、全體、こゝは萬國の人々が參詣して、靜に祈禱をなし、靈の賜を得る場所ではないか、然るを爾曹は、自己の腹を肥さん爲め盜賊の巢窟にして居ると痛罵せられた、居合したる販賣者は勿論、學者祭司までも、此手痛い攻撃には、何とも言ひやうがなかつたと見える、彼等は自己の良心に耻ぢて、イエスの此語に反抗する勇氣はなかつた、然し盜賊とまで罵られた

彼等の憤怒は制し難いものがあつたと見えて、

(十八) 學者と祭司の長、これを聞て、如何してかイエスを殺さんと謀りしが、彼を懼れたり、蓋人々皆其教に駭きたれば也、

學者や祭司の長等は、慚愧と憤怒の結果どうか彼を亡きものにせんと思案したが然し容易に手を出し兼ねた、何故ならば、イエスの語るゝ處、爲らるゝ處は、堂々として少しも後暗い處がないのみか、折柄神殿に集り來つた大衆は、皆イエスの此威風に打たれて、一層尊敬の念を熱せしめたと思ふ、それ故、もし迂濶なことをやれば、如何いふ變動を引起すかも知れないといふ懼があつたから、空しく手を拱して、何事もなし得なかつたのである、さてイエスは此活劇を致された後、夜になつたから、祭司等が暗中如何いふ危害を加ふるかも知れないと思ひ、又自分等は、まだ彼等の手にかゝるべき時でないと思はれたので、

(十九) 日くれて、イエス都邑を出で行けり、

これは大方、例のベタニヤへ退去せられたものであらう、さてこゝに「日くれて」といふ句について二説ある、一は「毎も日暮になると」といふ意、これであると、必ず神殿清浄の日に限つたのではなく、此頃は毎日日暮になるとエルサレムを去らる

ゝとの義である、二は「此日、日暮れて」の義である、原文は何れにも解せらるゝが、私は第二の方を可と見て居る、

四、枯たる無花果樹 (火曜日) (第十一章二十節以下二十五節)

さて二十節以下二十五節は、枯たる無花果樹についての訓話である、これは前の十二節以下十四節の話と連關したもので、馬太傳第二十一章十九節以下二十二節にも掲げてある、

(二十) 翌朝彼等、無花果の樹を過る時、その根より盡く枯たるを見る、

此無花果樹の枯れ居たるは、前日イエスの呪詛で、斯くなつたものか、或は此樹は果もなきに葉のみ澤山持つて居たといふ、變手古な樹であつたが爲に、何か知れぬ特別の原因で枯れたものか、其邊は解らない、私は寧ろ後の方を取るを可とするものである、何となれば、イエスが僅か自分の望んで居た果が得られなかつたとして、其樹を呪ひ殺すやうな、残忍なる仕方は、其品性上あり得べきことではない、イエスは人間は勿論禽獸草木にまでも、慈愛の心を有つて居られた、然るに斯る一小事

の爲に、此樹を特更に枯死せしめ給ふたとすれば、どうも其意を了解せられなくなる、前にも言へる如く、イエスの憤慨は、無花果樹其ものにあつたのではなく、當時のユダヤ人が、恰も樹の葉あつて果のなきやうな有様であることを連想せられ「永久も爾の果を食ふ人あらざれ」と申されたので、表面は此樹に對しての呪詛であるが、其精神は、ユダヤ人に對する憤慨であつた、こゝに私は諸君と共に知つて置きたい一事は、世の中に、一種の不可思議な感應のあるといふ事柄である、ある人が、非常に心の悪い一富者に向つて、「御前のやうな者は、決して平和に、此世を終れない、三年の中に、御前は非期の死を遂ぐるに相違ない」といふた、不思議なことに、其富人は、三年目に、流行病にかゝつて死んだのである、然し其人は、何も其富人を呪ひ殺すつもりではなかつた、たゞ信じて斷言したことが、妙に符合したのである、又私はある時、一友人の子供が大患にかゝり、醫者も見捨て仕舞ひ、両親も見放して、もう駄目だと言つたのを私だけは如何しても此兒が死ぬとは信せられない、皆の人々は、寢込んでしまつた其時、小兒の呼吸はなく、體温もやゝ冷えかゝつて居たのを、私は活くべしといふ祈禱と信仰を以て、終夜口中に水薬を注いでやつた、

所が不思議にも、其小兒は呼吸を吹きかへして、復活した、兩親始め醫者も、これは奇跡だと驚嘆したことがある、然しこれは、私の力が、彼を復活させたのではない、私の信仰の不思議なる感應が不思議なる力を起して、小兒を復活させたのであらう、其時から私は自分の信仰と、天地の間には不思議なる感應が存することを信するやうになつた、此信仰に經驗のない人が、所謂道理上の信者で、此不思議を了悟したものが、基督信者であると思ふ、私は、此點から見ても、イエスの言と、無花果樹枯死の關係を、明に解釋することが出来る、イエスは、何も無花果樹を呪ひ殺されたのではない、然しイエスの痛切なる預言は、不思議にも、天地の靈に感應して、翌日其樹が枯死して居た、此意からいへば獨り此樹のみならず、イエスがユダヤ人に對する痛酷なる預言も、又不思議の感應によつて、其通りに成就した、私は此意を了知した時始めて、この教訓が解せらるゝやうに思つたのである、

(廿一) ペテロ(は昨日の主の言を)憶ひ出でて、イエスに曰けるは、ラビ見よ(爾が)祖し所の無花果樹は枯れたり、

ペテロは信仰といふ方面から見ず、たゞイエスの憤怒の結果、此無花果樹が枯れたものと思つて、少しく恐怖の様子で、此問を發したのである、其時

(廿二) イエス答て、彼等に曰けるは、神を信せよ、

(廿三) 誠に我爾曹に告げん、誰にても其心に疑ふことなく、其いふ所の言は必ず成べしと信じ、此山に移つて海に入らば、其言の如く(に)成べし、

(廿四) 是故に我爾曹に告ん、凡そ祈禱の時、其求ふ所のものは、必ず得べしと信せば必ず得べし

是等のイエスの訓言は、私が前段に言つた精神を以て見れば、よく解ると思ふ、全體世に普通人の怪しと見、不思議と見る事柄の行はるゝは天地に神が在ますからである、神の力と、其感應を信すれば、世に何等の不思議も奇怪もない、故にイエスは、まづ「神を信せよ」と仰せられた、然しイエスの信仰とは、たゞ神が在るの、神は全能者であるの、天父であるといふ口移しや、理屈計りの信仰では駄目だ、宇宙に全能の天父の在し給ふものならば、自分等の信する所は、不思議なる感應によつて、確に成就するものであるといふ、此信念が所謂「心に疑ふことなく」といふ信仰である、然し我々は、ナカ／＼此「疑ふ事なく」といふ信仰に達せられない、又「疑ふ事なく」といふ信仰があつた處が、それが盡く遂げられるものではない、假令ば會堂を建築しやうとするに、是非參千圓の金子が要る、祈禱會などを開いて、

どうか一日も早く、此金額を興へ給へ一日も早く會堂の新築を成させ給へど、異口同音に祈る、然し其祈る人々の心中を叩いて見ると、甚だ怪しいもので、或人は「此不景氣の世の中に、大枚參千圓といふ大金が、どうして集るものか、自分も、もし金まうけをしたならば、百圓位も出せやうが今の處では、拾圓も六ヶ敷い、自分さへさうだもの、見渡す連中の顔では、まづ拾圓以上出せるものは無からう」と、斯いふ連中がいくら寄つて祈禱會をして見ても千圓の金も寄る筈はない、何故ならば彼等の肚の中には、雲がある、疑がある、「其言ふ所は必ず成るべし」との信仰がない、さういふ人々の祈禱や信仰には、不思議なる、感應のないのは當然の事である、さてイエスは、こゝに信仰の力を説いてだん／＼と奥深く話される、爾曹は無花果樹の枯るゝことを怪むが、信仰あれば無花果樹の枯死の如きは何でもない、信仰あらば、此山(即ち此橄欖山)も動く、否此山のみならず、何事にも成就せぬことはない、これは實に大膽なる言である、大膽ではあるが、信仰の眞髓は、蓋しこゝにあると思ふ、かういふ處は、たと理屈一片の解釋や、知識のみで了解しやうとしては、夢にも悟れない、「得べしと信せば必ず得べし」これも奥義である、此語に

對して、何でも得べしと信せば、得らるゝかといふ反問も起らうが、イエスの此語意を明にせない誤解する、私等には、疑はず得べしと信せらるゝ事がある、又如何しても、さうは思はれぬこともある、私は明日から總理大臣になれると信じやうとしても、さうは信せられない、それは無法の信仰である、イエスは左様の事を言はれたのではない、處が我々信者の經驗上斯事は如何しても成就すると確信せらるゝ、自分一己の力では、到底駄目であるが、神に祈り力を賜はるならば、必ず成るといふ感が起る、此時は自分も一生懸命でやるだけの事をやり、其上神の力が加はれば、成就すると信じてかゝる、斯いふ場合の信仰と、盲滅法の迷信との間には、大なる差別がある、即ち前の方を大膽なる信仰といひ得べくば、後の方は無茶信仰である、大膽なる信仰は、何處までも發揮して往きたい、信することは必ずなし得らるゝ、然し無茶信仰は、却つて滑稽に終り失敗に終つてしまふ兎に角イエスがこゝに説かれたる信仰の精神は、我々の深く玩味すべきことである、又イエスの考へでは、信するといひ、祈るといふ時幾分にも、曇れる心があつては、無益である、信する者の心は、常に晴天白日の如くであらねばならぬ、もし

幾分でも、故障があるご真面目な信仰は保たれない、従つて真面目な祈禱も出来ない、斯いふ立場から次節の訓戒を垂れ給ふたものと思ふ、

(廿五) 又爾曹立て祈禱する時、もし人を憐むごあらば、之を免せ、蓋天に在す爾曹の父に爾曹も亦その過を免されん爲なり
(廿六) もし爾曹免さずば、天に在す爾曹の父も亦爾曹を免し給はじ、

此兩節は、少し文字は違ふが、馬太傳第六章の主の祈禱の後にも見えて居る、イエスは此段にては、主として信仰の事につき話して居らるゝのであるから、此兩節の如きは、連絡が一寸奇妙である、これ或は断片の語句がこゝに入つたものではあるまいかとも思はれるが、然し前二十四節に、祈禱の事を話され、これが信仰と密接の關係を有して居るから、此兩節も、前段の話とは全く無關係と見るべきではない、イエスは祈禱する者の精神は、一點やましいものがあつてはならぬ、人を恨むことは勿論、人に恨まれて居ることさへ、宜しくないこと、馬太傳の方では教へられて居る位である、

こゝに「爾曹立つて」とあるは、當時のユダヤ人は、立つて祈るものが多かつたのである。(母上一〇二十六、路十八〇十一を参照) 然しある特別なる場合には、跪

くこともあり(王上八〇五十四を見よ) 又全く俯伏して祈ることもあつた、(王上十八〇四十二参照) 此兩節の意義は、明亮であるから、別に説明する必要はないと思ふ、

五、イエスの權能につきての問答 (第十一章二十七節以下三十三節)

イエスは、メシヤたるの權能を以て、神殿を淨め給ふた、然し此一事が、端なく導火線となつて、兼てより反對の地位に立てる學者と、公然花々しい對論を始むることゝなつた、イエスは始終凜乎たる勇氣と、堂々たる風彩をもて、數回の論戰に、彼等を屈服せしめ、又自己の所見をも吐露し給ふたのである、二十七節以下三十三節は、其論戰の發端ともいふべき條であつて、彼等がイエスの權能につき質問せる時、イエスは巧に彼等に反問し給ひ、以て彼等の口を噤ましめ給ふたのである、これは馬太傳第二十一章二十三節以下二十七節、及び路加傳第二十章一節以下八節にも掲げてある。

(廿七) 彼等またエルサレムに至り、イエス殿を行ける時、祭司の長、學者及び長老等來りて、

(廿八) 彼に曰けるは、何の權能をもて、此事を行や、誰が此事を行べき爲に、爾に此權能を與へしや、

イエスが、前日神殿を清淨し給ふた事については、何等言ひ争ふの餘地がない、
げにイエスの言はれた通り、其頃の神殿は、實際盜賊の巢の如くたゞ私慾を逞ふす
る場所になつて居たから、イエスがこれを淨め給へることについては、さすが祭司
學者等も、自己の良心にどがめて、何とも言ひ出し得なかつた、然し無職の平信徒、
大工の子息たるイエスが、斯の如きことをなすに、自分等は何にも言ふことが出来
ず、黙つて居るのは、如何にも残念と思つたのだから、彼等は協議の上、イエスが
神殿清淨の一事は、至當なりとするも、然しイエス自らが、それに手を下したのは、
無禮である、それを爲すには、職掌として祭司長老といふものが控へて居る、然る
に、イエスは、彼等にも謀らず、獨斷にて、斯の如きことを敢てせしは、所謂ユダ
ヤ古來の舊慣を擾亂するもので、結局不法の徒と見なさねばならぬ、と斯いふ立場
からイエスを詰責して處分しやうとかがつたのである、然し彼等も無法にイエスを
縛することは出来ないから、まづ穩當に出で、イエスは何の權威をもて、斯ること
を爲したかを問ひたゞし、其返答如何によつては、猶豫なく引捕へる考であつた、
こゝに祭司長、學者、長老と書き現はしてあるのは、當時のサンヒドリム(ユダヤの

宗教議會)の三階級を代表したもので、思ふに彼等は此議會を代表して、質問に來た
ものと思はれる、其時、

(廿九) イエス答て彼等に曰けるは、我も一言爾曹に問ん、我に答よ、然ば我爾曹に何の權威を以て、之を行さいふ事を告ぐべし、

(三十) (即ち)ヨハネのバプテスマは天よりか、人よりか、我に答へよ、

イエスは彼等の心中をよく看破せられた、故に答辯するよりも、此方から、一の
反問を提起して、彼等を窮境に陥らしめ、自ら辯する能はざる處に、答を與へやう
とせられた、元來彼等はイエスが其職掌にもあらざる一匹夫の身を以て、斯ること
をなすは、宗教の法規を亂るもの、随つて不法の徒だとして責めやうとした、そ
こでイエスはそれに答へて、然らばかのバプテスマのヨハネは如何、彼も我と同じ
く、何の職權もない一匹夫ではないか、決して爾曹の如く、祭司や學者の班に居る
ものではなかつた、然るに其ヨハネは、異邦人には勿論、これまで其必要を見定め
て居なかつた、ユダヤ人にまでも、バプテスマを施すの必要を説き、誰彼なしに、
悔改めの洗禮を授けたことは、誰も知る處である、而して彼がヨルダン川に現はれ
た當時、爾曹の中にも、其バプテスマを受けに往つたものがあつたではないか、さ

て問ふべきは、爾曹は、彼のヨハネのバプテスマを以て、神の命令の下に出でたものとするか、或はヨハネ一己の勝手に、斯ることを爲したものと思ふか、まづこれに就て爾曹の意見を聞かせよと詰問せられた、これは又意外の反問であつた、成程考へて見れば、イエスもヨハネも、皆無位無階の人である、又イエスの爲す處も、ヨハネの爲す處も、其筋途からいへば同一の事柄である、もしイエスもヨハネも預言者ならば、これ取も直さず神より命せられ來た人であるから、普通のユダヤ人が、何にも小言を言ふことは出来ない、それ故、

(三二) 彼等互に論じ曰けるは、もし天よりさ、いへば然らば何故彼を信ぜざるかと曰はん、

(三三) もし人よりさ云はゞ、彼等民を懼たる也、そは民みなヨハネを預言者と爲せしによる、

どうも此返答には彼等も困つた、もしヨハネが、天より來れる預言者であると答ふれば、然らば爾曹は何故、ヨハネの言ふ處を信せぬか、ヨハネは我をさして「我は其靴の紐をも解くに足らざる者なり」といつたことは、爾曹もどく承知して居る事ではないか、(約一〇二十九)もしヨハネを預言者と許す以上は、イエスを、メシヤと信せざるを得なくなる、然らばヨハネを預言者でないと斷言しやうか、これも

困難である、何故ならば、當時の人民は、皆ヨハネを信じて居たから、彼等のみが、今こゝで、公然ヨハネを預言者でないこと否認すると、自分等は人民の意志に反することゝなつて、人望を失ひ、如何いふ攻撃をうくるかも知れない、此懼があるから彼等は答に窮して、

(卅二) 遂に答て知らずといふ、イエス答て曰けるは(然らば)我も何の權威をもて、之を行か爾曹に語らじ、

此時の學者等の失態は笑止千萬であつた、彼等はヨハネの如き赫々たる聖者、當時の人民の信用せる預言者をも「解らぬ」と答へねばならぬことになつた、思ふに此時イエスは餘りの笑止さに思はず、微笑を湛へ給ふたであらう、而して「然らば我も何の權威をもて、之を爲か爾曹には語らじ」此意は、爾曹のやうに解つて居りながら、何にも解らないふりをする者に向つて自分が何の權威で、此事をなすかを説明しても無益である、何故なれば、ヨハネのバプテスマの一事ですら、解せないといふ爾曹に、どうしてわが事業の眞意が解るものかどのことを洩らし給ふたのである、堂々たる議會の代表者が匹夫イエスの爲に、小兒の如くに翻弄せられて、グウの音も上らず、目をパチツカセながら、其處を引退いた光景は、今も見えるやう

である、

さて馬太傳にある、善惡二人の子息の譬喩は、此頃にありしものと思はる、(太廿一〇廿八―卅二)

六、悪き農夫の譬喩(第十二章一節以下十二節)

イエスは、彼等が返答に窮したるを見て、一時は實に可笑しさに吹出されたであらうが、然し又彼等の心事を考へると、實に慨嘆に堪へざる感起された、彼等は自己の煩迷と自負心よりして、ヨハネを始め、自分にまでも殊更敵視する、而して彼等は表面祭司であるの、學者、長老であるの、宗教議會の議員であるの、大きな面をして、恬として恥る色がない、これを考へると實に憤慨に堪へないのである、そこで彼等が豆鐵砲を食つた鳩のやうに、目計りバチツカせて、未だ其處を退却せぬを機として、彼等の心中に徹するやう、次の譬喩を話されたのである、第十二章一節以下十二節がそれで、此話は馬太傳第二十一章三十三節以下四十六節、路加傳第二十章九節以下十九節にも出て居る。

(一) イエス譬喩をもて、彼等に語れり、或人葡萄園をつくり、籬を環らし、酒槽をほり(塔をたて、農夫に貸して、他の國へ往きしが、

ユダヤには、葡萄園が澤山あるから、イエスはそれを譬喩に引かれたものと思はる、「籬を環らし酒槽をほり云々」とは、籬を環らして野獸などに荒らさるゝことを防ぎ、又葡萄汁をしぼる爲に、特別の場所を設け、又物見番をおいて、園内を注意せしむる意である、神が宗教上の準備をなして、これをユダヤ人に委託し給ふたことは、恰も主人が農夫に葡萄園を貸し與へたやうなものである、又「他國へ往く」とは、神がユダヤ人に、此宗教的使命を託せられて後は、直接關係をなさらない意を言つたものと思はれる、

(二) 期到りければ、(主人は)葡萄園の果を收取らん爲に、僕を農夫の許に遣しけるに、

(三) 農夫等、之を執へ、打撲きて、徒く返らしめたり、

農夫は、委託者の葡萄園を、我物顔にして横領して居つた、随つて主人の心に適ふやうな、何の果も作つて居らない、そこへ主人から、使者を遣はして、結果の調査に來たので、彼等は之を追かへしたのである、舊約時代の豫言者、例せばエリヤ、

エリシヤ、エレミヤ、イザヤ、の如き人が、ユダヤ國へ神の使者として遣はされた時、國民は悉く迫害を加へた、此譬は此等を指したものであらう、

(四) また他の僕を彼等に遣せしに、農夫等之を石にてうち、首に傷け、辱しめて返らしむ、

(五) 亦他の者を遣し、之をも殺せり、又他に多く遣し、に、或は撲ち或は殺しぬ、

農夫は初は撲つた位であつたが、後には猛惡になつて来て、使者を殺すに至つた、それも一度や二度ではなく、屢々遣したものを、盡く迫害致した、近き例でいへばバプテスマのヨハネの如きも、又其一人である、

(六) 爰に一人の愛子ありけるが、此わが子は敬ふならんぞ曰て、遂に其子を遣し、に、

(七) 農夫等互に曰けるは、こは嗣子なり、いで之を殺さん、然らば産業は我儕のものならん、

(八) 乃ち執へて之を殺し、葡萄園の外に棄たり、

「我子」とは、イエス自分を指されたものである、此譬諭の主意からしても、イエスは、自分を古代の豫言者や、又バプテスマのヨハネ等と同一視して居給はざる意識が、明に解せられる、彼は自分は、確に神の獨子であるとの自覺を有つて居られた、又其一子を殺して「葡萄園の外に棄たり」との一句は、イエスがエルサレム城

外にて、然も 로마人の手に、十字架にかゝつて死し給ふ豫言に當つて居る、イエスは果して其意を譬へられたものか否やは解らないが、兎に角、自分は國民の爲に殺害せらるゝとの意識は、明に有して居られたのである、

(九) 然らば、葡萄園の主人は、何を爲すべきか、彼來りて農夫等を打滅し、葡萄園を他の人に與ふべし、

これはイエスを殘殺するの結果、神の國は、ユダヤ人の手を離れて、異邦人の手に移る意を述べられたものであらう、馬太傳を見るとイエスの此問に對する答は、祭司學者の口から出たやうに記されてある、イエスは、斯く自己の運命を譬諭をもて説明したる後、特別に聖書の一句を引用して、此話を結ばれた、されば自分の所説の誤謬なきことを、彼等の武器をもて證據立てられたのである、即ち、

(十) 工匠の棄たる石は、屋の隅の首石となれり、

(十一) これ主の成し給へる事にして我儕の目に奇きする所なりと録されしを、未だ讀まざるか、

これは詩篇百十八篇二十二、三節の句である、「屋の隅の首石」とは、家屋を建つる基礎石中最も大切なる石である、此意はメシヤは、たとひ其工匠たるユダヤ人に棄てらるゝも、然し之が爲に、却つて神の眞の殿の隅の首石となるぞとの義を、表白

されたものである、斯る手痛き諷刺をうけたる祭司等は、何とて之を聞流しにすることが出来やう、

(十二) 彼等此譬は、己等を指して語れりさ知り、イエスを執らせしかども、衆人を懼れてイエスを去りけり、

彼等は、イエスにやりこめられ、又自分等の罪惡を指摘せられたので、切齒扼腕に堪へなかつたのであるが、然し如何せん、例の國民を懼るゝの卑怯心から、公然イエスに手出しも得せず、オメ／＼其まゝ退出したのである、馬太傳を見ると、此時イエスは、尙他に二の譬喩を語られた、即ち馬太、路加兩傳にある婚筵の譬喩は此間に話されたものと思はれる、(太廿二〇一—十四、路十四〇一—五—廿四)

七、パリサイ人とヘロデ黨の質問 (水曜日)

(第十二章十三節以下十七節)

サンヒドリムを代表して往つた彼等が、劈頭第一に、失敗して歸つたので無念やる方なき彼等は、直に新しく人を選んで、新しき難問を持ちかけ、イエスを陥れんと謀つた、十三節以下十七節の記事がそれである、此條は、カイザルへの納税問題

であつて、以前とは違つて事は國體に關して居る、これは馬太傳第二十二章十五節以下二十二節、路加傳第二十章十九節以下二十六節にも記されてある、私は此處を讀む毎に、我國の頑迷者流が、時々國體論を擔ぎ出して、基督教徒を困らせやうとする甚だよく似て居ると思ふ、人情は今も古も違はないものだと思ふのである、古昔のパリサイ、サドカイ人、今日の國粹保存家の一派、其思想からやり方までが餘程よく似て居る處があるのが面白い、

(十三) 彼等イエスを、其言に由て陥れんとして、パリサイの人とヘロデの黨の中より、數人を遣せり、

ヘロデ黨とは、當時のロマの主權を是認する政治上の一派である、然るにパリサイ派は、絶対にロマの主權を非認する黨であるから、言はば、此兩派は反目黨なのである、然るに奇妙にもイエスを陥れんが爲に、此兩派が袖を連ね、聯合してやつて來た、これは大に注目すべき點であると思ふ、何故かといふに、今回の難問にて、イエスが其何れかの一を是認するも、必ず其處に來て居る一派の反感を買ふこととなる、イエスの返答がどちらであつても、其身の利益を來たすに相違ない、されば平素は犬猿鬮ならざる兩派の代表者を一所に遣したといふは、議員の中、餘

程の策士があつて、斯る苦肉の計略を立てたものと思はれる、

(十四) 遣はされし者等、イエスの所に來り曰けるは師よ、爾は、眞なる者なり、又誰にも偏らざる事を我儕は知る、そは貌によりて人を取らず誠を以て神の道を教れば也(されば)眞をカイザルに納るは宜や否、我儕納めざるべきか、

彼等は外形上、謙遜らしい、ナカ／＼旨い御世辭を使つて、イエスの口を滑べらせやうとかつた、然し彼等の衷心には、イエスは公平無私な方であるとは認致して居た者に見える、人間はいろ／＼虚偽を云ふが、然し折々には、良心の指示する所を、其まゝ吐くことがある、こゝも其一例で、イエスが「貌によつて人を取らず」即ち外貌の立派不立派で、其の人の精神を判断し給はざるは事實である、「カイザル」とは、ロマ皇帝の義で現今も獨逸皇帝の事をカイザルといふことは讀者の承知せらるゝ通りである、

さて、こゝに彼等が提出した問題は、其實一個の大問題であつた、といふ理由は、此頃ユダヤ國は、ロマの支配の下にあるから、毎年皇帝へ租税を納めねばならぬ、これはロマ國からいへば、臣民として爲すべき義務であるが、然しユダヤ人は、元來衷心からロマの屬國になつてゐるのではない、實力の足らない結果、止むなく

屈從してゐるのである、ここにユダヤ人は、神の撰民なりといふ自負心が其念頭を去らない、其むかし、一度シリヤ國の屈從をうけた時、ユダマカビなる一豪傑出で、シリヤ人を逐ひ出し、國の獨立を完ふした例もある、されば今、ロマの臣隸になつて居る事は、エホバに對して濟まないのみならず、ユダヤ國本來の精神に悖つて居る、それ故ユダヤ人から見れば、ロマに反抗するが、眞正の愛國家であるか考へる者が多かつた、然るに當時のヘロデ黨は、ユダヤが最早斯くなる以上は、温順しくロマに服従するが、國民の務であるとは主張し、パリサイ派は、何處までもロマに敵するが本意であるとは唱へてゐた、そこで此解決を、イエスに持來つたのである、もし此時イエスが、ロマへ租税を納めよと言へば、パリサイ人等は、イエスを賣國奴である、神の罪人であると呼ぶのであらう、もし又租税を出さな答ふれば、ヘロデ黨は、彼を謀反者なりと呼ぶのであらう、何れにしても、イエスには甚だ不利な問題である、其時、

(十五) イエス其實ならざることを知りて、彼等に曰けるは、何ぞ我を試るや、テナリを持來りて我に見せよ、

(十六) 彼等持來りければ、イエス彼等に曰けるは、此像と號は誰か、答へてカイザルなりといふ、

(十七) イエス曰けるは、(さらば)カイザルの物はカイザルに歸し、又神の物は神に歸すべし、彼等之れを奇とせり、

彼等が此問題をイエスの許に持來つたのも、衷心から國家を思ふ處存より來たつたのではなく、たゞ此問題を據として、イエスを陥るゝ爲の材料にしやうとしたのである、イエスは其の事を知つて居られたから、まづ彼等の心を看破して、「何ぞ我を試るや」の一喝を加へ、次にデナリを持來れど仰せられた、デナリとは當時の通貨(我國の貳拾五錢乃至參拾錢に相當する銀貨)である、此貨幣の表面には、羅馬皇帝の像と其名が刻つてある、そこでイエスは、之を指して、此像を見よ、爾曹口では種々なことを言ふが、今日流通してゐるデナリを、皆喜んで用ゐてゐるではないか、バリサイ人等は、此カイザルの像が氣に入らぬからとて、此デナリを棄てゝあるが、ユダヤの國今日外面の生活は、此デナリの御影ではないか、さるにもかゝらば、爾曹は此デナリとデナリの主に背いても、尙よく此國を維持するの方策ありと思ふか、兎に角此デナリの流布せる間は、デナリの主に感謝せねばならず、又相當の義務を盡すは、當然の事である、即ち「カイザルのものは、カイザルに歸さねばならぬ、」然しユダヤ人の精神は、此デナリによりて支配せられて居らぬ、ユダ

ヤ人の靈魂はエホバのものである、我々の國は羅馬の從屬であつても、我々の精神はエホバのもの、アブラハムの信仰を維持してゐるのである、國土が羅馬に屬してゐるからとて、精神信仰までも、羅馬に服する筈はない、即ち「神のものは神に歸すべし」である、爾曹はこれ程の事が解らぬかと説破せられたのである、彼等は此言を聞いて、其返答の奇警にして、然も眞理なるには、殆ど舌をまいて引下つたであらう、

八、サドカイ人の質問 (第十二章十八節以下二十七節)

イエスの此奇抜なる返答は、其時の人々に大なる影響を與へたと見ゆ、平生は自ら學者ぶつて、他人を蔑視し、容易に物を問ふが如きことをせないサドカイ人までが、イエスの許にやつて來て、一大疑問を發するに至つた、十八節以下廿七節までがそれである、これは馬太傳第二十二章第二十三節以下三十三節、路加傳第二十章二十七節以下四十節にも掲げてある、

(十八) 復生なしと曰ひなせるサドカイの人、來りてイエスに問ひけるは、

傳説によれば、サドカイ人はザトクと云ふ學者から出た一派であつて、パリサイ派等の狂熱に反抗して、寧ろ冷靜なる哲學的態度から、宗教を觀察することを主としたものである、それ故彼等の中には、學者もあり、又祭司長やサンヒドリの議員も多くあつて、ナカ／＼當時のユダヤ社會には、勢力を占めてゐたのである、彼等は如何いふものか、當時の一般思想であつた甦生を信じない、又モーゼの五書の外、他の舊約書に餘り重きを置かない、彼等の考へでは、人間の靈魂が若し未來に甦生するものならば、甚だ不都合の事柄が生じて来る、即ちこゝに提出したる夫婦關係の如きが、其一である、然るにイエスは、矢張り靈魂の甦生を信じ、永生の教を説かれたから、彼等は此難問を持ち掛けて、イエスの見識をためさうとしたのである、即ち

(十九) 師よ我儕にモーセが書き遺るには、人の兄弟も子なくして、妻を留し死なば、その兄弟の妻を娶りて、兄弟の裔を立てしむべしと、

これは申命記第二十五章五節の趣旨を探つて述べたもので、我國に於ても、往々これと同じ思想から、嫂を弟に娶す場合がある、これはツマリ其家系の繼續を大切

に思ふ所より出たものであるが、サドカイ人は、まづ斯る婚姻が律法上に許され居ることを引照し、さて、

(二十) こゝに七人の兄弟ありしが、長子妻を娶り子なくして死し、

(廿一) 第二の者之を娶り、又子なくして死し、

(廿二) 第三もまた然らず、(かくて)七人みな之を娶りたれど、子なく、終には此婦も死し、

(廿三) 復生の時、彼等甦らば、此婦は誰の妻となるべきか、蓋七人同じく之を娶りたれば也、

此問は一の假設問題に過ぎない、然し斯る事柄が實際なしとも限らない、必ず七人ではなく、兄弟二人あつたにしても、道理は同じ事である、こゝに七人としたるは、一夫多妻の感を強く有たしむる爲に、ユダヤの満數を擧げたので、此世に於る一夫一婦主義も、天國にては一夫多妻と云ふ妙なことになるではないかとの疑問が此問の要點である、其時

(廿四) イエス答へて、彼等に曰けるは、爾曹は聖書をも、神の能をも知らざるに因て誤れるならずや、

(廿五) それ死より甦る時は、娶す、嫁がす、天にある使者等の如し、

イエスが、當時の學者を以て自任せるサドカイ人に向つて「爾曹は聖書をも、神の

能をも知らず」と斷言せられたは、如何にも大膽不敵なる返答である、然し彼等の間には、當時斯る問題について、頭を悩ましてゐたことは事實あつたから、ツマリ彼等には、聖書の眞精神を洞察するの智識淺く、又神の能力に對する、眞正の意義を解して居らなかつたといつて差支ない、イエスは、斯く斷せられてそれより、まづ神の能力につき説明さるゝのである、即ち神はたゞ人間を甦らすといふのみならず其肉体をも化して、もはや此世に行はるゝが如き、婚姻は不必要となり、清淨なる靈體をもて相親むに至らせ給ふ、然るにサドカイ人は、こゝに氣附かざるが故に、矢張り此世の如き夫婦關係を有するが如くに考へ、七人の夫を持つてゐることが、甚だ不都合に感ぜらるゝのであるが、それを根據としては、甦生の事を否定すべき理由にはならぬ、甦生後の人間は、恰も天使の如きものである、神は此甦生したる肉體を變じて、清淨ならしめ給ふから、此世に於ける夫婦關係は、未來に於ては、一向要なきものであると、イエスはまづ自己の意見を陳述して次に聖書を引てそれを證明せられた、これはサドカイ人が、聖書に通じないとの言に對して、聖書の精神を示されたのである、

(廿六) 死し者の甦る事に就ては、モーゼの書、蘇中の篇に、神かれに語りて、我はアブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神なりと曰給ひしを爾曹讀まざるを、

(廿七) 神は死し者の神にあらず、生る者の神なり、爾曹大に謬れり、

モーゼの書、蘇の篇とは、出埃及記第三章六節を指したものである、さて其の中に「我はアブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神なり」と現在語句が使つてあつて「我はアブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神なり」と過去語法を用ゐて居らない、もしアブラハムも、イサクも、ヤコブも遠き昔塵に化して仕舞ひ、其靈魂は、身体と共に亡せ果てたものとすれば、神がモーゼに向つて、我は其者等の神であつたといはず、神であるといはれる理由が解らなくなる、全体神が是等祖先と、個人的關係を保つてゐるやうに書かれてゐるのは、アブラハム、イサク、ヤコブの靈魂が今も現在するからである、さなくば、神は生ける者の神とはならぬ、遠き過去に死んで仕舞つて、何にもない名計りの人間の神となることゝなる、さすれば此蘇の篇の語は實に無意味となるのみならず、不都合の語となる、されば「我はアブラハムの神、何々の神なり」と言はれた意味の中には、アブラハム以下の人々が、今も活けるこ

どを承認してゐるので、サドカイ人の言ふ如き靈魂消滅説に反對の證明を與ふることをなつて居るとの義である、

然るに近頃の一學者は、從來この説明は「なり」といふ現在辭を使ひ「なりき」どの過去辭を用ひてゐないと云ふ修辭上の議論を根據として、イエスが人間靈魂の現存を證明し給ふたものと見てゐるが、然し此議論には誤謬が混じてゐる、何故なれば「何々の神なり」と記してあつても、それは神の方からいへば、死人であつても生者であつても、兩方に關して差支なく用ゐらるゝ、其意味はバリサイ人のやうにも、又サドカイ人のやうにも、兩様に採用することが出来る、故に此修辭法よりしては、必ずしも靈魂が現存してゐなければならぬといふ證明にはならない、故にこれは、寧ろ神の性質から見るべきものであつて、神がある人の神であると言はるゝ時は、其人と言ふ語の中には、ある意味が含まれてゐる、即ち其人は義しくして罪のない者、祝せられて呪はれて居らぬ者、こゝにいふ如く生きてゐて死んで居らぬ者なりといふ意味が含まれてゐるのである、故に靈魂不滅の一事は神がある者を、自分の者なりと呼び給ふ時には、必ず此神の性質から推論するべき者である、イエス

は、それを單に義しき死者の甦生ののみならず、一般死者の甦生に應用し給ふたのである、サドカイ人の否定は物質上の見解から、甦生の出來べきことを否定したのであるが、それと共に心靈の甦生をも否定しやうとするに至つた、それに對してイエスは、實例に徴して、甦生の出來べきことを示し給ふたのであるから、イエスは甦生の事實を明にせられたのではない、既に承認されたる前提からそれを推論せられたまでの事である、即ち神と云ふ方を承認すれば、人間の甦生も必ず承認せねばならぬこととなる、然しイエスの胸中果して後の論者のやうな精神があつたか如何かは今から推定するに難い、

私は尙こゝに一個の問題を提出して、讀者の参考に供しておきたいと思ふ、それはイエスの返答によつて考へて見ると、夫婦關係はたゞ此世の肉体上に限つてゐるやうにも解せられる、従つてイエスが他の所に明言せられたる「神の合せ給へる」といふ一句も精神上までは立入らず、矢張り肉体上のみ關するものゝ如くに解せられる、「さらばもはや二にはあらず一体なり」と仰せられた教訓も、同じく肉体上の一体と見るより他はなくなる、パウロも斯いふ考を持つてゐたと見えて、夫婦一体

論を説くに關はらず、其一方が此世を逝れば夫婦關係は解かれたものと見てゐる、(羅馬書第七章二、三節參照) 然し夫婦一体といふ教義は、たゞ肉体上のみと解して少くも精神上に及ばさないものであらうか、もし夫婦一体といふ事がたゞ肉體に關係するのみであれば、こゝにある七人の夫の話も容易に解せられる、即ち夫婦とはたゞ此世の身体上のみ關係であつて、精神まで一になるといふわけでないから、未來甦生の際には、今生の夫婦も一般他人の交際と異ならない、故にたとひ此世に於て幾人に結婚した處が、夫婦一体の教義には何にも影響せない、然し夫婦一体といふ事をさういふ風に見るのが果して義しいのであらうか、我國にて舊來夫婦は二世までといつて、たゞ現世のみならず、來世までも夫婦たるの羈絆を脱せないと信じられてゐた、そこである婦人の如きは夫の亡なつた後にも兩夫に見えずとして、亡夫に對して貞節を守るは未來までも夫婦の關係は變らないものであると信じてゐるからであらう、この考は此教の上からはさう見なくても差支ないものであらうか、然るにもしイエスが「言はれた夫婦一体」この語が、たゞ此世の肉体の關係に止まらず、精神上にも及ぼすものとすれば、此世に於て一婦が數夫に見えたり、又一夫が數妻

を娶ふことは出来ないこととなる、勿論同時に一夫多妻は不道徳であることは誰も見とめるが、然し先妻死して後妻を迎へ、第二妻死して第三妻を迎ふるといふこと、又婦人もこゝの例話にあるやうに、順次七人の夫に見えたとしたならば、精神上よりいへば夫婦の一體主義を破壊してゐるものではあるまいか、「二にはあらず一体なり」どの精神的一致は、七人の夫に盡く完ふせらるべきではない、此婦人は甦生の日には誰と「精神的一體」の實を擧ぐべきかとの問題になると、イエスの此時の御答計りではまだ解決が附いて居らぬ、然し私は此後基督教道徳の爲に、一層此關係を明にする必要があると思ふ、ことに夫婦の道を重んじてゐる斯教に取つては此點に對しては最も慎重に嚴肅に研究して、明なる見地を取る必要があると思ふ、尤も此段に於けるサドカイ人の謬見だけは、イエスの此返答にて、十分明にせられ得たことは言ふまでもない、

九、最大誠律の質問 (第十二章廿八節以下三十四節)

サドカイ人が、三たびやりこめられたから、其處に傍聽してゐた一人の學者が、

堪らなくなつたと見えて、また新しい問題を提げて、イエスに向つた、即ち二十八節以下三十四節がそれで、これは馬太傳二十二章三十四以下四十節にも載せてある。

(廿八) 學者の一人、彼等の議論を聞いて、イエスの善く之に應じたを知り、來り彼に問ひけるは、諸の戒の中に、何れ(が)首なる乎、當時の學者等は、諸誠の中、何れの誠が大にして何れが小なるかとの議論を、隨分熱心にやつたものと見える、ある學者は、安息日を守るが、最も大なる誠だといひ、他の者は、割禮が大切だなどと、徒に律法の末に走つた議論を仕合つて居た、今日の基督信者中にも、斯いふことで論じ合つて居るものがある、或人は土曜日(を)聖日にせねば救はれないとか、水を頭に注いだだけでは、眞の信者になれないとか、信仰療治を信せねば、信者の資格がないとか、些細の末節のみに走り、それを以て他を排斥する事も往々見うけられる、此時の學者も、イエスは、果してどの誠を最も重しとし、どの儀式を最も大なる者と答ふるかと、實は試験をする考で此問をかけたのである、馬太傳には「イエスを試みんが爲に」と明記されてある、其時

(廿九) イエス彼に答へけるは、諸戒の首は、イスラエルよ聽け、主なる我儕の神は、即ち一の主なり、イエスは、誠の個條の、せれに大小があるとは答られずして、其根本精神に立入

つて、話された、即ち其拜し方について、或は其禮拜の式については、各自に異なる處はあらうとも、然し拜すべき神は一である、其儀式や方法の相違はあつても、眞に其神を拜する精神が一なれば、他は論すべき程ではない、こゝに「イスラエルよ聽け」の語を吐かれたのは、ユダヤ人等が、區々たる儀文の末のみに走つて、其根本精神を忘却して居る事を警告せられた一句である即ち其根本精神とは、

(三十) 爾心を盡し、精神を盡し、意を盡し、力を盡し、主なる爾の神を愛すべし、これ戒の首なり、

これは申命記第六章五節の引用句である、この語は、十誠の第一誠に相當すると同時に、其他の九誠も、此精神から完ふせらるゝものであることが解る、こゝに「心」とあるは理智を指し、「精神」とあるは感情を指し、「意」とあるは意志を指し、「力」とは恐らく道徳力を意味したものであらう、即ち智情意の全体と、人格を傾注して、神を愛せよとの義である、こゝに「神を敬すべし」と言はず「神を愛すべし」と言はれた語に注意せねばならぬ、此神を愛するといふ精神が、凡て十誠の基となるのである、此愛神の念なくば、如何に儀式的に十誠を守つて居た處が、眞に十誠を完ふした者とは言はれない、此愛の精神は、神に對するのみならず、人に對しても、

又同様であるから、

(卅一) 第二も亦之に同じ、己の如く爾の隣を愛すべし、是より大なる戒なし、

と断せられた、これは利未記第十九章十八節の語であるが、實に適切の句である、十誠の中第五以下人に對する誡律は、此語の精神によりて完ふせらるゝものである、されば十誠の根本は、此二個の誡より出づるものであつて、これより大なる誡はない事となる、イエスが舊約書に對する活眼は、此一點よりしても明白で、決して當時の尋常一様の學究即ちパリサイ、サドカイ人等の觀察とば、趣を異にして居る、私はこゝに於て、イエスが如何に聖書に精通せられしかと共に、又如何によくこれを活讀して居られたかを窺ふことが出来る、嶄新にして、且一點の申分のない此返答には、さすがの學者等も、思はずアツト感嘆致し平常は憎い敵手と見て居たに關らず、此時計りは、稱讚の語を與へざるを得なかつた、それ故、

(卅二) 學者イエスに曰ひけるは、善哉師よ、爾神は即ち一にして、他に神なしと曰ひしは誠なり、

(卅三) 又心を盡し、智慧を盡し、精神を盡し、力を盡して之を愛し、又己の如く隣を愛するは諸の燔祭と禮物よりも愈る也、

此學者も、心中には矢張り儀式や習慣よりも、愛の精神が、一層必要なることを

見どめて居たから、今イエスの返答に對して、思はず同意の精神を表白致したのである、これは彼が非常にイエスの答に動された證據である、其時

(卅四) イエス彼が道理を知る答を見て、之に曰けるは、爾神の國より遠からず、此後敢てイエスに問ふ者なかりき、

イエスは、此學者が當時多數の輩の頑迷なるに代へて、精神上の光明を認むるの識を有して居るのを見て、少からず満足に思はれ、「爾神の國より遠からず」と仰せられた、然し彼はまだ神の國に入つては居らない、神の國に近づいて居るが、然し神の國の人ではない、人々の中には、宗教の眞理を聞いて、一時成程と感服しても、斷じて其中に入ることの出来ないものが幾許もある、否我々宗教家と自稱する者の中にも、こゝにある學者のやうな立場に居る者が少くない、我々は「神の國より遠からず」位では可けない、さてイエスは數回の辯論に、一々敵手の問題を説破し給ふたので、さすがの反對黨も、遂に仕方なく其口を噤まねばならぬやうになり、此後誰も質問を出すものがなくなつた、

十、イエスの反問 (第十二章卅五節以下卅七節)

斯の如く、前數回に於て、サドカイ、パリサイ人等の學者が、種々なる難問を持ちかけて、試みたのを、イエスは盡く説破して、もはや彼等の口を塞ぐ程に至らしめ給ふた、彼等の中、もはや問ふ者なきに至つた時、今度は此方から切つて出て、却つて彼等に反問をかけて、其心を開かんとせられた、即ち三十五節以下三十七節は其記事であるこれは馬太傳第二十二章四十一節以下四十六節、路加傳第二十章四十一節以下四十四節にも掲げられてある、

(卅五) イエス殿に在て、教誨を爲る時、かれらに答て曰けるは、何ぞ學者はキリストをダビデの裔といふや、

馬太傳を見ると、此時イエスは自分の傍に集り來りしパリサイ人等に對して、此問を發し給ふたのである、然るに「こゝに答へて」といふ一語があるが、これは何か彼等と問答の折それが端緒となつて、此問を出されたものと察せられる、イエスは今迄に種々なる宗教問題に對して、逐一應答せられたが、然し當時の一大問題たるキリスト其者に關する問題は、誰も提出して居らない、此問題は、イエス御自分にも、非常に關係あると共に、又これが明白に解決されるれば、パリサイ人等も、必ずイエスに頭を下げねばならぬことゝなるのである、それ故、イエスは進んで、此問を發

して、彼等に反省を與へ給ふたのである、さて此提案に對しても、イエスはやはり彼等の武器たる舊約書を引用して、彼等自らが處決せねばならぬやうな方法を採られた、即ち爾曹は一般にキリストを、ダビデの裔と見とめて居るが、これはたゞキリストの一方面を見て居るのみである、聖書はキリストの他方面をも明に示して居る即ち

(卅六) それダビデ、聖靈に感じて、自ら云ふ、主わが主に曰けるは、我爾の敵を、爾の足臺となすまで、我右に座せよと、

これは詩篇百十篇一節の語であるが、此百十篇はメシヤの全勝を歌つたもので、此節の意はエホバ、我主に曰はるゝには、爾が全く敵に打勝つまで、わが榮光の座に座すべしとの義である、こゝに主とあるは、即ちメシヤを指したものであるから、イエスは之に批評を加へて

(卅七) かくダビデ(は)自ら彼を主と稱へたり、然らば如何で其裔ならん乎、多の人々喜びてイエスに聞ことを爲せり、

昔アブラハムは、イサク、ヤコブ又は自分の子孫に對して「主」と呼んだことはない、然るにダビデのみは、自分の後裔より出づるメシヤを主と呼んだ、これは何故であるか、これに對する返答はこれである、即ち肉體の系統によれば自己の裔で

あるけれども、其性質よりすれば、神の直系であるとの意を示したものである、さてイエスの此見解は、舊來のメシヤの思想を、政治的より靈的に上げ給ふた點が明に察せられる、從來ユダヤ人はメシヤ（教主）の來臨を希望して居るが、其メシヤとは、たゞ此世の賢君聖主の如き者であつて、ツマリ再びダビデの位に上るもの、語を代へて言へば、偉大なる英雄の再臨と見て居つた、其點からいへばメシヤが、ダビデの裔より出づるといふ許りの信仰で十分である、然しメシヤは、實際斯る現世的、政治的のものではない、其祖先たるダビデ王さへも「主」と敬ふ萬人の信賴すべき者でありとすれば、それは決して此世の賢君聖主のやうなものではない、全く神の人、宗教的に崇拜せらるべき方であることが解る、斯る意味は、詩篇にも明白に示されてあるに關らず、當時の學者等は、一向それに注意せず、やはりメシヤは政治的王者なりと見、たゞダビデの裔より來るものとのみ信じて居るは甚だ淺薄である、詰問せられたのである、馬太傳の方を見ると、イエスの此詰問には、「誰一人これに答ふること能はず」とあつて、彼等は大いに返答に窮したものと思はれる、然し此問答を傍聽し居たる、數多の人々は、イエスの答辯振といひ、又此詰問といひ、

如何にも一種の權威が備はつて居て、平素横柄なる態度で、傲然とかまへて居た學者等も文盲者同様たゞ目をバチツカセ、何の返答も出來ない有様を見て、いよゝゝイエスを尊敬し悦んで其教を謹聽したのである、

思ふに此最後の問答の如きは、確に當時の學者等の胸中に、一道の新光を傳へたものであらう、此時イエスは、自分の意見を語らず、たゞ聖書を引照しての反問であるから、彼等にして、もし虚心坦懐、此等の意義を了解せしならば、彼等は直に其間に應じてイエスに謹聽するに至つたであらう、

十一、學者とパリサイ人に對する諷刺（第十二章卅八節以下四十節）

然し彼等は、イエスに兜を脱いで、降參したとあつては、如何にも殘念で堪らぬから、ワザと其心を剛愎にして、知らず顔に押通さうとした、此精神を見られたイエスは、彼等の偽善虛妄にして、内心に宗教家らしからぬ風の存するを、實に憤慨せられた、されば三十八節以下四十節の激語は、斯様な精神から現はれたもので、これは馬太傳第二十三章一節以下三十九節、路加傳第二十章四十五節以下四十七節

にも見えて居る、但し本書と路加傳とは、よく一致して居るが、馬太傳の方は、少しく其趣を異にしてパリサイ人等の罪を責めらるゝ所に、此事が記されてある、

(卅八) イエス教をなせる時、彼等に曰けるは、長き衣服を衣て、歩き、市上にて人の問安

(卅九) 會堂の高座、筵席の上座を好み

(四十) また寡婦の家を呑み、いつはりて長き祈をする學者を離れよ、彼等の罪せらるゝこと最も重し、

三十八節の「彼等に」の語は、省く方が宜しい、「長き衣服であるく」とは、いかめしき法衣を着けて、如何にも、宗教家のござるといふ風體で、意氣揚々と歩む有様である、又市上の問安とは、途中にて出逢ふ人毎に、「先生く」と丁寧なる挨拶をうける、これが彼等にとりて、大なる名譽であつたのである、又彼等が會堂に入れば、必ず上座に就くものゝやうに心得て、少しも謙遜の態度を見せない、宴會の席などにも矢張り上座に座らねば、氣に入らない、かういふ傲慢な風があるかと思ふと、他方には、甚だ卑屈な心に充ち、金満家の寡婦などに對しては、うまく言ひふくめて、其財産をせしめやうとする、澤山の禮金を貰へば、殊勝らしく長い祈禱をする、イエスの如き聖者の眼から見れば、彼等のなす處は、實に嘔吐に堪ない次

第で「彼等の罪せらるゝこと尤も重し」と痛罵せられたのも、決して無理ではない、然し此パリサイ的の弊風は、我々キリスト教の牧師傳道師中にも、感染されぬではない、随分名のある先生方が、汽車は中等以上でないといふ氣に入らぬ、少し粗末な宿屋に泊めらるゝと失禮な待遇だなど不平を鳴らす、愛の説教や謙遜の傳道をしに來た牧師先生が、一廉の不興で歸つて往かるゝ、然し黄金ある者に對すると、全く別人のやうになつて仕舞ひ、其人の信仰が、如何であらうが、皮肉な言をあびせかけられやうが唯々諾々、御無理御尤主義を通して居る、何がなしに、傳道費にありつくか、寄附金でもして貰へば立派な信者様で、誰にでも低頭平身をする、さうして他方には、殊勝らしい人格論や、正義仁愛の説教をする、斯いふ人間をイエスが御覽なされたならば、定めて憤慨のあまり、「彼等の罪せらるゝこと最も重し」と御叱りなされるに相違無からう、兎に角御互に陥り易い此惡弊は、よくよく氣をつけて、古昔のパリサイ人のみを咎めてはならぬ、

十二、寡婦のレプタ (第十二章四十一節以下四十四節)

イエスが此等の話をして居らるゝと、偶然にも自己の所感を、一層強からしむる事實を目撃なさつた、即ち真心から神に仕ふるものと、外貌の體裁を飾れる偽善者との面白い對照を、目前に御覽なさつたのである、それは、四十一節以下四十四節にある事實譚で、これは路加傳第二十一章一節以下四節にも載せてある、

(四一) イエス賽銭の箱に對して座し、人々の錢を箱に入るゝを見給ひしに、多の富者は多く投入たり、

(四二) 一人の貧き寡婦來りて、レプタニを投入るゝ、こは四厘程なり、

神殿の賽銭箱とは、其頃銅造の十三個の箱があつて、何れも婦人の禮拜庭の外廊に置かれてあつたのである、此處へ或る一富人が意氣揚揚と參つて、澤山の黄金を賽銭箱に投げ入れた、彼は神殿に獻ぐるよりも傍に觀る人々に「見てくれ、己はこれだけの賽銭を入れるぞ」と言はぬ計りに、悠々と財布から其金を取り出して入れて居た、すると又一人、貧い寡婦がソツト來て汚い手にレプタを握つて、其箱の前に立ち、思ひ切たやうに、それを二枚投げ入れた、イエスは唯今バリサイ人等が寡婦を欺いて、數多の財産を横領する話をして居られたから、其感が一層深かつたであらう、此寡婦も、或はバリサイ人の惡計の爲に、痛い目に逢ひその財産を盡くし

て仕舞ひ、今日は食ふや食はずの境界に陥つたものではあるまいか、然し彼女は、昔し欺かれたる人心に懲りて、今は全く神に信頼し祈願をこめ、其冥護を祈つて居たが、今日は持ち合せたる金銭は、僅にレプタ二枚、即ち四厘ほどに當るのみであつたが、彼女はそれを盡く獻じて仕舞つた、此有様をツクツク見て居られたが、

(四三) イエス其弟子を召て、彼等に曰けるは、誠に我汝等に告げん、箱に投入れし凡の人々よりも、此貧き寡婦は、多く投入れたり、

(四四) そは、彼等は皆其餘れる所を以て入れ、此婦は、その不足こころより、凡の所有即ち全業を悉く入れたれば也、

俗に長者の萬燈よりも、貧者の一燈といふ諺があるが、此話はよく其意義を表はして居る、此兩人の爲す處は、何れも感謝の善行を致すのであるから、行爲上よりいへば、双方共に善事である、然し其精神を叩いて見ると、一方は、費ひ餘しの金を獻じ、他方は出來ない、中から、己れの身を節して献じた、イエスの見らるゝ處は、金高よりも其金を通して表はるゝ精神に存したのである、又此富者は、富者らしい態度で、神の前に獻するといふよりも、人に見せるといふが主となつて居たやうである、此寡婦の投じたレプタ二枚は、人前には、實にツマラスもの、蔑視さるゝ程少額のものであるが、彼女が捧げしは、たゞ神への御恩報じと思ひ、金錢其の

ものや、人間の批評は、何とも思ふて居らなかつたのである、兎角我々は他人の手前をつくらふ弊があつてならぬ、これは屢々陥る處であるが、イエスは我等の心根に立入つて、其行爲を判断せられる、この點は我々の注意すべき所である、

十三、エルサレムと世界終末の預言 (第十三章一節以下卅七節)

イエスの神殿に於ける行働が一とまづ結了致したから、彼は弟子等と共に、其處を退去せらるゝ時、神殿の宏壯なることにつき、圖らず弟子等と一場の間答が始まつた、本章一、二節は即ちそれであつて、これは馬太傳第二十四章一、二節、路加傳第二十一章五、六節に掲げられてある、

(一) イエス聖殿より出でければ、一人の弟子彼に曰けるは、師よ觀たまへ、此石、此殿宇如何に盛ならず乎、

此頃の神殿はかのヘロデ大王が、ユダヤ國民の歡心を得んが爲めに、大修繕を加へ、其工事に四十年もかゝつたといふ程であるから、よしや古代のものには、優らずとするも、ナカク太した宏壯美麗なるものであつた、其構造に用ゐられたる石材の如きは、實に驚くべきもので、ヨセファスの歴史によれば、其中の大なるもの

は、長さ五十五尺以上もあり、普通のものでも長さ三十七尺、高さ十二尺、幅十八尺位のものであつたとの事である、弟子等は、斯る大構造の建築を見て、今更の如く驚嘆すると共に、思はず此間を發したのであらう、其時

(二) イエス答て曰けるは、爾曹、この大なる殿宇を見るか、一石も石の上に毀れずしては遺らじ、

弟子等も、矢張り此世で目を驚かす計りのものには、心を奪はるゝと見えて、宗教界の事も、斯の如き、宏大なるものが伴はねばならぬと感したのであらう、さきに、イエスは富者の多額の獻金を斥けて、貧婦のレプタ二枚を賞し給ふたが、然し此世で宗教事業に成功するには、寡婦のレプタ位では往かない、矢張り、大なる殿宇も必要、豪壯なる巨石も大切、此世の目に見ゆるものに、信仰の基礎が立つのではないかと、これが恐らく弟子等の考であつたかと思はれる、然るにイエスは、身に一物なく、根據とすべき邸宅もない、成程神殿は天父の邸宅であらうけれども、然し祭司等が支配して居る間は、イエスの自由にはならない、イエスには精神上の勢力はあるが、然し此世に對しては、無一物である、これは將來の事業成功の爲に、何となく心元ない感がする、弟子等の間に斯いふ感があつたと見える、此物寂しい

感に對し、イエスは嚴然として戒めて、外觀斯の如き豪壯なる殿宇も、何時しか、其石が石の上に並ぶものもなく、全く壊滅し去つて、跡方もない時が来る、之が即ち世の事業の終局である、ことに此世の勢力を借りて宗教を維持せんとするもの、運命は斯の如しと教へ給ふたのである、思ふにイエスの此時の語は、遠からずユダヤ國に来るべき運命を前見して言はれたものである、これを聞いた弟子等は、此驚くべきイエスの語に、少からず胸打たれたと見え、尙これに對する詳細の事柄を聞かんとした、即ち三節以下八節が其記事である、これは馬太傳第二十四章三節以下八節、路加傳第二十一章七節以下十一節にも記されてある、

(三) イエス橄欖山にて、殿に對ひ坐し給ひしに、マテロ、ヤコブ、ヨハネ、アンデレ癩に問けるは、

(四) 何の時、此事あるや、又凡て此事の成ん時は如何なる兆あるや、我等に告げ給へ、

イエスが橄欖山上より、神殿を瞰下し給ひつゝ座し給へる間には、一種言ふべからざる感慨を催ふられたであらう、其時十二弟子の筆頭たる、四人の者等が、先刻のイエスの御言に對して、尙詳しい説明を求めた、此質問の中には、神殿没落の時と、メシヤ再臨の徴候と、世界の終末の三につきての問題が含まれて居る、イエス

は此等に對して順次に答へ給ふたのである、

(五) イエス答て彼等に曰けるは、人に欺かれざるやうに慎めよ、

(六) そば多の人、わが名を冒し來り、我はキリストなりと曰て、多の人を欺くべし、

これからのイエスの談話中に、「慎しめよ」の語が屢用ひられて居るに目を注めねばならぬ、(九、二十三、三十三節等) 此の頃ユダヤ人一般の間には、非常にメシヤの來臨を熱望して居つた、それを利用して、我は救主なりと名のりつゝ、當時の國民を惑亂して、騒動を起さしめた者も少くはなかつた、これより二十餘年以後ユダヤ國がロマの大軍をうけて、滅さるゝに至つたのも、全く此偽メシヤの誘惑に起因したのである、

(七) 爾曹、戦の風聲を聞き、懼るゝ勿れ、是等の事は、皆あるべき也、然ども末期は未だ至らず、

(八) 民は起て民を攻め、國は國を攻め、又隨在に地震あり、饑饉變亂あり、是等は苦難の始なり、

こゝにイエスが、弟子等に注意せられたことが五點ある、即ち、(一) 偽豫言者の起ること、(二) 戦争の風評、(三) 國民相互に攻合ふこと、(四) 地震、(五) 饑饉である、然しこれ等は、未だ懼るゝに足らず、何となれば、これ等は皆苦難の初歩であること

仰せられた、八節の「苦難」の語は、原語「産の苦み」の義である、ユダヤ國が、世界的キリスト教を産み出す爲には、實に大苦痛をせなくてはならぬのである、又こゝに「戦争」とあり、又「地震、饑饉」とある語は、皆實際エルサレム滅亡時代に起つたものであるから、此等の豫言は、世の終末の事を言つたものとするよりも、寧ろエルサレム滅亡の事に關係して居ると見るが適當である、然し多數の學者は、これより以下本章の終までの豫言は、隱約の間に、世界終末の状態を示されたものと見て居る、アルフォルト博士は、こゝを註釋するに「ユダヤ國の死の苦痛が、一般の基督教會の新出に先立つて起りし如く、此世界の死の苦痛は、又新天地の來る以前になかるべからず」と言つて居るが、大に此邊の消息を解した語と思ふ、

九節以下十三節は、迫害の豫言で、これは馬太傳第二十四章九節以下十四節、路加傳第二十一章十二節以下十九節にも記されてあるが、路加傳の方では、エルサレム滅亡に關することを、一層直接に示されたる點が多く見える、

(九) 爾曹自ら慎めよ、蓋爾曹集議所に付され、又會堂にて鞭たれ、且證を爲さん爲、我事に因て侯及び王の前に
曳立たるべし、

此言を吐かるゝキリスト御自身は、これより五日經たぬ間に、集議所に引往かれ給ふた、又其弟子等も、同様の迫害に逢ふたのである、使徒行傳を見ると、パウロやペテロは、證の爲に鞭刑をうけたり、又ある機會には、王侯の前に出で、此教の爲に滔々と陳述したことは、この豫言の通りである、

(十) 而して福音は、まづ萬民に宣傳へられざるを得ず、

此豫言を開ける弟子等が、未だ此世を去らない間に、此教は早くもロマ帝國の領内に及びアラビヤからダマスコまで、エルサレムからイルリコまで、今日の以太利、西班牙地方にまでも及んだ、こゝに「まづ」といふ一語あるに注意せねばならぬ「遂に」ではなく「まづ」である、キリスト教の事業は、劈頭第一、ロマの全天下に流布せらるゝことであつた、然し此宣傳は、決して今日のやうな平々凡々たることでは、出来なかつた、其傳道者は、血と火との苦痛を甘受するの覺悟がなくてはならぬ、然し傳ふる事柄は、別にキリスト教の道理を説いたのでなくして、たゞ神の言、そのものを證したのである、イエスは此精神からして、覺悟さへあれば、傳道はさのみ困難ではないとの事を述べられるので、即ち

(十二) 爾曹を曳き解さば、以前より何を言んぞ慮り、又思煩ふ勿れた。爾曹其時賜ふ所の言を曰ふべし、それは物言ふは、爾曹にあらず、聖靈なり

「物いふは爾曹にあらず聖靈なり」の一句は、實に初代キリスト教傳道者の眞精神を現はした語である、今日の傳道者や信者等が、頻に傳道くと叫んで、大金や勞力をかけて運動するが、其割合に人心を動かし得ないのは、全く此一句の實驗がないからである、否此一句を度外視して居るからである、今日の傳道は「物いふものは聖靈にあらず我なり」といふやり方が多いのである、

(十二) 兄弟は兄弟を死に付し、父は子を付し、亦子は其父母に逆ひて之を死しめ、

(十三) 又爾曹は我名によりて、凡の人に憎まれるべし、然終まで忍ぶ者は救ふ、こゝを待ん、

支那の諺に「大義親を滅す」といふ語がある、イエスは、自己の教の爲には、家族近親の中にも必ず迫害する者が起る、又普通の道徳や國家的觀念から見ると、實に不忠不孝の行爲、賣國亂憲の所爲のやうに見ゆることが出来て、種々なる憎惡の下に罵詈せらるゝこともある、然し其等を最後まで忍耐する者にして、初めて我弟子であり得ると激勵せられた、こゝにある「終まで忍ぶ」といふ一事は、男らしい

勇敢の根本である、思ふにキリスト教の勇氣といふ方面には、何時も此忍ぶといふ徳の養成さるべきことを尊んで居る、

十四節以下二十三節は、エルサレム滅亡の徴候について語らるゝのである、即ち其滅亡の近づけること、又弟子等が、此時の災害を脱るべき方法をも述べられた、これは馬太傳第二十四章十五節以下二十五節、路加傳第二十一章二十節以下二十四節にも掲げられてある、ことに路加傳には、エルサレムの包圍せらるゝことや、其没落の状態までも、詳しく記されてある、

(十四) 預言者ダニエルが言ひし所の殘暴にくむべきもの、立つべからざる所に立つを見ば(讀者よく思ふべし)其時エダヤに居る者は山に逃れよ、

豫言者ダニエルが言ひしは、但以理書第九章二十七節を指したものであらう、然し此一句は、以前は本文になかつたので、後に挿入せられたものであるから省いて見る方が可いといふ説もある、「殘暴憎むべきもの」とは、ロマの軍隊を指したので、當時ロマの軍旗には鷲の徽章がついて居た、此の軍旗の下にあるロマ兵は至る處に殘暴を縦にして、人々に憎惡せられて居たから、イエスが、これを指して言はれたもの

であらうと思ふ、然しある學者は、これを以て、ユダヤ人中の狂熱黨の事を指したものだとし、彼等は何の思慮分別もなく、無暗にロマに反抗して、人民を煽動したのであるから、イエスは彼等が神殿に集つて、公然反旗を翻すに至る時は、ユダヤは、既に没落に臨む時であると豫言せられたものであると説く、然し私はやはりロマの軍隊と見る方が、面白く、又穩當と考へる、即ちロマの軍旗が、聖城エルサレムに翻る時は、これユダヤ滅亡の時であるから、其國民は、其難を避けて、遠き山に脱れることが必要であると教へられたのである、さて當時の歴史の示す所によると、此時キリスト信者等は、イエスの此言を記憶して居たと見えて、これより二十餘年以後に、ロマの軍隊が、いよいよエルサレムを圍まんとする時、逸早くベリヤの山々を越えて、ベラといふ市街に遁れたといふことであるが、其餘のユダヤ人は、此際必ず神の冥助あるべしと信じて、何處へも逃げず、盡くシオン山に集まつた、處が間もなく、ロマ軍に包圍せられ兵糧責になつて、實に無慘なる最後を遂ぐるに至つた、斯くの如くイエスの豫言が的確に適中したることは、本傳の著者が、此書を書きしるす時分既に一般の基督信者の實地目撃する處となつて居たから、彼等の間に

は、一層イエスの此言の顯著なるに驚いたのであらう、故にその事を想起せしむる爲め、「讀む者よく思ふべし」の一句を殊更に附加してあるが、尤も此一句は括弧的に見るべきものたるは勿論である、

(十五) 屋の上に居る者は、室に下る勿れ、又物を取んご其家に入る勿れ、

(十六) 田に居るものは、其衣服を取んごて歸る勿れ、

これ敵の進撃が、實に急激であるから、遁るゝ時分には、一分も猶豫せず、又財產衣服等には少しも目をくれずして、早速に遁れよとの義である、

(十七) 其日には、孕る者と、乳を哺する婦人は、禍なる哉、

何故なれば、身重の婦人や、足纏の嬰兒のある婦人等は、遁去る機會を失ふ懼があるからである、

(十八) 爾曹冬迷るゝことを得ん爲に祈れ、

何故なれば冬期は寒氣強きのみならず、風雨又は洪水等の天災があつて、遠方に避難するには、實に困難である、馬太傳には此他に「安息日に免れん爲に」ともある、然るに實際、歴史上の記録によると、ロマ軍隊がエルサレムを包圍し始めたのは、

紀元六十六年十月の初であつて、此頃は氣候も温和に、又旅行に最も適した時期であつた、又ユダヤの律法では、安息日には二千エル(即ち二里弱)以上は、旅行が出来ないといふことになつて居たから、當時のキリスト信者が、遠く逃げる事が出来たことから考へても、此包圍は、安息日以外の日であつた事が推察せられる、思ふに信者等は、イエスの此教訓を奉じて、遁逃の時日の都合宜しからんことを祈つて居つた、其結果であつたと申しても差支はない、

(十九) 其日に患難あらん、此の如き患難は、神の物を創造給ひし開闢より、今日に至るまであらざりき、亦後にも有らじ、

歴史家ジョセファスの著書によると、當時ユダヤ人が包圍を受けつゝありし間の慘状は實に言ふに堪へない有様で、疫病は流行する、饑饉が襲ひ來る、外方へは一寸も出られず、それが爲に、マリヤといふ一婦人の如きは、我子を殺して之を焙つて食つたといふことである、さうして、其結局エルサレム落城の時には、百二十萬の男女が殘殺され、其他の者は、或は奴隸とせられ、或は猛獸の餌に供せられ、死骸は山をなし、血は河をなす程であつたといふ位である、實にイエスの言はるゝ如く、此時の慘劇は、歷史上空前絶後の光景と斷言して差支へない程であつた、

(二十) もし主其日を減少し給はずば、一人だに救はるゝものなし、然る主の選び給へる所の選ばれし者の爲に、其日を減少し給ふべし

實にイエスの言の如く其時の包圍が、尙久しく繼續するならば、ユダヤ國民は、確に全滅したに相違ない、然るに不思議にも、主に選ばれたもの、即ちキリスト信者の爲に其時日が簡短にせられた、其簡短にせられた原因は、數ヶ條ある、(イ)これより先き、ヘロデアグリツバ王が、ロマ軍の萬一の攻撃を防がん爲に、盛に城壁を堅固にして居たが、紀元四十二三年の頃、ロマ帝からこれを差止められたので、中止致したごと、(ロ)ユダヤ人中に、黨派が分れて、舉國一致して防禦せなかつたこと、(ハ)兵糧の大半が敵軍進撃以前に焼失して仕舞つたこと、(ニ)敵將タイタスが、不意に來襲したるが爲に、ユダヤ人は其城壘を打捨つたこと、(ホ)ロマに於てある大事件が起りし爲に、タイタスは急に此市街を攻落すべしと決心したること、等である、これも不思議にイエスの言が適中して居る、

(廿一) 其時、もしキリスト此處にあり彼處にありと、爾曹にいふ者あるも信する勿れ、

(廿二) そは偽キリスト、偽預言者おこりて、休徴と奇能を行ひ、選ばれたる者をも欺くことを得ば、欺くべければ也、

(廿三) 爾曹慎しめよ、我預め爾曹に悉く之を告ぐ、

元來當時のロマ軍隊の襲撃を受けたのも、あるユダヤ人が、自ら救主であると唱へてロマの塗炭より此國を救ふべしなど、誇稱して、ユダヤ人を煽動して謀反を起したが原因となつたのである、此戦争は紀元六十六年の末から七十年までつゞき、七十年の八月に、エルサレムは全く灰燼に歸して、九月にはロマ兵の占領する所となつた、然しユダヤ人は、尙本國內に止ることを許されて居た、其間にも、例の偽救主偽豫言者が再三起つて國勢を挽回せんとして、叛亂を企てたが、遂に紀元百三十二年に至つて、星の子と稱するシモンなる者が救世主と自稱して、激烈なる反亂を起したので、ロマ政府は再び軍隊を派遣し、三年間の戦争の後、遂に全然ユダヤ國を亡滅して、其國民を本國より逐出した、ユダヤ人は其以來今日に至るまで、流浪民族として、各國に漂泊する身となつたのである、あゝ當時のユダヤ人が、もしイエスの此警戒を慎んで守りしならば、今日の如き悲惨なる亡國民とはならなかつたであらう、

二十四節より二十七節は、人の子の降臨につきての徴を述べられたもので、これは馬太傳第二十四章二十九節以下三十一節路加傳第二十一章二十五節以下二十八節

にも記されてある、さて此段よりは、イエスが自己の再臨について語られると共に、廣義に於ては、本章四節にて弟子等の問ひたる「此事」の成就せらるゝことを暗示するるのである、

(廿四) 厥時この患難の後、日は晦く月は光を失ひ、

(廿五) 天の星は落ち、天の勢ひ震ふべし、

イエスは、エルサレムの大患難の後、天地破壊の事あるべきを説き出し給ふた、然るに其後とは、何時まで後なるやは不明である、三十一節を参考して見ると、キリスト御自身すら、知らないと言明して居られるから、エルサレム滅亡の直ぐの出來事とは考へて居られなかつたことは確である、然しイエスの胸中には、此天地の滅亡する期あることを確信して居られたに相違ない、馬太傳には、尙他の事柄が書加へてある、又路加傳は、大に其趣を異にしたる文にて、此主意が載せられて居る、さて物質界の破壊の記事は、彼後書三章一節以下十三節にも、又黙示録二十、二十一兩章にも、こゝと似たる記事が掲げてある「天の勢」とは、此世界に大影響を與へつゝある天体を指したもので、即ち日月は勿論、諸の星辰までも破壊して、諸天

体に大震動の起ることを意味したものであらう。

(廿六) 其時人々は、人の子の大なる權威と榮光を以て雲の中に現はれ来るを見ん、

これは、イエスが自分の再臨を告げ給ふ言とより、他に解釋せられない一節である、イエスの胸中には、自分は、確に此世に再臨すべきものだど確信して居られた、而して其時は、彼自ら審判者の權威を以て来るものと信じて居られた、のみならず、

(廿七) また、人の子其使等を遣して、地の極より天の極まで、四方より其選れし者を集むべし、

イエス再臨の時には、天下凡の處にある信者を集むべしとの主旨である、さて、イエスは、自己の再臨の節は、靈界の王者たるべしとの考は、彼の心中に明白であつたやうである、さればパウロやペテロ及びヨハネなども、後にイエスは末世の審判者として來り給ふとの思想を傳へたのは、無理ならぬことである、ある學者等は、イエスを神として崇拜し出したのは、パウロから始まつたので、イエス其人には左様なことはなかつたと論するが、此節の如きを、イエスの直話とする以上は、イエス自己の意識にも、自分は將來の審判者を以て任じて居られたことを、否認するわけには往かない、

さてイエスは、尙一の譬喩を引いて、此説話を終らるゝのである、即ち二十節以下三十七節がそれであつて、これは馬太傳第二十四章三十二節以下五十一節、路加傳第二十一章二十九節以下三十六節にも掲げてある、其中二十八節以下三十一節は、語々殆ど馬太傳と似て居る、然し路加傳第二十一章二十九節以下三十三節の書き方は、少しく異つて居るが、其思想は同一である、然るに此段の後半部は、三傳何れも其記事を異にして居る、即ち馬太傳にはノアの時代のことを引て、主の來る日の不意なること、又盜賊の夜來るが如く、主人が其僕を驚かすといふ物語を載せて居るが、路加傳には、たゞイエスの訓言だけを載せて居る、本傳には馬太傳の譬喩が、少しく記されてあるが、然しそれも門番の譬となつて居る、さりながら、何れも、注意警戒せよといふ精神を述べたることは同一である、

(廿八) それ爾曹無花果樹に由て譬を學べ、其枝既に柔にして、葉めぐれば夏の近を知る、

無花果は、實が生じて、其葉が茂り來ると、其果の成熟時期に近づくのである、さてイエスは、さきに葉ありて果のなき無花果につき一の教訓を垂れ給ふたが、こゝには其枝の柔く葉のめぐる樹について、亦他の教訓を垂れ給ふのである、其間

には、何となく思想の關係があるやうに思はれる、アルフオード氏は之につきて曰く、「さきに果のなき無花果樹によりて、當時のユダヤ人を判定し給ひしが、こゝには、冬の荒涼なる處より無花果樹の葉の芽ぐむ譬喩によりて同じくユダヤ人の將來の復興を示し給ふた」と、これは面白い觀察と思ふ、

(廿九) 斯の如く、爾曹も凡て此等の事を見れば、時近く門口に至るぞ知れ、

「此等の事」とは、以上の休徵を指したもので、「門口に至ると知れ」とは、一書には、「彼が門口に至ると知れ」との意に譯して居る、ヤコブは、此意からして「視よ審判する者、門の前に立てり」と記して居る、(雅五〇九) 此一句は、實に簡にして然も嚴肅なる語である

(三〇) われ誠に爾曹に告ん、是等の事盡くなるまでは、此民は逝ざるべし、

「此民は亡せざるべし」に兩説ある、一は此民とは、當時の人民を指したもので、即ちエルサレム滅亡の時、彼等はこゝに説ける言を、一々實驗するであらうとの義である、然しこれは餘り單純な見解で、後の三十二節の言とは調和せない處もある一は、此民とは、ユダヤ民族といふ意に解し、此民族は、凡て此等の事柄が成就す

る日まで、殘存すとの義に解するのである、然し「民」の原語を民族と解するは、餘程無理な仕方であるとの説もある、私は此説話の主意よりすれば、後者に解するが穩當であらうと思ふ、又或譯には「此民は逝ざるべし」を、「此代は過ぎざるべし」としたのもある、これ等は讀者の判斷に委すこととする、

(卅一) 天地は廢ん、されど我言は廢せじ、

イエスが斯る斷言をせらるゝには非常なる確信と、大なる權威を以てせられたに相違ない然るに、イエスの此斷言は、エルサレム滅亡の事件の外は、今日に至るまで成就して居らない、ある派の信者は、數百年以前から、末日が近い近いと、頻に絶叫して居るに關はらず、今に其日は來らない、さらばイエスの此斷言は、失敗に終つたものであらうか、私の見る處によれば、イエスは世の終末の確なることは斷言し給ふたが、然し其實現が、果して何時に起るか、ことに再臨の一事につきては、イエス自己の心中にも、判然其時日を見止めて居られなかつたと信する、されば、

(卅二) 其日其時を知るものは、たゞ我父のみなり、天にある使者も、子も誰も知る者なし、

と斷せられた、此意は、其事件の起る時期は、たゞ天父の御意の中に存すること

であるから其遲速は、我々人間の關する所ではない、何故なれば其日其時は、天使も自分も之を知るなしと明言せられたのである、然し其日が知られざるからとて、之を無頓着視するは、これぞ不信仰者の心である、何時此大事件が起り来るやも計られずとて、常に其準備をなし居るは、これ信者の心であらう、故に、

(卅三) 此日いづれの時来るかを知らざれば、爾曹慎みて目を醒し、祈禱せよ。

神の爲し給ふ事業については、我等は其時日の遲速に關せず、常に用意して居るといふ精神が、最も大切である、もし其用意さへあれば、其出來事が、何時來らうとも、更に頓着すべき事ではない、これにつき一言申しておきたいことは、ある一派の信者の如く、末日審判の時日が、もう今日明日にでも來るやうに言ひ立て、其時日が如何にも切迫して居るかの如くに説いて脅喝的に信仰を引き立てやうとするのは甚だ感服出來ないと思ふ、キリストすら、其日其時は知らずと仰せられて居るに、自分等が、如何にも知つた顔に、近いと公言するは、弱い信者を恐怖せしめるのみならず、實は天父に對して大なる不敬の所爲であらうと思ふ、此事につき紀元一千年の頃、世の終末が來ると、頻りに公言した者のあつたが爲に、歐洲にて

熱心なる信者等は、もう此世の存在も僅であるから、働いたり學んだりする事は無用であると思ひ、持てる財産を盡く投げ出して仕舞つて、さて何月何日と言ひふらされた其日を待つて居た處が、別に何事もなくして済んだので其が爲に非常に困難する人々を生じたといふ歴史が残つて居る、これは、聖書が悪いのでなく、聖書を解釋する者の罪であつて、彼等が餘りに知つた顔に、神の秘密を解釋しやうとして、却つて多の人々を誤らせたのである、私は今日に於ても、往々左様な言を耳にする事がある、これは傳道者の解釋に従はずして、宜しくイエスの御言に聞かねばならぬ、全体キリスト再臨の問題は、時間の問題ではなく、用意の問題である、もし我々が常に警戒して、心に用意する處あれば、末日が明日來るとも、一萬年以後に來るとも、そんなことは我々の問ふ所ではない、時日の事は、神様の御心にあることで、天使も人の子も誰も知るものなしと言はれて居る、尙以下に、イエスの話さるゝ門番の譬喩の如きも同様で、これは時日の遲速に關した話でなく、心の用意の緩急に關したことであることを、くれぐれも忘れてはならぬ、さて古代の聖書には、此節の「祈禱せよ」の一句はない、改正譯本にも、此一句を削除して居る、

(卅四) うれ人の子は、遠行せんとして、其權を僕等に委ね、各々に爲すべき事を告げ、又門番に怠らず守れと命じて、家を去る人の如し、

(卅五) 是故に爾曹も怠らずして守れ、そは家の主人、或は夕或は夜半或は雞鳴く時、或は早晨に歸るかを知らざれば也、

こゝに夜の四時、即ち九時と十二時と三時と六時の時間割が、特別に記されたるは、面白い譬喩と思ふ、これは夜間不意の時刻に主人が歸り来るの意を示したものである、主人は自己の不在の間は、自分に代りて、凡の事を處理すべき權威を、僕等に委託した、其通り神は我々の力量に應じて、相當の天職を我々に與へられて居る、さうして暫時他國に旅行せる主人の如く、神は我々の此世にある間は、直接何の干渉もせずして、人間の爲すがまゝに委託して居らるゝそこで我々は、委託せられたる責任を、忠實に守るか守らぬかは、自己の意一つにある、然し委託せし神は必ず其責任を問ひ給ふべき時を忘れ給はぬ、其時は何時か判然せないが、突然不意の時に現はれ来るであらう、さて三十四節の初句に「それ人の子は」とある一句は原文にすると、「恰も人あり家を去つて旅行する時……と命ずるが如し」として人の子の句は、明に顯はれて居ない、そこで私は此主人を神と見るが可いと思ふ、

(卅六) 恐くは不意の時來りて、爾曹の眠るを見ん

主人の不在に氣をゆるして眠つて居る處を突然叩き起さるゝは、僕として實に面目ない事であるのみならず主人に對する職責を完ふせざる懈怠の罪も、言ひ脱がるゝことは出来ない、

(卅七) われ怠らずして守れと爾曹に告るは、即ち凡の人に告る也、

此意は、今我が汝等に告ぐることは、又凡の人々にもいふのである、即ち汝等怠らずして守れとの一事であるとの義である、「怠らずして守れ」の一句は、英語には Watch といふ一語で譯してある、即ち「覺醒せよ」の義であるが、これは日本文より餘程語氣の強い感を有たしてある、又馬太傳の方には、此他に十人の女子の譬喩と、黄金を委託する譬喩をかゝげ、終りに人の子が再臨の時、綿羊と山羊を分つ如く、人々を審判し給ふの話のをせて居る、かくて橄欖山上の説教は、一とまづこゝに其終を告げた、

馬太傳には尙前にもいへる如く、次の説話が出て居る、

一、十人の處女の話(太廿五〇一―十三)